

バードアイランド

新上五島町



2017

鴨川誠 共著  
新上五島町

## 発刊によせて

水平線の彼方から真っ青な青空の下、悠々と飛び交うさまざまな鳥たちが、今まさにバードアイランドを目指しやって来る。そんな情景が目に浮かびます。

この度、念願であった「バードアイランド新上五島町」を発刊するにあたり、ご執筆いただきました鴨川氏には文化的景観保存調査での成果とあわせ、長年独自に調査・観察されました研究成果を惜しみなくご提供いただき、心より感謝申し上げます。

氏は50年、いわば半世紀もの長きにわたり生態系の専門家として新上五島町に携わっていただき、本町での研究成果の集大成とも言えるこの「バードアイランド新上五島町」の発刊を今か今かと待ち望んでおられました。

平成20年度の新上五島町文化的景観保存計画策定委員会委員へのご就任と同時に文化的景観保存調査事業に精力的に携わっていただき、現在でも文化的景観整備活用委員会委員としてご活躍いただいております。

本町が合併する以前からこのしまを数え切れないほど訪れている氏は、きっと新上五島町を第二のふるさととしてこよなく愛し、心を寄せていらっしゃることであろうと密かに思っております。

とかく長く住んでいる人には地元の魅力になかなか気づきにくいものです。絶滅の恐れのある野生生物を含め、希少な動植物が存在することをこの冊子で学んでいただくと、自然豊かなこのしまはまるで鳥たちの聖地なのではと錯覚してしまうほどです。私たちはこのしまの魅力を再認識し、この冊子を島ならではの自然学習の教材として活用することで、しまの未来を担う子ども達に新上五島町の魅力を伝え、さらには、しまへの愛着と誇りを醸成できるよう期待しております。

「宝の島を宝のまま永遠に子孫へ残していただくために」との思いでこの冊子作りにご尽力いただいた鴨川氏の思いを大切に、しまに住んでいる人はもとより、この冊子をご覧いただいた多くの皆様が、上五島に興味を持たれ心癒されるバードウォッチングの旅へお越しいただけますことを衷心より願っております。

新上五島町長 江上悦生

## ま え が き

私は島育ちです。日本海の北に位置し草花が咲き乱れる礼文島、利尻島や佐渡島、山口県の角島、福岡県の玄界島、太平洋の伊豆諸島および南は南西諸島の自然観察で楽しんだ。

国外では韓国の巨済島とその周辺の島々や赤道に並ぶエクアドルのガラパゴス諸島など多くの島々へ「動植物の生態」観察に旅をしました。環境の厳しい島で力強く生きる生き物の生態に感動しているからです。

島の人々の暮らしにも人間生態学の視点から興味・関心があり共感する面がおおいからです。平戸島で誕生したからでしょうか。

もちろん、長崎県内では、対馬、壱岐、平戸、五島列島の島々へ動植物の観察の旅は20歳代から80歳代まで続いている。五島列島への旅の始まりは、九州大学の生態学研究室に在籍していた1959年で、島は段々畑が小高い山の山頂近くまで占めていた。各地の漁港は漁船の出入りで賑わっていた。それ以後56年も五島列島への旅は継続しているが、その間、現地のおおくの方々に生き物に関する情報を寄せていただき観察・調査は実りました。島の方々のご協力、ご支援をいただき、また近年は新上五島町の江上悦生町長さん、教育委員会文化財課の職員など町職員の皆さんと共に観察・調査を実施でき、貴重な動植物が生存していることを明らかにできました。しかし、悲しい出来事も見つかりました。例えば、甲殻類のハクセンシオマネキ（方言名たうちがに）の生存が、昔は町内の各地の入江干潟に沢山生息していたそうですが、教えていただいた生息地へ大坪文さんの案内でさがし求め廻りました。生存を確認できた場所は残念なことに2箇所だけでした。

このカニは山から川を流れてきた有機物（落葉、ミネラル）を河口の干潟・砂礫地に生息し食物とし有機物を無機物に分解し無機物は、植物プランクトン、海藻類の栄養となりプランクトンを育て植物プランクトンは動物プランクトンの食物となり、動物プランクトンは各種の稚魚の食物となり、さらに稚魚は小魚の食物となり、小魚は中型の魚の食物となり食物連鎖は大型魚へと続きます。



① ハクセンシオマネキ



② ツルキキョウ



③ カラスバト  
(カラスバトは電線によく止まる)

ハクセンシオマネキ①が急激に減少していることは、魚類や海洋生物の減少につながります。このような食物連鎖や食物網が断ち切られている現象も明らかになりました。

また、長崎県が絶滅危惧種に選定しているツルキキョウ②は、山道の沿道の法面に生育していたために刈り取られ「新上五島町内では絶滅」しました。貴重な植物であることが認識されていなかったからの出来事でしょう。

皆さんあまりご存じでなかったウシカフクロウの声に似た声で鳴く「カラスバト」③（栄喜公陽写）は、国指定天然記念物・国選定絶滅危惧種および長崎県選定の絶滅危惧種である貴重な鳥が町内全域に生息していることも現地調査（環境省が定めた三次メッシュ調査）により具体的に明らかになりました。

今回は、生態系の食物連鎖や食物網の上位に位置する「鳥類が豊かな町」を町民の皆さんや島外の方々に認識していただくために「バードアイランド新上五島」として、宝の島として知っていただくため、また宝の島を宝のまま永遠に子孫へ残していただくために執筆しました。

ご一読していただき島の良さを再認識していただければ幸いです。

発刊によせて  
まえがき

## 目 次

### 口 絵

日本で絶滅した野鳥・お隣の国で生きていた野鳥

新上五島で絶滅した野鳥

山野の鳥たち

水辺の鳥たち

### 総論編

1. 位置	2
2-1. 気象	2
2-2. 気温	2
2-3. 降水量	3
3. 植生	3
4. 森林の階層構造	3
5. 鳥相	4
6-1. 鳥類の三次メッシュ調査	4
6-2. 調査方法と時期	4
6-3. 調査結果と考察	4
7-1. 漁港の海鳥（カモメ類）調査	5
7-2. 調査結果と考察	5
8-1. 早起き鳥	6
8-2. 調査地とその環境	6
9. 鳥相（鳥類目録）	7
10. 生息の確認できなかった個体群	11
11. 国指定天然記念物カラスバトの生態	12
12. 環境の変化を語るヒバリ	13
13. 国際条約と新上五島町の野鳥類	14
14. 地球温暖化に伴い北上が予測される鳥類	16
15. 野鳥と木の実の相互関係	16
16. 野鳥の保護	20
17. 自然保護へのいろいろな活動	22
18. 生き物の地方名を後世に残そう	23
19. これから野鳥観察を楽しむ	23

バードウォッチングガイド・自然ガイド（探鳥地案内）

1. 津和崎鼻・灯台・津和崎	28
2. 久志・江袋・番岳・曾根	32
3. 立串・小串・大浦・似首	35
4. 矢堅崎・冷水・奈摩・小河原	38
5. 丸尾漁港・丸尾郷	40
6. 高熨斗岳	43
7. 青方ダム・青方郷・大曾・船崎	46
8. 榎津・浦桑・七日・矢倉岳	49
9. 有川・蛤浜・小河原	51
10. 赤尾・友住・江ノ浜・頭ヶ島	57
11. 一二三滝・太田・蝙蝠鼻	61
12. 相河・跡次	64
13. 今里・三日ノ浦・桂山・佐野原	68
14. 鯛ノ浦・阿瀬津・広ノ谷・東神ノ浦・船隠	72
15. 青木・焼崎・小手ノ浦・飯ノ瀬戸・猪ノ浦・ 浜ノ浦・続浜ノ浦・三本松・迎・小浜	75
16. 道土井・真手ノ浦・高仏・郷ノ首	80
17. 荒川・三王山・栲ノ木・中ノ浦・笛吹・大浦・宿ノ浦	83
18. 浜串・後浜串・中山・岩瀬浦・芦山ノ滝	86
19. 若松・神部・櫛ノ口・土井ノ浦	89
20. 天神山・漁生浦島・有福島・日島	93
21. ウノクソ瀬・相ノ島・瀬戸脇・堤・滝河原・石司	96
22. 須崎・遠見番岳・福見・福見鼻	100
23. 白魚・築地・深浦・横瀬・古里・桐・カズラ島	103
24. 米山・虎星山・奈良尾	106
25. 濁・砥石山・佐尾	110
26. 珍種「シイノトモシビタケ」	114

資料編

表3-1~2. 新上五島町鳥類環境庁三次メッシュ調査結果	118
表4-1~4. 新上五島町の漁港の鳥類調査結果	120
表5. 長崎県野生鳥類の絶滅危惧種カテゴリ定義	121
表6-1~16. 日本鳥類目録改定第7版 および新上五島・沖縄県与那国・台湾・韓国の野鳥	122
表7. 九州地方における生物の「絶滅種数」一覧	137
表8. 九州地方における鳥類の絶滅危惧種数 各カテゴリの総数一覧	137
表9-1~7. 二か国間渡り鳥条約国との選定種および 長嶺県・五島列島・新上五島町の鳥類群集一覧	138
表10. 生き物の標準和名と方言名（地方名）	145

参考文献・引用文献	146
-----------	-----

あとがき

## 日本で絶滅した野鳥



対馬産 キタタキ雄鳥標本（対馬市巖原町の資料館保存）

## お隣の韓国で生きていた幻の鳥



韓国の光陵に生息 キタタキ雌個体



キタタキ雄個体（韓国の元炳旣博士撮影）

現在は韓国でも生息状況はきびしくなったという情報である。北朝鮮にも生息が確認されているようだ。

## 新上五島町で絶滅した野鳥



留鳥のヒバリは環境の変化で生息できなくなった。現在は生息していない。



冬鳥のタヒバリは生息している。ヒバリの代わりではない生息環境が異なる

ヒバリは昭和34年には奈良尾町、有川町、新魚目町に生息していたが、農耕地の畑が耕作されなくなり二次遷移が進み草地→陽樹林→混交林（陽樹・陰樹）→陰樹林（極相林）と遷移が進み生息環境が消失したから「新上五島町」では絶滅したのである。

# 山野の鳥たち



夏鳥 アオバズク



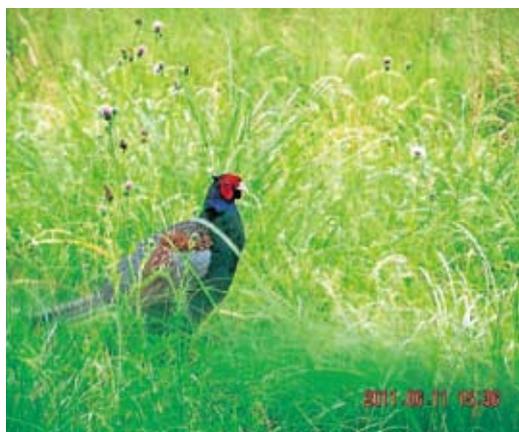
留鳥 メジロ



夏鳥 サシバ



留鳥 モズ



留鳥 キュウシュウキジのみ



旅鳥 ヒレンジャク

## 水 辺 の 鳥 た ち



冬鳥 珍しいコクガン有川で越冬



冬鳥 オオバンは青方ダムなどで越冬



冬鳥 まれに見るオシドリ夫婦



留鳥 キセキレイ



海鳥ウミネコ成鳥、飛来数が最も多い  
個体群



留鳥ウミウ 海鳥で海域に生息し魚類を  
食物にしている





## 1. 位置

新上五島町は、五島列島に属する。その位置は、長崎県の北松浦半島の西方から長崎市の北西海上に位置する列島で、日本の西端の列島である。

五島列島は、行政面からは佐世保市宇久町、北松浦郡小値賀町、南松浦郡新上五島町、五島市から構成されている。

五島列島の名は、福江島、奈留島、若松島、中通島、宇久島など五つの島を総称していると伝えられている。実質的に島は140余りから構成されている列島である。

長崎県本土から長崎南部および北部海域を隔て、また列島の西方は東シナ海に面しており、そこは対馬海流が北上している。

それゆえに亜熱帯地方からの漂着物も多く漂着する。例えば熱帯や亜熱帯に分布するヤシ科の果実が北魚目半島の江袋入江の海岸には特に多く漂着し、拾った果実を地元の住民が庭に植えていたところ発芽し約1mまで生育したという。

新上五島町は南松浦郡に属し、列島の北部に位置し一般に上五島ともいう。町を構成している島は大きい順に中通島、若松島、漁生浦島、有福島、日島、頭ヶ島、桐小島および他の無人島の島々から構成されている。

島は照葉樹林に包まれ放物線を描き海面に落ち込んでいる地形が目立つ。湾や入り江が多く、入江は深く奥まっているものから小さな入り江があり生き物を多様化している。しかし生態学上からみると、入江は埋め立てられ多様な環境、多様な生物相が貧弱な半自然環境になっている。

### 2-1. 気象

対馬海流は、黒潮の一支流で、琉球列島の近海で分岐し、九州の西岸を通り日本海に入り、本州、北海道の西岸を経て樺太の西岸に達している。そのような要因で気象および生物の分布に海流が強く影響している。

### 2-2. 気温

生態系の主な構成要素である光合成植物（生産者）の陸上植物を注視すると、日本の植物水平分布の代表的な植物群系は、北方から針葉樹林、夏緑樹林、照葉樹林、亜熱帯多雨林が分布している。

これらの群系は年平均気温と年平均降水量の影響によって決まる。したがって新上五島町の森林生態系は「照葉樹林帯」に属する。表1に中通島の有川における気温の計測結果を1917年、1950年、福江島の福江における記録をあらわした。

表1 有川での観測記録（気温）

	月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計	平均	
1917年	気温	5.05	6.5	9.35	15.51	19.2	21.78	28.78	28.09	26.5	20.23	12.8	7.02		16.75	有川の記録
1950年	気温	6.7	7.4	10	14.5	18.6	21.8	26.6	28	24.4	19.2	14.1	9.4		16.7	有川の記録
1950年	気温	7.3	7.6	10	14.3	18.4	21.9	26.4	27.5	24.2	19.2	14.7	9.8		16.8	福江の記録
1971-2000	平均気温	7.3	7.6	10.4	14.5	18.2	21.6	25.8	26.7	23.5	18.9	14	9.4		16.5	福江の記録

平均気温で比較すると五島市の福江と新上五島町の中通島の有川との気温差は小さい。それを証明するかの如くシダ植物のヘゴ科ヘゴが中通島の南部に位置する濁海岸の近くの谷の斜面に生育している。

茎は樹木状で葉は大形で葉柄は紫褐色で著しい刺と暗褐色の鱗片がみられる。若松支所の中庭に栽培され生育し生育状況も良好である。もちろん五島市には生育している。



### 2-3. 降水量

植物群系を決定する要素のなる降水量について表2に示した。

表2. 有川での観測記録（降水量）

	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均	
1917年	降水量	83.9	36.1	233.6	160	47.4	254.3	212.6	379	299	129.2	26.1	58	159.9	有川の記録
1950年	降水量	79.9	96.1	130.7	185.1	156.6	293.9	232.9	165.4	263.4	110.3	105	87.6	158.9	有川の記録
1950年	降水量	88.6	104.2	136.4	198.2	161.9	274.3	232.4	180.6	273.1	108.3	141	107.6	167.2	福江の記録
1971-2000	平均降水量	101.4	118.1	174.1	236.3	248.6	368.5	312.2	232.4	274.6	105.4	114	82	197.3	福江の記録

### 3. 植生

緯度の変化による植物群落の移り変わりを「水平分布」という。高度による変化を「垂直分布」という。

新上五島町では最高峰が番岳（443m）であり、垂直分布に大きな変化はみられない。

たとえば、鳥類のウグイスは冬期には温暖な低地で、夏期には涼しい高山に移動する習性があり、このような性質を漂鳥性という。

しかし、高山がない新上五島では、周年低地に生息し漂鳥性は失われ平地の人家周辺に生息している。また、植物のハマオモトの分布は紀伊半島南部に稀、四国東南部に稀、九州の南部地方に分布することが知られている。この植物は年平均気温15℃線（最低温度極地3.5℃線）以南に分布することが知られている（北村四郎 1970）。

ヒガンバナ科ハマオモト（はまゆう）の果実は海水に浮き海流により種子分散が行われ、波に打ち寄せられた果実をカラス類がぐわえ、陸地へ運ぶ種子分散に一役を担っている。

照葉樹林は、日本では西南部に水平分布し、その中心地帯に位置する岡山県の事例をみると年平均気温は15～20℃、年降水量は750～2000mmで、乾期はない（田中隆荘 2003）。

それでは、日最低年平均気温を参考のために北海道の札幌5.3℃、本州の東京13.0℃、九州の福岡13.6℃と長崎13.9℃、五島列島の福江13.1℃を比較した（国立天文台 理科年表 平成24年）。勿論、ハマオモトは町内の各地に分布し生育しており適応範囲である。

最低気温は植物の生活に影響していることが明らかであり、民間薬としての園芸植物のアロエが自然環境で開花できるのも対馬海流の影響によるものと推測される。

鳥類は食物となる植物や動物の生活の関係で、食物を求め、食物が得られる土地へ渡りをする。また、食物が十分に得られる時期、土地、場所に繁殖のため渡る。

### 4. 森林の階層構造

鳥類の生息に林の階層との関係は深く高木層の林冠にサンショウクイ、上幹部にゴジュウカラ、林冠下部にコサメビタキ、中層（亜高木）にキビタキ、中層下部にコゲラ、樹幹部にアカゲラ、アオゲラ、高灌木層（低木）にシジュウカラ、エナガ、低灌木層（小低木）にセンダイムシクイ、やぶにウグイス、草斜面にホオジロ、笹にコルリを日本の代表種として黒田長久（1967）は述べている。

本町内にはゴジュウカラ、アカゲラ、アオゲラ、コゲラは生息しないが、他の個体群は生息し各層に生息している。

#### ① 高木層（樹高：8～16m）

森林の高木層の優占種は、タブノキ、シイ類（ツブラジイ・スダジイ）で、北魚目半島部はタブノキ萌芽林の群落、他の地域の尾根や中腹部はツブラジイ萌芽林の群落、谷間の水分がおおい土地にはスダジイ萌芽林の群落、崎浦地区の友住、江ノ浜、頭ヶ島などの一部には局所的に



マテバシイ萌芽林の群落が発達している。

また、この地域の植生は平戸島における植生と類似している。

以上の自然林の他に人工林（スギ林、ヒノキ林）などが占める面積も広い。しかし、魚目半島の森林は自然林が占める面積の割合が大きい。

#### ② 亜高木層（3～8m）

亜高木層には、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、クロキ、シロダモ、ミズバイ、カゴノキなどの陰樹に混じってアカメガシワ、カラスザンショウなど。

#### ③ 低木層（0.1～3m）

ヒサカキ、ネズミモチ、ヤツデ、トベラ、マンリョウなど。

#### ④ 草本層（0.1～0.5）、

ホソバカナワラビ、ツワブキ、ムサシアブミ、リュウノヒゲなど。

地表面から最も高い樹冠は①で、③は葉地表面に近い高さに位置する。

このような構造を階層構造という。発達している良好な森は種類もおおく安定し、葉面積は広く二酸化炭素の吸収も盛んになり、地球温暖化を緩和することにもつながる。

さらに、河川を通じ海の森ともつながり山から流出したミネラルは海の森（緑藻、褐藻、紅藻）および植物プランクトンの栄養となり海の森は育つ、植物プランクトンは動物プランクトンをふやし、さらに、小魚→中型魚→大型魚と食物網・食物連鎖はつづき、栄養段階は成立している。河川や入江の干潟、砂礫地は生態系上において極めて重要な場所である。

### 5. 鳥相(三次メッシュ調査による概要)

地方の鳥類を総合的にとらえて研究した多面をまとめて述べる。それをその地方の鳥類を鳥相という、鳥類の季節的な研究、つまり、その地方における留鳥、渡り鳥（夏鳥・旅鳥・冬鳥・迷鳥）、漂鳥などに区分する。

それらの区分などについては後編に記載し述べる。例えば表3-1および表3-2の候鳥区分の項目に示してある。

町内全域における鳥類の三次メッシュ調査は極めて少ない事例である。調査可能な地域は246メッシュで町内のほぼ全域である。総個体数は4974個体で63種、亜種を記録した。そのうち周年生息する留鳥は26種、亜種・夏鳥は13種、亜種・旅鳥は19種、亜種・冬鳥は4種、亜種・迷鳥は0種、亜種・漂鳥は0種・帰化鳥はコジュケイ1種、亜種であった。

#### 6-1 鳥類の三次メッシュ調査

環境庁発行（平成9年）の都道府県別メッシュマップ42長崎版の中通島の北端4929-5099から南端4929-1076まで、東端の頭ヶ島4929-4115から西端の有福島4928-2795までの三次メッシュ内における調査を行った。その調査結果については後述する。

#### 6-2. 調査方法と時期

調査方法：先に述べた三次メッシュ内の現地で1メッシュ当たり20分間立ち止まり、メッシュ内で目視と鳴き声で種類を確認した。調査は2人～3人（鴨川誠、竹内睦生、中山利朗、松岡貢、大山かおり、高橋弘一）一組で観察係、記録係など分担し定点調査を行った。鳴き声は聴音器（聴次郎）を使用した。

調査期間は2011年6月と2012年6月の2か年に実施した。その結果については表3-1および表3-2に表した。

#### 6-3. 調査結果と考察

生息環境別にみると森林に49種5087個体、空中飛翔中：25種1014個体、宅地および周辺：12種222個体、海岸：6種32個体、海上の海面：1種1個体、その他の環境に25種402個体であった。つまり、種数、個体数ともに森林に生息する種類が最も多く確認された。



カラスバトは、今回の調査で特出すべき種類であり特徴は、全国一円国指定天然記念物でありさらに絶滅危惧種（RDB）に指定されている「カラスバト」は187個体の生息が確認されさらに、その出現数は177回、出現したメッシュ数は132箇所まで調査可能なメッシュ数の何と53.65%であった。カラスバトを見たい方は長崎県の新上五島町へ行きなさい。鴨川誠は紹介している。

本種は他の地域の生息地では人里はなれた場所や無人島などに生息する個体群であるが、本町内では人里、人家周辺に生息し共存共栄している特殊な事例である。

カラスバトの食性は、主として植物質でサクラ類、グミ類、イチゴ類などの液果、ムベヤアケビ類の袋果、ネムノキなど乾果の豆果、ウリハダカエデなど翼果、どんぐりなど堅果やクサギ、カラスザンショウなどの新芽などの他、昆虫類やミミズ類など動物質を食物としている。道土井湾の小島の海岸で海水を飲むことが地元の住民により知られている。

前述3植生、4森林の階層構造の項で述べた照葉樹林を構成する植物の種子分散にも寄与している。つまり植物の分布にも関与しており森林生態系で重要な役割を果たしている。さらに生態の調査研究が期待される。

したがって、本町の宝であり、文化財として、また観光資源としての価値は最も高いのにもかかわらず一般に、その価値が町民に認識されていない。

その他の鳥類の個体群で50%以上の出現率、トビ（50%）、ハシボソガラス（64.64%）、ハシブトガラス（89.83%）、ヒヨドリ（95.52%）、ウグイス（98.37%）、メジロ（79.67%）であった（表3-1～3-2参照）

ウグイスの出現率が最も高く記録された。本種は日本の本州では漂鳥であり夏期には高い山に移動し囀り鳴きを聞くことがあるが、五島列島など標高1000m級以上の山地がない島では漂鳥性が失われて周年にわたり島に生息する個体群である。

ヒヨドリとメジロは、日本では少ない吸蜜性の個体群であり本町内が推奨している「ヤブツバキ」の花粉の媒介者（鳥）であり、ツバキの結実に重要な役割を果たしている個体群である。

五島列島の中間地帯に位置する本町は、表3-1および表3-2で示したごとく渡り鳥が約70%を占めているが、その渡りの型には五島列島を南北に移動する「南北型」と東シナ海を横断する「東西型」が観察される。

したがって、これらの個体群は日本で最も早い時期にみられ、また遅い時期に観察される。初認は早く、終認は最も遅い時期となる。

例えばヤイロチョウは3月8日に有川郷で初認された事例がある。つまり、日本で最も早い時期に初認され、また、最も遅い時期まで観察される（東西型の渡り鳥）。本種の渡りの春期のピークは5月であり昼夜ともに渡る。真夜中に鳴きながら渡っている状況を寝ていて確認することができる。

### 7-1. 漁港の海鳥（カモメ類）調査

本町には小さな漁港が各地にみられる。漁港に飛来する海鳥に着眼し調査を鴨川誠、竹内睦生、中山利朗が踏査した。

沖が荒れた日には、漁港に避難し休息するがなぎの日にはカモメ類の姿を確認することができない。つまり、沖が荒れた日に調査を行うのが良いが日程の計画上それが不可能であった。2013年1月16日と17日の2日間で13箇所の漁港で実施した。その結果については次のとおりである。

### 7-2. 調査結果と考察

漁港に飛来する海鳥類は、カモメ類が優占していた。陸鳥は普通はカラス類（ハシボソガラス・ハシブトガラス）やトビが多く生息するが今回の調査時にトビは4個体が出現している。別の機会の調査時における最大個体数は、奈良尾漁港および沖合いを含めトビ285個体を記録したことがある。

カモメ類はウミネコ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ワシカモメおよびトウゾクカモメ類のトウゾクカモメなどを確認できた。ワシカモメは全長64cm、翼開長135cmで、ウミネコ全長46.5



cm、翼開長120cmと比較し大型で、北方系で日本北部の海岸に冬鳥として飛来するカモメ類で、本町内で確認できたことは極めて珍しい事例である（表4-3参照）。

トウゾクカモメはトウゾクカモメ科に属し前述のカモメ科とは異なる。極北地方で繁殖し日本には旅鳥または冬鳥として飛来する。本種も北方系の個体群である。本町内で確認できたことは極めて珍しい事例である（表4-1参照）。

本町でこれまでに記録した種類はカモメ科クロアジサシ、ミツユビカモメ、ユリカモメ、ズグロカモメ、オオズグロカモメ、ウミネコ、カモメ、シロカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、アジサシなどを記録した。このうちクロアジサシ、ユリカモメ、ズグロカモメ、オオズグロカモメ、アジサシは、移動中のものであり旅鳥と言えるが、他の個体群は町内で越冬する冬鳥である。

カモメ科でなくミズナギドリ科であり和名はフルマカモメであるが、2006年1月12日、10時に有川湾の湾口の野案中島付近でフェリーなみじの甲板から1個体を確認した。本種は北方系のミズナギドリ科の種であり日本では極めて少ない。そのような個体が日本列島の九州の西端で確認されたことは極めて珍しい事例である。

表4-1の丸尾でイソヒヨドリは、海岸から集落にも生息し、海岸だけでなく家やその他の建築物にも営巣し繁殖する。繁殖期には建物の高い一隅で雄鳥は美しい声で囀り鳴きをする。イソヒヨドリという名前から海岸だけに生息するものと推測しがちであるが、私が観察した事例では韓国の済島の漢拏山（1950m）では海拔約750mの地点で観察したことがある。勿論日本国内の個体群と同じ種である。

## 8-1. 早起き鳥

何処へ旅行しても、その地方の「早起き鳥」の鳴き声を聞くのが楽しみで、未明から野鳥の鳴き声を聞いている。どんな種類が一番に鳴くか楽しみで胸はおどろ、眠れない夜の状況が続く。

## 8-2. 調査地とその環境

ここで述べるのは私が定宿としている長崎県南松浦郡新上五島町の若松島、神部の集落にある民宿「えび屋」の窓辺からの調査記録である。

環境は海岸に位置し裏山は照葉樹とスギの人工林、建物の前は道路に面しさらに船着き場の広場があり、入江を挟んで小高い山（九郎右エ門山）があり、谷あり麓には人家、倉庫が建ちならび、その背後は照葉樹が大半を占め一部にはスギ林がある。

この地域は渡り鳥の移動ルートでありタカ目、ブツボウソウ目、スズメ目の鳥類が観察される。観察地としての穴場である。えび屋の裏山に生育するハイノキ科ミズバイの果実は10～12月に熟すが4～5月ころまで残りツグミ類の好物であり種子分散に野鳥が深い関係にあることが明らかである。

地上に落ちた果実はトラツグミ、シロハラなどが採食していた。また、センリョウ、カゴノキ、イヌビワなど果実を稔らせる植物も自然に生育している。彼らが種子分散した結果である。

「冬 期」

調査日時：2007年2月25日、4時30分開始

① 6:31' ハシブトガラス、② 6:35' ハシボソガラス、③ 6:44' ヒヨドリ、④ 6:45' ウミネコ、⑤ 6:46' ウグイス、⑥ 6:04' モズ、⑦ 6:46' トビ、⑧ 6:46' シロハラ、⑨ 6:46' スズメ、⑩ 6:56' ツグミの順番であった。その後カワラヒワ、カラスバト、ミサゴ、コジュケイ、アオサギが出現した。

「春 期」

調査日時：2007年3月21日、4時30分開始

① 5:51' ハシブトガラス、② 5:52' ハシボソガラス、③ 5:52' ウグイス、④ 5:57' ヒヨドリ、⑤ 6:06' コジュケイ、⑥ 6:15' カラスバト、⑦ 6:15' トビ、⑧ 6:23' カワラヒワ、⑨ 6:25' メジロ、⑩ 6:25' スズメの順番であった。



その後ホオジロ、アオジ、マヒワ、ベニヒワ、シメ、セグロカモメ、アオサギなどが出現した。

調査日時：2007年3月22日、4時30分開始

① 5:48' ハシブトガラス、② 5:50' ハシボソガラス、③ 5:59' アオサギ、④ 6:03' ウグイス、⑤ 6:03' コジュケイ、⑥ 6:06' ヒヨドリ、⑦ 6:15' トビ、⑧ 6:06' メジロ、⑨ 6:14' ホオジロ、⑩ 6:14' カワラヒワの順番であった。その後キュウシュウキジ、アオジ、トビ、スズメ、ミソサザイ、キジバト、ウミネコ、セグロカモメ、カラスバトなどが出現した。

「初夏」

調査日時：2005年6月21日、4時30分開始

① 4:55' ウグイス、② 5:58' ヒヨドリ、③ 4:59' ハシブトガラス、④ 6:03' ハシボソガラス、⑤ 6:03' コジュケイ、⑥ 6:06' メジロ、⑦ 6:15' カラスバト、⑧ 6:06' ホトギス、⑨ 6:14' ホオジロ、⑩ 6:14' スズメの順番であった。

その後ホオジロ、ミゾゴイ、トビ、キセキレイ、ミソサザイ、キジバト、アオバト、ヤイロチョウなどが出現した。

「秋期」

調査日時：2005年10月26日、4時30分開始

① 5:00' アオサギ、② 5:08' ゴイサギ、③ 5:15' ハシブトガラス、④ 6:17' ハシボソガラス、⑤ 6:01' カラスバト、⑥ 6:06' メジロ、⑦ 6:15' カラスバト、⑧ 6:16' ヒヨドリ、⑨ 6:14' ジョウビタキ、⑩ 6:14' スズメの順番であった。

その後ウミネコ、コジュケイ、ハクセキレイ、トビ、キセキレイ、カワラヒワ、キジバト、スズメ、セグロカモメなどが出現した。

### 若松島および周辺に生息する野鳥

若松島および漁生浦島、有福島、日島、中通島、頭ヶ島などその周辺の無人島（天神山、相ノ島などで生息確認できた鳥類について記載する。つまり新上五島町の鳥類目録でもある。さらに（資料編の表6-1～6-24参照）。赤字は長崎県選定の絶滅危惧種でカッコ内のDD、CR、VUなどはカテゴリーである（資料編表5参照）。

## 9. 鳥相（鳥類目録）

### 1. キジ目

#### 1). キジ科

1. **ウズラ (DD)**、2. キュウシュウキジ

### 2. カモ目

#### 2). カモ科

3. **マガン (CR)**、4. **コクガン (VU)**、5. **コハクチョウ**、6. **ツクシガモ (CR)**、7. **オシドリ (DD)**、8. **オカヨシガモ**、9. **ヨシガモ**、10. **ヒドリガモ**、11. **マガモ**、12. **カルガモ**、13. **ハシビロガモ**、14. **オナガガモ**、15. **トモエガモ (EN)**、16. **コガモ**、17. **ホシハジロ**、18. **キンクロハジロ**、19. **スズガモ**、20. **ホオジロガモ**、21. **カワアイサ**、22. **ウミアイサ**

### 3. カイツブリ目

#### 3). カイツブリ科

23. **カイツブリ**、24. **カンムリカイツブリ (DD)**、25. **ミミカイツブリ**、26. **ハジロカイツブリ**

### 4. ハト目

#### 4). ハト科

27. **カラスバト (NT)**、28. **キジバト**、29. **シラコバト**、30. **ベニバト**、31. **アオバト**

### 5. アビ目

#### 5). アビ科

32. **アビ (DD)**、33. **オオハム (DD)**、34. **シロエリオオハム (DD)**、35. **ハシジロアビ**



6. ミズナギドリ目
- 6). ミズナギドリ科
  - 36. フルマカモメ、37. シロハラミズナギドリ (CR)、38. オオミズナギドリ、39. ハイイロミズナギドリ、40. ハシボソミズナギドリ
- 7). ウミツバメ科
  - 41. ヒメクロウミツバメ (CR)
7. コウノトリ目
- 8). コウノトリ科
  - 42. コウノトリ (CR)
8. カツオドリ目
- 9). ゲンカンドリ科
  - 43. コゲンカンドリ
- 10). カツオドリ科
  - 44. カツオドリ
- 11). ウ科
  - 45. ヒメウ (DD)、46. カワウ、47. ウミウ
9. ペリカン目
- 12). サギ科
  - 48. サンカノゴイ (CR)、49. ヨシゴイ (CR)、50. オオヨシゴイ (CR)、51. ミゾゴイ (EN)、52. ゴイサギ、53. ササゴイ、54. アカガシラサギ (DD)、55. アマサギ、56. アオサギ、57. ダイサギ、58. チュウサギ (NT)、59. コサギ、60. クロサギ (VU)、61. カラシラサギ (CR)
- 13). トキ科
  - 62. クロツラヘラサギ (CR)
10. ツル目
- 14). ツル科
  - 63. マナヅル (VU)、64. ナベヅル (VU)
- 15). クイナ科
  - 65. クイナ (NT)、66. ヒクイナ (DD)、67. ツルクイナ、68. バン、69. オオバン
11. カッコウ目
- 16). カッコウ科
  - 70. ジュウイチ、71. ホトギス、72. ツツドリ、73. カッコウ
12. ヨタカ目
- 17). ヨタカ科
  - 74. ヨタカ (NT)
13. アマツバメ目
- 18). アマツバメ科
  - 75. ハリオアマツバメ、76. アマツバメ、77. ヒメアマツバメ
14. チドリ目
- 19). チドリ科
  - 78. タゲリ、79. ムナグロ、80. ダイゼン、81. イカルチドリ、82. コチドリ、83. シロチドリ、84. メダイチドリ
- 20). セイタカシギ科



## 85. セイタカシギ (CR)

## 21). シギ科

86. ヤマシギ (NT)、87. チュウシャクシギ、88. タシギ、89. オグロシギ、90. コシャクシギ (CR)、91. ダイシャクシギ、92. ホウロクシギ (EN)、93. ツルシギ、94. アカアシシギ (EN)、95. アオアシシギ (DD)、96. クサシギ、97. タカブシギ、98. キアシシギ、99. ソリハシシギ、100. イソシギ、101. キョウジョシギ、102. コオバシギ、103. トウネン、104. ウズラシギ、105. ハマシギ、106. アカエリヒレアシシギ、107. ハイロヒレアシシギ

## 22). タマシギ科

## 108. タマシギ (DD)

## 23). ツバメチドリ科

## 109. ツバメチドリ (EN)

## 24). カモメ科

110. クロアジサシ、111. ミツユビカモメ、112. ユリカモメ、113. ズグロカモメ (EN)、114. オオズグロカモメ、115. ウミネコ、116. カモメ、117. ワシカモメ、118. シロカモメ、119. セグロカモメ、120. キアシセグロカモメ、121. オオセグロカモメ、122. コアジサシ (EN)、123. アジサシ、124. ハシグロクロハラアジサシ

## 25). トウゾクカモメ科

125. シロハラトウゾクカモメ、126. トウゾクカモメ

## 26). ウミスズメ科

127. ケイマフリ、128. ウミスズメ (CR)、129. カンムリウミスズメ (EN)、130. ウトウ

## 15. タカ目

## 27). ミサゴ科

## 131. ミサゴ (NT)

## 28). タカ科

132. ハチクマ (NT)、133. トビ、134. オジロワシ (CR)、135. オオワシ (CR)、136. チュウヒ (EN)、137. ハイロチュウヒ、138. アカハラダカ、139. ツミ、140. ハイタカ (NT)、141. オオタカ (EN)、142. サシバ (VU)、143. ノスリ、144. ケアシノスリ、145. クマタカ (CR)

## 16. フクロウ目

## 29). フクロウ科

146. オオコノハズク (NT)、147. コノハズク、148. ワシミズク、149. キュウシュウフクロウ (DD)、150. アオバズク (DD)、151. コミズク

## 17. サイチョウ目

## 30). ヤツガシラ科

152. ヤツガシラ

## 18. ブッポウソウ目

## 31). カワセミ科

153. アカショウビン (DD)、154. ヤマショウビン、155. カワセミ

## 32). ブッポウソウ科

## 156. ブッポウソウ (EN)

## 19.. ハヤブサ目

## 33). ハヤブサ科

157. チョウゲンボウ、158. アカアシチョウゲンボウ、159. コチョウゲンボウ、160. チゴハヤブサ、161. ハヤブサ (EN)

## 20. スズメ目



- 34). ヤイロチョウ科  
162. ヤイロチョウ (CR)
- 35). サンショウクイ科  
163. アサクラサンショウクイ、164. サンショウクイ (EN)、165. リュウキュウサンショウクイ
- 36). コウライウグイス科  
166. コウライウグイス
- 37). カササギヒタキ科  
167. サンコウチョウ (VU)
- 38). モズ科  
168. チゴモズ (CR)、169. モズ、170. アカモズ (CR)
- 39). カラス科  
171. ミヤマガラス、172. ハシボソガラス、173. ハシブトガラス
- 40). キクイタダキ科  
174. キクイタダキ (NT)
- 41). ツリスガラ科  
175. ツリスガラ
- 42). シジュウカラ科  
176. ヤマガラ、177. ヒガラ (DD)、178. シジュウカラ
- 43). ヒバリ科  
179. ヒメコウテンシ、180. ヒバリ (現在は未確認、昭和34年8月に確認)
- 44). ツバメ科  
181. ショウドウツバメ、182. ツバメ、183. コシアカツバメ、184. イワツバメ
- 45). ヒヨドリ科  
185. ヒヨドリ
- 46). ウグイス科  
186. ウグイス、187. ヤブサメ
- 47). エナガ科  
188. エナガ
- 48). ムシクイ科  
189. キマユムシクイ、190. エゾムシクイ、191. センダイムシクイ
- 49). メジロ科  
192. メジロ
- 50). センニュウ科  
193. マキノセンニュウ、194. ウチヤマセンニュウ (VU)
- 51). セッカ科  
195. セッカ
- 52). レンジャク科  
196. キレンジャク、197. ヒレンジャク
- 53). ミソサザイ科  
198. ミソサザイ (DD)
- 54). ムクドリ科  
199. ギンムクドリ、200. ムクドリ、201. コムクドリ、202. カラムクドリ、203. ホシムクドリ



## 55). ヒタキ科

204. マミジロ、205. トラツグミ、206. カラアカハラ、207. クロツグミ、208. クロウタドリ、209. マミチャジナイ、210. シロハラ、211. アカハラ、212. ツグミ、213. コマドリ、214. ノゴマ、215. コルリ、216. シマゴマ、216. ルリビタキ、217. ジョウビタキ、218. ノビタキ、219. イソヒヨドリ、220. エゾビタキ、221. サメビタキ、222. コサメビタキ、223. マミジロキビタキ、224. **キビタキ(DD)**、225. ムギマキ、226. オジロビタキ、227. オオルリ

## 56). スズメ科

228. ニュウナイスズメ、229. スズメ

## 57). セキレイ科

230. イワミセキレイ、231. ツメナガセキレイ、232. キタツメナガセキレイ、233. マミジロツメナガセキレイ、234. ツメナガセキレイ、235. キガシラセキレイ、236. キセキレイ、237. ハクセキレイ、238. タイワンハクセキレイ、239. ホオジロハクセキレイ、240. セグロセキレイ、241. マミジロタヒバリ、242. コマミジロタヒバリ、243. ビンズイ、244. セジロタヒバリ、245. ムネアカタヒバリ、246. タヒバリ

## 58). アトリ科

247. アトリ、248. カワラヒワ、249. マヒワ、250. ベニヒワ、251. ベニマシコ、252. アカマシコ、253. イスカ、254. ベニバラウソ、255. アカウソ、256. ウソ、257. シメ、258. コイカル、259. イカル

## 59). ホオジロ科

260. キアオジ、261. シラガホオジロ、262. ホオジロ、263. シロハラホオジロ、264. ホオアカ、265. キマユホオジロ、266. カシラダカ、267. ミヤマホオジロ、268. **シマアオジ(NT)**、269. シマノジコ、270. **ノジコ(NT)**、271. アオジ、272. オオジュリン

20目59科272種、亜種を記録した。目録の配列は日本鳥学会（2012）日本鳥類目録改訂第7版に準じた。

赤字は長崎県絶滅危惧種（RDB）に選定されている種で、2001年に発行された『ながさきの希少な野生動植物』普及版から引用した。さらに表5に絶滅危惧種のカテゴリー定義を示した。和名の後の（ ）内の定義（表5参照）である。

長崎県が選定した97種・亜種でその中で72種・亜種が新上五島町で確認され74.2%を観察できるほど豊かであり正にバード・アイランドである。したがって、自然環境の改変の際には影響が生じないように配慮し永遠に子孫に残すべきであり国や県の意図でもある。

## 10. 生息の確認できなかった個体群

島内に生息の確認をすることができなかった個体群はキツキ類、ヒバリ（古い新魚目町郷土誌には記載あり）、1950年8月に鴨川は有川、奈良尾で記録しているが近年は確認できなかった。さらに後述する。

カワガラスなども記録してない。キツキ類が生息するような常緑広葉樹の森林は前述の通り生息環境はあるのだが生息しない。渡りをする「アリスイ」は対岸の西彼杵半島の西海市崎戸町から五島列島へ移動中の個体を確認しているので通過しているであろう。

五島列島（長崎県）は、渡り鳥にとっては、南北の渡りと東西の渡り鳥の十字路であり、渡り鳥は今後も新たに記録されるであろう。

留鳥としてのアオゲラ、コゲラの生息確認することができないか、巣穴や採食の形跡も調査している。しかし、現時点では「キツキ類がない島」である（表6-1～25）。

同じ九州地方でも県単位で絶滅危惧種のカテゴリーのランクが種によりことなる。資料編の表7.九州地方における生物の絶滅種数を述べた、絶滅種数の多い順は福岡県48種、宮崎県37種、佐賀県36種で長崎県は6位で22種、最も保護・保全が良い県は大分県で1種が絶滅しているだけである（表7参照）。



九州地方における鳥類の絶滅危惧種の各カテゴリー別、県別に比較すると資料編表8に示したように、選定されている述べ種数の総計は436種・亜種である。絶滅種3種、絶滅危惧種IA 77種、IB40種、II類112種、準絶滅危惧種132種、情報不足66種、地域個体群6種である(表5、表8)。

## 11. 国指定天然記念物カラスバトの生態

### 1) 分布

カラスバトには、本州(秋田、山形、千葉、神奈川、静岡、愛知、石川、福井、三重、大阪、兵庫、鳥取、島根)、粟島、佐渡、冠島、牛島、舩倉島、見島、四国(愛媛、徳島)、宿毛沖の島、蒲葵島、宿毛姫島、隠岐、筑前沖の島、筑前大島、地島、藍島、白島、宮崎大島、対馬、五島列島、男女群島、屋久島、種が島、甌島諸島、口永良部島、伊豆諸島、大島、利島、式根島、新島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島・トカラ列島、奄美大島、沖縄諸島などの常緑広葉樹林に生息することが知られている(日本鳥類目録 2012)。

他にアカガシラカラスバト(小笠原群島)、ヨナクニカラスバト(先島諸島)などの亜種やオガサワラカラスバト(小笠原群島の父島)、リュウキュウカラスバト(沖縄諸島)などが知られている。

以上の地方の個体群より新上五島町の個体群は集落地に生息し人と「共存共栄」しているが、他の地方のカラスバトは弧島など秘境地に生息することが多い。

### 2) 生息環境

木の実を生産する常緑広葉樹林帯に生息し木の実を採食する。採食する木の実をつける樹種については後で述べる。

### 3) 繁殖

繁殖は、つがい形成からはじまる。雄鳥が雌鳥への給餌求愛で雌鳥の横の枝に止まり傍に行き食物を雌鳥に渡す行動を繰り返し、その間に雄鳥が背面に乗り交尾する。1日に数回繰り返す。

### 4) 営巣

常緑広葉樹林帯では、亜高木層のヤブニッケイ、シロダモ、ツブラジイ、スダジイなどの樹枝上に枯れ枝を粗雑に組み、平らな浅い皿型に造る。卵が落下しそうな粗雑である。

平戸市の上阿値賀島での営巣場所は岩上の浅い土壌の地上の例が多かった。コシダの葉や細い蔓植物の枯れたものを組み合わせ浅い皿型に造っていた。

### 5) 産卵と卵数

産卵数は1巣1卵で形状は楕円形で斑紋はなく白色であった、長径39.5mm～44mm、短径29mm～31mm、平均長径42.1mm、短径30.5mm計測値は(清棲幸保1978)による。

### 6) 鳴き声

一般に牛鳩と言われるほど牛の泣き声に似てモウーと聞こえることが多い。高低差や大きさの差がある。しかし、時間をかけ気長に聞くと鳴き声にはいろいろな鳴き方があり雌鳥と雄鳥の鳴き声、相手への合図があり、行動と結びついている。例えば、① モウー、モウー、ウー、② ウッ、ウー、③ グルグル、ウー、④ グルグルグルグル、⑤ グルグル ウー、ウなどの鳴き声は個体間の情報伝達の信号刺激の一種である。

① 個体間の存在位置の確認の宣言である。この鳴き声が最も多い。

② 相手への合図(応答)である。

③ なわばりの主張を雄鳥が鳴き侵入者を追い払う時に鳴く。威嚇行動の一種である。

④ 移動する直前の合図

⑤ つがい形成時の雌鳥の鳴き声で甘えたような鳴き声になる。

### 7) 食性

食物は常緑広葉樹や落葉広葉樹などの木の実など植物質が主のようであるが、地上で環形動物のミズ類や昆虫類など動物質も採食する。食物の種類を食性という。



例えばタブノキ、スダジイ、ツブラジイ、クスノキ、シラカシ、ウラジロガシ、アラカシ、マテバシイ、ヤブニッケイ、シロダモ、モクタチバナ、センリョウ、マンリョウ、ミミズバイ、クロキ、ヤマモモ、イヌビワ、トベラ、シャリンバイ、モッコク、マサキ、サングジュ、ハクサンボクヒサカキ、ハマヒサカキなど常緑広葉樹や落葉広葉樹ヤマザクラなどサクラ類、ムクノキ、エノキ、カラスザンショウ、ノイバラ、ツルウメモドキ、アキグミ、ナツグミ、イイギリ、ニワトコ、ヤマゲワ、アカメガシワ、サンショウ、クマノミズキ、タラノキ、ムラサキシキブ、センダン、ハゼノキ、ヌルデ、ウリハダカエデやサケカズラ、サルナシなどの実を採食する樹木の種類は本町内には多く自然林として生育している。

つまり、食物が豊富なためカラスバトの密度が高いのであろう。

### 8) 保護

国指定天然記念物、絶滅危惧種である「カラスバト」生息地である常緑広葉樹林、混交琳などを保護、保全することが必要である。

## 12. 環境の変化を語るヒバリ

ヒバリについては先述したように、現在は確認できない。しかし、小高い山まで畑があり耕作されていた時代には生息していた。しかし、畑地が森林に遷移し現在は生息環境を消失したことにより生息していない。生息適地は農耕地、草原、湿原、砂浜などであり、畑地の麦畑が最適地で繁殖も麦畑であるが近年は畑は無くなり森林に変遷した。

つまり、二次林の面積が拡大し段々畑は消失した。放置された畑はススキなど草原群落に、さらに陽樹の低木が入り低木林期、さらに遷移は進みカラスザンショウ、アカメガシワ、タラノキ、アオモジ（西九州沿岸に分布）などの陽樹、さらに陽樹と陰樹の混交琳期を経て、タブノキやツブラジイ、スダジイなど陰樹林の極相林（クライマックス）へと遷移している。そのような環境によりヒバリは生息できなくなった。

農耕地が放置されイノシシの生息環境に遷移し、イノシシ、シカの生息適地の環境へと変遷した関係で、過度の密度になり人の立場からは被害を受ける立場になり、山林のタブノキ、イヌビワなどの樹皮や林床植物は採食され林床の土砂は降雨により流失し森林生態系は破壊している場所も若松島には多く、そんな場所がみられる。ヒバリは環境変化の結果を教えてくれている。

魚類相が減少するのも森林・河川・入江の干潟・砂礫地・海藻・植物プランクトン・動物プランクトン・稚魚・小魚・中型・大型魚などの食物連鎖や食物網でつながっている。

それで何処かで生息環境に異変を生じたとき、例えばある時点で大きな変化が生じたことにより最終的には魚類の減少も推測される可能性がある。「ヒバリ」はそのような事例があることを私たちに教えてくれているように著者の一人の鴨川誠は語っているように思える。

下図（ハクセンシオマネキ）の絶滅危惧種も干潟という生息環境を失いヒバリと同じ運命の道にあるている。



近年は島に生息しないヒバリ



### 13. 国際条約と新上五島町の野鳥

日本政府と他国間で渡り鳥条約を締結している。

目的は各個体群の保護、科学教育、などを目的に、例えば、アメリカ合衆国政府、ソヴィエト社会主義共和国連邦政府、中華人民共和国政府、オーストラリア政府、ドイツ連邦共和国政府、大韓民政府などとの間で条約、或いは協定を締結して目的の達成のため努力している。



交流会で日本・韓国間での渡り鳥条約提案シンポ記念



佐世保駅前広場で歓迎式典記念

日本野鳥の会長崎県支部主催、佐世保会場で韓国・中国・日本との間で交流会を行った。

さらに、韓国政府と日本政府との間での渡り鳥条約締結に努力した。

#### 13-1. 渡り鳥及び絶滅のおそれのある鳥類並びにその環境の保護に関する日本国政府とアメリカ合衆国政府との間の条約（昭和49条約8）

長崎県全域、五島列島（宇久島・小値賀島・野崎島・五島市）と新上五島町における各個体群が他国とどのような関係があるか、表9-1～表9-11に示した。参照していただきたい。

アメリカ合衆国政府との間で選定されている個体群はオオヒシクイ、マガン、コクガンなどガン類やツクシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、トモエガモなど淡水カモ類並びに、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモなどの、海ガモ類、カイツブリ科のカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリなど各個体群、ミズナギドリ科オオミズナギドリ、本種は平戸市南部の上阿値賀島および下阿値賀島で約1万個体が生息し両島で夏鳥として繁殖している。

アビ、オオハム、ハシジロアビなどアビ科の水辺の鳥類、ウ科ヒメウ、グンカンドリ科は世界に5種、日本に2種、オオグンカンドリとコグンカンドリ、そのうちコグンカンドリがオオミズナギドリが捕らえた魚類をよこどりし採食しながらオオミズナギドリとともに北上してくる。

サギ類ヨシゴイ、オオヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、クロサギなど、クイナ科バン、オオバン、チドリ科ムナグロ、ダイゼン、ハジロコチドリ、コチドリ、シロチドリなど、シギ科コシャクシギ、チュウシャクシギ、アオアシシギ、クサシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギなど選定種は多い。ミサゴ科ミサゴ、猛禽類トビ、オジロワシ、オオワシ、ツミ、ケアシノスリ、ハヤブサなど、ヒバリ科ヒバリ属ヒバリ、ヒタキ科キビタキ属キビタキ、セキレイ科ツメナガセキレイ、ビンズイ、アトリ科シメなど両政府間で対象種にしている。

新上五島町にも選定種・亜種が多くみられ「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の登録にはなをそえることになるであろう。

#### 13-2. 渡り鳥及び絶滅のおそれのある鳥類並びにその環境の保護に関する日本国政府とソヴィエト社会主義共和国連邦政府との間の条約（昭和63条約7）.

ソヴィエト社会主義共和国連邦政府（ロシア）との選定種は最も多く、特に日本に冬鳥として越冬に渡来する個体群で、例えばサカツラガン、オオヒシクイ、ハイイロガン、マガン、カリガネ、コク



ガンなどであるが、五島列島での記録はマガンとコクガンだけで、新上五島町におけるマガンの観察事例はなく、コクガンのみ有川郷で観察した(表9-1～表9-11)。

コグンカンドリ(全長70～80cm)とオオグンカンドリ(全長85～105cm)の2種がおり後種は北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、小笠原群島、奄美諸島、琉球諸島、大東諸島の海上に生息が確認されている。前種も北海道、本州、岩手県以西、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島、大東諸島の海上に生息が確認されている(日本鳥類目録改定第7版2012)。

淡水ガモ類のオシドリをはじめオカヨシガモ、ヨシガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、トモエガモ、コガモなど、海ガモ類のシノリガモ、ピロードキンクロ、クロガモが選定されているが現在は本町では生息は確認されていない。ウミアイサは記録されている。

カイツブリ類はカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリなどの生息を確認している。

町内で見られる海鳥のシロハラミズナギドリ、オオミズナギドリも選定種であり北国まで北上することが明らかである。

東北～九州、伊豆諸島などの島で繁殖するヒメクロウミツバメ(全長19cm)の本種は中通島周辺の近海にも飛来する珍しいウミツバメも選定されてる。

サギ類ではヨシゴイ、オオヨシゴイ、ミゾゴイ、ササゴイ、アマサギ、アオサギ、チュウサギなど、ツル類は日本へ渡来するソデグロヅル、カナダヅル、マナヅル、タンチョウ、クロヅル、ナベヅル、アネハヅルが選定されているが、町内にマナヅル、ナベヅルであり両種は毎年、春の北帰行の途中や秋、越冬地の鹿児島県出水平野への渡りの道中に上空を鳴きながら通過する状況を観察した人もあるが、地上で休息している個体を見た方々も多い。

### 13-3. 渡り鳥及び絶滅のおそれのある鳥類並びにその環境の保護に関する日本国政府と中華人民共和国政府との間の協定(昭和56条約6)。協定に関する交換公文(昭和56年外務省告示203)

日本国政府と中華人民共和国政府との間の選定種は227種、ガン類で町内ではコクガン、淡水カモ類オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、トモエガモなど、海ガモ類ホシハジロ、スズガモ、ホオジロガモなど、およびアイサ類ウミアイサ、カイツブリ類カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリなど、ウ科ヒメウ、サギ類サンカノゴイ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギなど11種が選定されている(表9-1～表9-11参照)。

ツル類マナヅル、ナベヅル、クイナ類ヒクイナ、バン、オオバンなど、陸鳥類ではジュウイチ、ホトギス、ツツドリ、カッコウ、ヨタカ、ハリオアマツバメ、アマツバメ、ヒメアマツバメなど。

### 13-4. 渡り鳥及び絶滅のおそれのある鳥類並びにその環境の保護に関する日本国政府とオーストラリア政府との間の協定(昭和56条約3)

日本国政府との間に76種が選定されている。特にチドリ科ムナグロ、ダイゼン、ハジロコチドリ、コチドリ、シロチドリおよびシギ科タシギ、セイタカシギ、オグロシギ、コシャクシギ、チュウシャクシギ、ハウロクシギ、アオアシシギ、タカブシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、キョウジョウシギ、キリアイ、オバシギ、ミユビシギ、トウネン、オジロトウネン、ウズラシギ、アカエリヒレアシギなど、美しいセイタカシギは奈良尾の船引き上げ場で9個体の集団で休息した。イソシギ以外のシギ類は渡りの道中の一時休息である。

カモメ類トウゾクカモメ、ウミスズメ類ウミスズメ、ツバメ類ツバメ、セキレイ科ツメナガセキレイ、グンカンドリ科コグンカンドリ、カツオドリ科カツオドリ、ウ科ヒメウ、ミズナギドリ科オオミズナギドリなど(表9-1～表9-11参照)していただきたい。

### 13-5. 環境の保護の分野における協力に関する日本政府とドイツ連邦共和国政府との間の協定 (平成9外務省告示458)。野鳥法学会 (平成14年) によると、つぎようになる。

環境保護の分野における協力に関する日本国政府とドイツ連邦共和国政府との間の協定。日本国政府とドイツ連邦共和国政府は地球環境の悪化が人類の生存に対して重大な脅威をもたらすことに留意し健全かつ持続可能な経済的及び社会的な発展を確保するため環境の問題に対処する上で相互の利益となり、・・・中略・・・環境の問題での協力のための協定である。他に中華人民共和国政府、アメリカ合衆国政府、大韓民国政府などとも同じ内容の協定を結んでいる。

二酸化炭素の排出や有害な化学物質のたれ流しや放出などによる環境の悪化に影響がある行為はお互いに避けなければならない。

## 14. 地球温暖化に伴い北上が予測される鳥類

### 14-1. ネットイチョウ目ネットイチョウ科

アカオネットイチョウは、本州の太平洋側の岩手、千葉の記録がある。北陸新潟、関東地方、中部地方、などまでも北上している。

シラオネットイチョウは、本州の太平洋側の岩手、静岡や日本海側の富山、石川まで北上の記録がある。

### 14-2. サケイ目サケイ科

サケイは、これまでに本州 (宮城、山形、東京、新潟、愛知、滋賀)、九州 (長崎)、八重山諸島 (石垣島) の記録がある。鴨川誠は2013年11月28日、9時40分に五島列島の五島市宮原の漁村坂の道路上を歩く姿を観察した。行動の様子からみてたびたび飛来しているように推測した。

### 14-3. ハト目ハト科

台湾にはキンバト、カノコバト、台湾キジバト、ベニバト、ムネアカアオバト、台湾ズアカアオバト、アオバトなど多く、日本の与那国に近い野柳岬にも生息している。

### 14-4. ミズナギドリ目ミズナギドリ科

シロハラミズナギドリ属の数個体群の出現をきたいしている。

### 14-5. カツオドリ目ゲンカンドリ科・カツオドリ科

コゲンカンドリは平戸や五島灘、新上五島町の土井ノ浦沖合でも出現しているが、オオミズナギドリが捕らえた魚を追いかけ横取りしている行動を見ることがあるが極めて少ない観察であったが、観察の機会が多くなってきた。

### 14-6. ペリカン目ペリカン科・サギ科・トキ科

### 14-7. チドリ目レンカク科

台湾で繁殖し手厚く保護されている。佐世保でも出現した事例はあるが、まれでのことであったが今後は出現の機会も多くなるであろう。五島列島での記録もでるであろう。

### 14-8. モズ科・スズメ目オウチュウ科

オウチュウの出現も多くなってきた。オウチュウカッコおよび台湾のヒメオウチュウなども北上するのではないだろうか。

### カラス科

長崎県で越冬するミヤマガラスの大群が小さな群れになり、絶対的な個体数が減少している傾向がある。青森県など北国では九州からのバードウォッチャーは見る機会が極めて少なくなっていると言っていたら、鴨川は数年前青森県の旅行で約80個体の一群を見た。越冬地が北国へ広がっていたのである。

## 15. 野鳥と木の実の相互関係

土地を大きく移動できない種子植物は、大きく離れた土地・島への移動の手段としての戦略は動物、風や淡水、海水にたよることになる。野鳥は種子植物の種子分散に一役を担っている。



哺乳類は羽毛に付着した種子を他の土地へ、また、食物として食べたなかに種子が不消化物となり糞として排出され発芽に適した環境で発芽し生育する。

鳥類群集の場合は、植物の戦略である開花し結実した果実をつけ、赤や黄色などに目立つ色に着色した果実の果肉など液果を鳥類に与え、鳥類は不消化物の種子を糞として排出し発芽に適した環境で発芽し森林生態系が形成される。既に3植生、4森林の階層構造で述べた高木層・亜高木層・低木層を構成していた樹種はほとんどが鳥類群集により種子散布され、タブノキやスタジイ、ツブラジイの極相林まで遷移したものである。

### 【高木層】

- タブノキの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、カラス類、シロハラ、ツグミなどツグミ類、コジュケイ、ムクドリ、メジロなどが運び種子分散をしたものと推測される。
- スタジイ・ツブラジイの堅果：採食する鳥類はツブラジイ：採食する鳥類はカラス類、キジバト、カラスバト、キュウシュウキジ、オシドリ、ヤマガラなどカラ類など。
- クスノキの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、ムクドリ、カラスバトなど。
- ヤマモモの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロなど。
- ホルトノキの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロ、カラス類など。
- センダンの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、サンショクイ、ムクドリ、カラス類など。
- カラスザンショウの果実：採食する鳥類はホオジロ、メジロ、ノビタキ、ノゴマなど。
- ムクノキの果実：採食する鳥類はホオジロ、イカル、カワラヒワなど。

### 人工林

- ▲ スギの種子：採食する鳥類はイスカ、マヒワ、イカル、キクイタダキなど。
- ▲ クロマツの種子：採食する鳥類はキクイタダキ、カラスバト、イカル、イスカ、ホオジロ、マヒワなど。
- ▲ ヒノキの種子：採食する鳥類はキジバト、カワラヒワ、マヒワ、ホオジロ、カラスバトなど。



カキの果実の果肉を採食するシロハラ

### 【亜高木層】

- シロダモの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、シロハラ、ムクドリ、カラス類、キジバト、カラスバト、アオバト、コジュケイなど。
- ヤブニッケイの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カラスバトなど。
- クロキの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロなど。
- モクタチバナの果実：採食する鳥類は：ヒヨドリ、イソヒヨドリ、カラスバト。
- アオモジの果実：採食する鳥類はホオジロ、メジロ、ヒヨドリ、ツグミ類など。
- クサギの果実：採食する鳥類はカラスバト、メジロ、ヒヨドリなど。
- ハマクサギの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ。

- ヤマザクラの果実：採食する鳥類はカラス類、カラスバト、アオバト、キジバト、ムクドリ、コムクドリ、イカル、ウソ、カワラヒワ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、クロツグミ、アカハラ、キュウシュウキジなどの好物で人気が高い。

- ゴンズイの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、カラスバト、メジロ、カラス類など。

### 【低木層】

- ヒサカキの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カワラヒワ、カラス類、ホオジロ、トラツグミ、シロハラ、ジョウビタキ、クロツグミ、アカハラ、キジバト、コジュケイ、キュウシュウキジなど。

● ネズミモチの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロ、レンジャク類、アカハラ、キジバト、カラスバト、キュウシュウキジなど。

● トベラの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリなど。

● ヤツデの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、スズメなど。

● クチナシの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カワラヒワなど。

● シャリンバイの果実：採食する鳥類はイソヒヨドリ、ヒヨドリ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、カラス類など。

● ハマヒサカキの果実：採食する鳥類はイソヒヨドリ、ヒヨドリ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワなど。

○ ムラサキシキブの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カラス類、ツグミ類など。

○ タラノキの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロ、マヒワ、ベニヒワ、ホオジロ、アオジ、ツグミ、シロハラなど。

○ ウコギの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カラスバト、ムクドリ、コムクドリなど。

○ クサギの果実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カラスバト、ムクドリ、コムクドリなど。

#### 【つる植物】

ムベの果実：採食する鳥類は：カラス類、ヒヨドリ、メジロなど。

● アケビ・ミツバアケビの果実：採食する鳥類は：カラス類（ハシボソガラス、ハシブトガラス）、ヒヨドリ、メジロなど。

● サルナシの果実：採食する鳥類は：カラス類、ヒヨドリ、ツグミ類（シロハラ、ツグミ）など。

● ノイバラの果実：採食する鳥類は：カワラヒワ、ホオジロ、メジロ、イソヒヨドリ、ヒヨドリなど。

● サネカズラの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、キジバト、カラスバト、メジロなど。

● エビヅルの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロ、カラス類など。

● ノブドウの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロ、カワラヒワなど。

● キズタの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、メジロなど。

● ツルウメモドキの果実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロ、カワラヒワなど。

● ツズラフジの実：採食する鳥類はヒヨドリ、ツグミ、シロハラなど。

● ハスノハカズラの実：採食する鳥類はカラス類、カラスバト、キジバト、ヒヨドリなど。

● ヘクソカズラの実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、ムクドリ、コムクドリ、メジロ、シロハラ、アカハラ、ツグミジョウビタキ、ルリビタキなど。

＊●印は常緑広葉樹、○印は落葉広葉樹、▲印は裸子植物・針葉樹、●印はつる植物を表わしている。

森林生態系の階層構造の主な構成種の概要を述べたが次のような樹種も生育し群落がみられる。続けて樹種と野鳥の関係について述べる。

● センリョウの実：採食する鳥類はツグミ類（シロハラ、トラツグミ、ツグミ、アカハラ）、メジロなど。

● マンリョウの実：採食する鳥類はツグミ類（シロハラ、トラツグミ、ツグミ、アカハラ）、メジロなど。

● ミミズバイの実：採食する鳥類はツグミ類（シロハラ、トラツグミ、ツグミ、アカハラ）、メジロなど。

● モッコクの実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カラス類など。

● マサキの実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カワラヒワなど。

● アオキの実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、ツグミ類など。

● イヌツゲの実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロ、ヒレンジャク

● バリバリノキの実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、ヒレンジャク、キレンジャクなど。

○リュウキュウマメガキの実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロ、シジュウカラなど。

○イイギリの実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロなど。

○アカメガシワの実：採食する鳥類はヒヨドリ、



メジロ、ツグミ類、イカル、ノゴマ、ムギマキ、ノビタキなど。

○ イヌザンショウの実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、ツグミ類など。

○ ヌルデの実：採食する鳥類はキュウシュウキジ、コジュケイ、ヤマガラなど。

○ ハゼノキの実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロ、カラスバト、キジバト、キュウシュウキジなど。

○ ヤマハゼの実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリ、メジロなど。

○ ウリハダカエデの実：採食する鳥類はシジュウカラ、ヤマガラ、ホオジロなど。

○ エゴノキの実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリなど。

○ ニワトコの実：採食する鳥類はカラスバト、ヒヨドリ、カラス類、カワラヒワ、ホオジロ、カシラダカなど。

○ クサギの実：採食する鳥類はカラス類、カラスバト、ヒヨドリ、メジロなど。

○ アキグミの実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カラス類など。

○ ナワシログミの実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カラス類など。

○ ヤマハギの実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カラス類など。

○ ネムノキの実：採食する鳥類はヒヨドリ、メジロ、カラス類など。

○ テリハノイバラの実：採食する鳥類はヒヨドリ、ホオジロ、メジロ、カワラヒワ、キジバト、カラス類など。

○ コマツナギの実：採食する鳥類はヒヨドリ、ホオジロ、ヤマガラなど。

▲ イヌガヤの実：採食する鳥類はカラス類、ヒヨドリなど。

以上は木本植物の果実や堅果などと採食する各個体群について述べたが、新上五島だけの観察記録ではない。

日本国内で、鳥類によって種子散布され、照葉樹林の形成にかかわってきた鳥類群集が理解できたであろう、森林生態系の一員としての各個体群の役割まで明らかになった。

このように整理すると、カラス類（ハシボソガラス・ハシブトガラス）の目立つ行動、役割が明瞭になる。カラス類の役割を生態学の面からみると食物連鎖・食物網の大切な役割をしている。人間との直接的な立場からみるとゴミの散らかしやであり嫌われ者、他の鳥類の卵やヒナを捕獲し嫌われてもいる。

ところが、このような事が町内の蛤海岸であった。家族から離れた1羽のマナヅルの幼鳥を保護し給餌し越冬させていた。

マナヅル幼鳥は自由に干潮時には露出した砂浜を闊歩していた。その近くにいた犬がマナヅルの方へ向かって歩きだした。

ツルは犬が大嫌い、鴨川誠はその様子を心配しながら観察していた。ところが何処からかカラスの集団が飛来し鳴きながら騒ぎ犬を攻撃し、砂浜から追い出し鳥同志を守った。初めてみた観察であった。

さて、カラスの行動の話題はわかる。新上五島町に近い平戸市の南部に上阿値島と下阿値島があり海岸が絶壁である。その高い山頂や斜面に熱帯系のヤシ科のピロウが生育し群落が形成されている。

私は大学時代に高い位置にどうして生育しているのか疑問を抱き実験により解明した。

南国では海岸際にピロウは生育し結実し海岸に落とし、ピロウの果実は海流により運ばれ、島の海岸まで運ばれ漂着し、興味が強いカラス類がくわえて山頂まで運び、その不消化の種子が発芽し生育し群落を形成するようまでに発達したのである。海水に浮く、海水に長期間耐え発芽する実験、ハシボソガラス・ハシブトガラスが食べる実験にも成功した。大学時代の実験の事例である。

江ノ浜沖に位置する相ノ島にも自生のピロウが生育していると聞いているが海岩線付近には遠くから観察では確認できない。しかし直接観察していないが、平戸のようにカラスが島の内部へ漂着した種子を運んだのでは、平戸の事例から推測している。つまり種子分散に野鳥（カラス）が深く関係していることを知ることができる。

## 16. 野鳥の保護

野鳥は鳥獣保護法により保護されている。第1章第1条（目的）この法律は、鳥獣の保護を図るための事業を実施するとともに、鳥獣による生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害を防止し、合わせて猟具の使用に係わる危険を予防することにより、鳥獣の保護及び狩猟の適正化を図り、もって生物の多様性を確保、生活環境の保全及び農林水産業の健全な発展に寄与することを通じて、自然環境の恵沢を享受できる国民生活の確保及び地域社会の健全な発展に資することを目的とする。・・・以上のような目的で法律で守られている。

狩猟を行うには保護区の設定や期間、狩猟対象種なども定め規制があり抑制的である。狩猟中には狩猟による事故が発生しないように細心の注意をはからなければならない。

環境庁の定めた三次メッシュ調査では、留鳥は表3-1、3-2で前述のとおりキュウシュウキジ、カラスバト、キジバト、アオバト、ウミウ、アオサギ、コサギ、トビ、カワセミ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒガラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、イソヒヨドリ、スズメ、キセキレイ、カワラヒワ、ホオジロなど26種・亜種を記録したが、三次メッシュ調査で出現しなかつた種類がミサゴ、ハヤブサ、カンムリウミスズメなどいれて29種、亜種となる。加え約30種の個体群が生息している。

この中には繁殖のために巣箱を架設するとよく利用し営巣する個体群はカラ類のヤマガラ、シジュウカラであり巣箱の架設と食餌樹木の植栽は自宅の庭にもできる保護活動である。巣箱の作り方については後述する。

### 1) 食餌樹木の植栽

15 野鳥と木の実の相互関係の項で述べた樹種を植栽すればよいが、苗木を入手しやすく、活着しやすいのは、木本植物で高木はクスノキ、カゴノキ、ヤブニッケイ、モチノキ、ナナミノキ、クロガネモチ、モッコク、ムクノキ、エノキ、ヤマザクラ、イイギリ、センダン、アカメガシワなど。

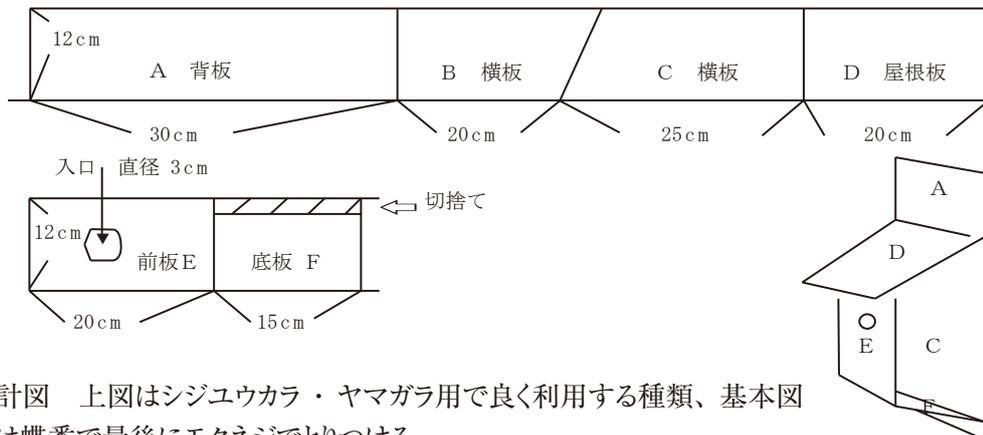
庭園に植栽するには、低木でヤマグワ、ナナカマド、ヒサカキ、ハマヒサカキ、シャリンバイ、ナンテン、トベラ、タチバナモドキ、ヤツデ、メギ、ノイバラ、モミジバイチゴ、サンショウ、イヌザンショウ、マユミ、ニシキギ、ウメモドキ、クロウメモドキ、ナツハゼ、イボタノキ、ムラサキシキブ、ガマズミ、ヤブデマリ、マサキ、つる植物キズタ、ノブドウ、エビヅル、サンカクヅル、サルトリイバラ、ツルウメモドキ、ヘクソカズラなど。

※下線は植木店などで入手できる植物。

### 2) 巣箱の架設

野鳥のシジュウカラ、ヤマガラは人為てきに造られた巣箱をよく利用する。研究者によるとシジュウカラは人間が栽培している農作物の害虫を捕食し1年間に1個体が数十万円分、人に貢献しているという。

① 材料：板の厚さは最低5 mm以上で 廃材の利用 製材所などで安価で販売している。



② 設計図 上図はシジュウカラ・ヤマガラ用で良く利用する種類、基本図 屋根板は蝶番で最後にモクネジでとりつける。



### ③ 巣箱架設と時期

取り付ける木は、種類など選ばなくてよい。グラグラしないところ、枝や又にはのせない、入口の前に空間がある場所を選ぶ、上下をシュロ縄でしっかり縛る。時期は冬期に、4～5月は遅すぎる。

### 3) 給 餌

冬期の最も彼らの食物が少ない季節に保護の目的で、庭先のネコにたいする安全な場所に、いろいろな種類の食物を与えるとヒヨドリ、メジロ、ヤマガラ、シジュウカラ、カワラヒワ、ス

ズメ、キジバトなどの野鳥が庭先や窓辺に訪れてくる。

鹿児島県出水市では、ツル類の保護のために食物を一定の場所に散布し与えている。出水水平野へ観察に行ったのは1951年の冬期で、マナヅルは23羽、ナベヅル218羽で計241羽でした、ところが2015年冬季には17005羽と公表されている。食物(餌)と安全が確保されているからだ。このような保護の結果だ。餌を与えているからである



メジロはミカンを好む 栄喜公陽写 (栄喜貴穂宅)



窓辺に採餌に飛来したヤマガラ (末竹康春宅)

### 4) 水 場

食物とともに野鳥にとって大切なのは、私たちと同じように水である。水は毎日、飲む水と共に水浴に必要である。水場が少ない島では、早朝から観察していると、送電線に発生した水滴をメジロ、ヒヨドリ、ホオジロ、カワラヒワが飲む行動をよく見る機会がある。谷川、溪流沿いなど水辺付近に野鳥が多いのも理解できるであろう。

次の写真のように、つくばい、石臼に水をいれてやるとよく利用するようである。山林などではセメントで固めた丈夫なものを設置すると保護・保全になるであろう。シジュウカラ、ヤマガラなど小鳥は深いと水浴はしない。浅い所と深い場所と傾斜をつけ変化をつけると、キジバト、カラスバト、アオバトなど中型、カラス類の大型が水浴できる。カラス類は河川や道路の凹面に溜まった水で水浴している行動を見ることがある。



溜り水を飲んでいる。その後は右の写真のように水浴の行動になる。



水浴中のヒヨドリ。水中に入り翼を震わせ洗う。

・ヒヨドリの行動:安全確認、警戒→水飲み→警戒→水浴→翼を震わせ→縁へ上がる→警戒→別の場所へ移動安全な場所で翼を干す。一連の行動である。



自宅の庭先でも利用するが。天敵（ネコ、アオダイショウ）がよくくるような場所は適してない。設置場所は、安全性が確保される場所、えび屋さんで製作した手作りの給水場下図のようにカワラヒワが利用した。



カワラヒワが水を飲みに飛来（大坪一博宅）



ヤマガラ用巣箱 黒田倉人製作（黒田宅）

野鳥にやさしい心；安全な繁殖場所の提供（巣箱）・食物（餌）の提供・水飲み場の提供は、野鳥の保護と保全であり、生態系の保護、保全で生物の多様性に繋がりは人間の生命を守ることもつながる良いことである。と鴨川は理解している。

### 17. 自然保護へのいろいろな活動



① 佐世保市烏帽子岳に設置した表示板



② 韓国、台湾と連携した鷹の渡り観察会



③ アカハラダカの観察に集まった烏帽子岳



④ 台湾で開催された国際野鳥観察日本コーナー



## 18. 生き物の地方名を後世に残そう

新上五島町の方言は島の方言は宝である。それと共に大切なのは生き物の名前、生活用品の名前も保護したいものである。町内での地域、集落により異なるものと推測される。鴨川は生物の名前を聞きとり調査をしているが今回は植物のほんの一部について資料編表10に掲載した。ぜひ町内の皆さんで楽しく収集していただきたい。

野鳥については九州地方における名前を収集しているがいろいろなつながりが明らかになり楽しくなることがおおい。80歳前後の年齢で断ち切れる状況である。

## 19. これから野鳥観察を楽しむ

### 1) 町（島）の概要

新上五島町の陸地土地面積は21934平方キロメートル、世帯数9958、人の総数19866（男9374、女10492）である（平成29年3月末現在）であり、周囲は海に囲まれ、湾・奥深い入江・浅く小さな入り江、無人島は多く、河岸線の長さは長く多様な環境である。前述したとおり緑色が濃く、葉のクチクラが厚く、キラキラ光る照葉樹林に被われている。

### 2) 町へバードウォッチング歓迎

#### A. フライト

福岡空港⇒五島（福江）⇒バス⇒福江港⇒奈良尾港、れから目的地へのガイドはバードウォッチングガイド編で計画する。長崎空港からの便もある。

#### B. 高速船

佐世保港⇒有川港 & 長崎港⇒奈良尾港 & 長崎港⇒鯛ノ浦港・有川港これから目的地へのガイドはバードウォッチングガイド編で計画する。

#### C. フェリー

佐世保港⇒有川港 & 長崎港⇒奈良尾港これから目的地へのガイドはバードウォッチングガイド編で計画する。

#### D. 長距離の大型フェリー

博多港⇒青方港、これから目的地へのガイドはバードウォッチングガイド編で計画する。A～D共に同じルート帰路がある。

### 2). バードガール・カメラガール・山ガール歓迎

トイレもガイドはバードウォッチングガイド編で示した各地にあり安心・安全であるが晩春から秋期までの期間は足元に注意すること。

### 3) ヒトの食物（食糧）

本土から持参する必要はない。有川、浦桑、青方、奈良尾に小型スーパーがあり本土と同じ商品が買える。五島うどんなど食堂もあるが、昼食用べんとうはスーパーで買い求めないと探鳥地にはべんとうはない。

喫茶店は有川港の約300mの処に「らんぶる」という鴨川が利用する店があり、地元の話にも弾み休息时间となる。

### 4) カメラなど撮影用品

双眼鏡、望遠鏡、録音用機材など専門店はない。必ず持参する必要がある。

### 5) 教育委員会

長崎県南松浦郡新上五島町青方郷 1585-1

文化財課 長崎県南松浦郡新上五島町有川郷 578-36

### 6) 生息記録追加が期待される鳥類予測

五島列島の地理的な位置や生息環境から推測すると観察を楽しむには短時間、短日、短期間に生息する鳥類個体群は海岸線や岸壁で休息群が発見されるだろう。



例えばアビ類、カイツブリ類、海ガモ類、アイサ類、ウミスズメ科、アホウドリ科、ミズナギドリ科、トウゾクカモメ科、カモメ類、アジサシ類、チドリ科、シギ科などに注目するといろいろな種・亜種の発見がこれからの楽しみだ。

また、陸地の鳥類群集ではタカ科、ハヤブサ科、フクロウ科、ハト科、カッコウ科、キツキ科、ヒバリ科、セキレイ科、タヒバリ類、ヒヨドリ科、モズ科、小型ツグミ類、大型ツグミ類、チメドリ科、ヒタキ科、ホオジロ科、アトリ科、ムクドリ科、モリツバメ科、カラス科などの各個体群が出現するであろう。



クロサギ減少傾向(栄喜公陽 写)

近年、特にクロサギは無人島の海岸周辺で繁殖していたが釣り人が上陸する島では人を恐れ繁殖しなくなった。人への警戒とカラス類の影響が大きな原因である。

クロサギは海岸の波打ち際で小動物を食物とするサギ科の鳥だ、海岸線に打ち寄せる波が高い時には、河川の中流域に避難することがある。



冬鳥カンムリカイツブリ(栄喜公陽 写)

カンムリカイツブリは、特に諫早湾干拓で激減した種であり長崎県の選定絶滅危惧種に、今里の入江、三日ノ浦などにも生息する貴重な水辺の鳥類である。



アカハラダカ鷹柱(栄喜公陽 写)



アカハラダカの渡り(栄喜公陽 写)

アカハラダカが長崎県内を渡ることを明らかにしたのは著者の鴨川である。

私は、お隣の韓国、光陵で1972年8月末に本種を初めて観察した。その時はマツ林の林冠部で鳴きながら集まり騒々しい行動であった。

その後の観察記録のデータから日本国内での観察事例から考察すると、光陵での集結は渡り前の終結だったのだ。

さて長崎県内で秋の渡りの初認は私が知る記録は、最も早い時期は8月27日で、この事例などから考えると、前述のとおり韓国の光陵でのアカハラダカの行動は、長距離を渡る直前の行動であったのである。

韓国の元炳旰博士と共にそのような行動を観察したフィールドノートの記録が懐かしく思い出が浮かんでくる。



博士から「アカハラダカは、長崎県を通過しませんか?」と1972に問われた時点では、全くその行動は不明だった。

「アカハラダカの渡りは全く観察した経験はありません」と応えました。

そのように応えていた私が1985年9月29日に、長崎県佐世保市国見岳山系で渡るアカハラダカ3羽の一群を目撃し興奮した。観察事例がないと言っていた私自身が便乗していた自動車の窓から発見した。

国見岳山系からの帰路、国見トンネル上の曲がりくねった道路で私は「車、止めて、タカだ」と大声で叫んだ。運転手の犬塚さん急ブレーキ、私は双眼鏡を片手に降りて、「アカハラダカだ。」と興奮した声で同乗者の会員に教えた。皆が初めて見たタカである。

この時が国内を渡るアカハラダカの九州での初めての事例である。

その後、日本野鳥の会長長崎県支部の活動の一環として調査をすすめ、西九州での渡りルートを解明した。

アカハラダカの渡りの情報は全国に広がり各地から自家用車や貸し切りバスなどで大勢の観察者が渡り観察に訪れ「観光資源」となった。

町内でワシ類やタカ類などの猛禽類を長時間観察するのに適した地域は、自然ガイドでも案内しているが代表的なスポットは、町内の北方から自然ガイド1の津和崎灯台(図1-8)、自然ガイド2の番岳、自然ガイド6高熨斗岳(図6-1および図6-2)の場所、自然ガイド8矢倉岳(図8-1)、自然ガイド17三王山および自然ガイド9神部、若松の龍観山展望台、自然ガイド24米山展望台などを薦めたい。

ハチクマ、アカハラダカは旅鳥であり通過する個体群であるが、休息や一泊する個体もあり、運が良ければ朝の飛び立ちを観察できることがある。

春期は3月下旬から5月上旬、秋期は9月から10月の日程で計画すべきである。

冬鳥としての猛禽類は、最近はまれに観察できるオオワシ、オジロワシ、1990年代は同時に数羽の個体を観察できたが、近年は越冬に飛来する個体が減少した。

地球温暖化の影響だろうか、海カモ類とともに減少している。かつてはクマタカの若鳥も越冬したことがり、カモメ類を捕獲し食物としていた。

普通にオオタカ、ハイタカ、ノスリなども越冬する。留鳥として観察できる個体群はトビ、ミサゴ、ハヤブサであり観察するチャンスは高い。観察には、2泊3日以上計画が必要であり、理想は1週間か10日の滞在を推薦する。

宿泊は民宿、キャンプの施設もあり食品もスーパーが、有川や青方などにあり便利である。

自家用車を利用する場合は、ガソリン代は、島内は本土より1リットル当たり数十円は高いのでその覚悟が必要である。電気自動車レンタカーもあり便利である。

新上五島の美しい自然が地方の創生の一助になり、美しい自然に恵まれた宝を永遠に保護・保全の思想を生み出す力になれば幸いであり、旅行者には主旨を理解していただければありがたい。

人の癒し効果も川の「せせらぎ」に次ぎ「小鳥のさえずり鳴き声」は癒し効果は大きいと言われる。

疲れた心身をバードアイランドで癒し活力をつけ健康になっていただければ著者として幸いである(鴨川)。





# バードウォッチングガイド

## — 自然ガイド —



国鳥 キジ科キジ (キュウシュウキジ) 成鳥



## 1. 津和崎鼻・灯台・津和崎



図 1-1 小値賀島、津和崎鼻より遠望 2012.7.24



図 1-2 野崎島、津和崎鼻より遠望 2012.7.24



図 1-3 魚食性のミサゴ 佐世保市で 富永喜吉 写



図 1-4. カノコユリ 2011.8.13



図 1-5. エビツル 2011.10.7

### 景 観

遠くに小値賀島（図1-1）、北東に野崎島（図1-2）など遠望ができ絶景だ。

晴天の日は島々の緑がブルーの海面に映えて美しく訪問者の心を癒してくれる（図1-1、1-2）とも小雨時の写真であり、晴天であれば、鮮明に見える。

### 見どころ

**動物：**海峡を隔てた野崎島の急傾斜地に生息するキュウシュウシカの生活の様子を観察できることがある。

津和崎鼻まで車道では路面をすばやく横断するイタチやイノシシと出会うこともあり旅行者にとっては楽しみのひとつである。

**植物：**タブノキ萌芽林が4月下旬～5月中には赤色や淡黄色の新芽の新緑が美しい。

津和崎鼻では照葉樹林から放出されるフィトンチッドと潮風が混合した空気をいっぱい吸いこみ満喫できる。

津和崎鼻に生育するオキナワシタキヅル、ノアサガオは長崎県内での北限地、前種は甘い香りを放し脳裏に残る（図1-10）。

ヤブツバキ群落の開花時期（12～2月）で真紅色の花に癒される。また、開花期には野鳥のヒヨドリ、メジロなどが吸蜜に飛来する。顔を花にさし入れる吸蜜行動を観察できる。

**野鳥：**ここで渡り鳥の移動を楽しむことができる。五島列島を南北に渡る鳥、東西に渡る鳥を観察することができる。

津和崎郷、曾根郷などは渡り鳥の渡り道であり、広義には日本列島を東西に移動する個体群、南北に移動する個体群が通過する。

これから渡り鳥について述べる内容は前者を東西型、後者を南北型という。

以上述べたのは「渡り鳥」のことであり、生息する季節により区分し夏鳥・旅鳥・冬鳥・迷鳥などに分類することができるが地域によりその個体群は異なる。また、流動的でもある。

**留鳥：**これから述べる留鳥とは周年五島列島に生息し繁殖する個体群で、たとえばキジ目キジ科キュウシュウキジ（表紙図）、カイツブリ目カイツブリ科カイツブリ、ハト目ハト科カラスバトキジバト、タカ目ミサゴ科ミサゴ、タカ科トビ、ブッポウソウ目カワセミ科カワセミ、スズメ目モズ科モズ、カラス科ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ科シジュウカラ、ヤマガラなど観察することができる。

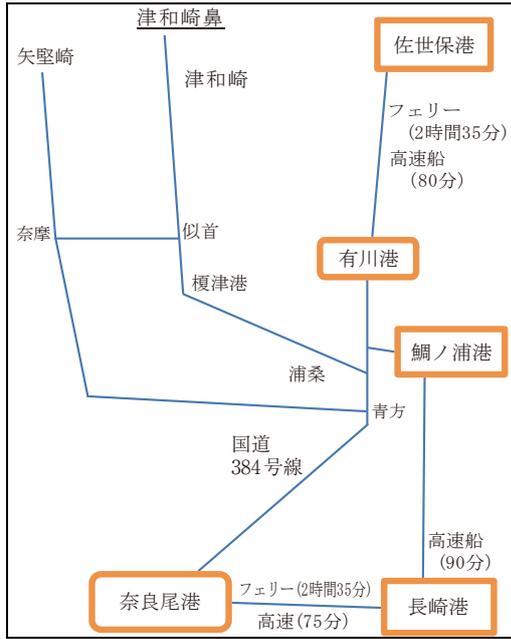


図1-6 コースガイド



図1-7 灯台・椿公園への登山口



図1-8 津和崎灯台 津和崎鼻 中山 写

### インフォメーション

#### 交通

① 有川港：国道384号線で奈良尾方面へ向かい浦桑で右折し榎津港・似首・小串・立串・小瀬良・大瀬良を通過し道なりに走ると目的地の米山・津和崎・津和崎鼻へたどり着く。

② 鯛ノ浦港：国道384号線へ向かい左折し①と同じコースを走る。

③ 奈良尾港：国道384号線で有川港へ向かい、浦桑で左折し①と同じコースで走る。

#### レンタカー 市外局番：0959

有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042

奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364

トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100

トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200

シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

トイレ：津和崎椿公園、自然公園内にある。水道もある。

宿泊：民宿あり

#### 見どころ

・津和崎椿公園：津和崎鼻一円

(図1-7、1-8)

・灯台からの展望：津和崎鼻の高所

(図1-8)

・ノアサガオの北限地：道路沿い

(図1-11)

・オキナワシタキヅルの北限地：道路沿い

(図1-10、1-14)

残念なことに蔓は伐採され大きいものは枯れたが小さい個体が生きている。

・カラスバト：長崎県絶滅危惧種、国指定天然記念物：地域全域で鳴き声を体感できる。

・ミサゴ科ミサゴ：(図1-3) 絶滅危惧種、長崎県、国に選定され貴重種である。本種は海岸の絶壁の岩棚などに営巣し繁殖している。

・渡り鳥たち：夏鳥、春に南国から渡来し五島列島および新上五島町で繁殖し秋には越冬地へ南下する個体群を夏鳥という。

例えば、タカ目タカ科サシバ、フクロウ目フクロウ科アオバズク、ツバメ科ツバメなど。

また、ミズナギドリ目ミズナギドリ科オオミズナギドリは近海の平戸市上阿値賀島および下阿値賀島で繁殖し五島列島海域、東シナ海域はオオミズナギドリの採食場となっている。

本種は魚食性で海面の表層を泳ぐ魚類群を低空飛翔(1-3m)し魚を確認すると海面に突入し魚を捕らえる。

漁師さんは、オオミズナギドリの群れを指標に漁船を走らせ漁を行うという。

冬鳥：タカ目タカ科のオジロワシが海岸線の上空を飛翔している姿を見ることがある。行動範囲が広く主に海岸線上空である。



図1-9 ヤブツバキの落花 2012.3.6



図1-13. ヤブツバキ群落 2011.2.8 通和崎鼻



図1-10 オキナワシタキヅル北限地



図1-14 南方系のオキナワシタキヅル果実 2008.8.8



図1-11 ノアサガオの北限地



図1-12 カノコユリ 2011.8.4

### ・美しい花・香る花

春～初夏：淡い芳香を放す珍種オキナワシタキヅル（図1-10）は6月に開花、ノアサガオは（図1-11）は5～6月に開花する。

夏：津和崎鼻の路傍にネナシカズラ：が他の植物に絡み生育している。名の通り根は地中に達していない不思議な植物だ。また道中（図1-12）のようなカノコユリが見られたが最近道路拡幅工事ため消えた。残念なことである。

コオニユリが7～8月に赤色の花が開花し旅行者に、ほほえみかけてくれる。本町内で最も普通にみることができる種類である。

道路拡幅工事のため消えたカノコユリは長崎県絶滅危惧種に指定し保護している植物であった。

ところがその趣旨が県民に徹底しないのは残念である。

佐世保市花に選定した結果、採取により減少傾向にある。

秋：真っ黄色のツワブキの花：小型の菊の花シマカンギクも路傍で目立つ。シマカンギクの花も芳香があり、私たちの心身が癒される香りだ。野性的な香りで心身があらわれる感じを受ける。



図 1-15 希少なカカツグユの果実 津和崎郷



図 1-16 マダケ群落 津和崎集落を中心に分布



図 1-17 高いところから獲物を狙うチョウゲンボウ



図 1-18 ヤツデの花蜜を吸蜜中のメジロ 栄喜公陽 写

山野に花が少ない時期にはメジロ、ヒヨドリが競って、ヤツデの花蜜を吸蜜、そんな行動を観察することができる。メジロが負けて逃げるが多い。

植物には同種の植物で雌花だけを生じる雌株と雄花だけを生じる雄株と区別があるものと、雌花と雄花が同一株にあるものがある。

前種を雌雄異株というのがカカツグユやイチョウカラスウリなどがそれに属し、キュウリやカボチャ、クリなどは後者を雌雄同株という。

・カカツグユ：雌株の果実を見ることは極めて少ないが本町では3株を観察するチャンスがあった。

花の萼片や花冠、雌しべと雄しべがそろった花を完全花という。前述のノアサガオ、カノコユリなどは、それに属する。雌しべか雄しべを欠くものを不完全花という。キュウリはこれに属する。

つまり、雌花と雄花が同じ株にある。

・マダケの分布：津和崎集落周辺には「マダケ」が多く生育している。人家を取り囲むように分布しており分布範囲は町内では最も広範囲にわたり生育している。

津和崎の神社付近には、ヤマグワが生育しており果実が熟する6月には野鳥たちが採食に訪れる。人も生食でき、幼いころ生食し唇が紫色に染まった記憶がよみがえった。

・集落で猛禽類：電柱や電線を注意深く見ていると(図1-17)のような猛禽類が休息していることもある。

電柱に止まる種類には、どんな個体群があるかミサゴ、トビ、ハチクマ、オオタカ、ハイタカ、アカハラダカ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、アカアシチョウゲンボウ、ノスリなどタカ類が休息している姿を見る機会がある。注意深く観察することが大切である。大型ではアオサギ、コサギなどサギ類が、小型ではスズメ、カワラヒワ、アトリ、シジュウカラ、ヤマガラなど。中型ではヒヨドリ、キジバト、カラスバトも電線、電柱に止まる。



図 1-19 ヒヨドリ 2012.12. 栄喜公陽 写

ヒヨドリには新上五島で繁殖し留鳥として周年生息している個体群と秋期に北国から越冬のために飛来する個体群とがあり後者は飛来当時にはエネルギーの消耗で体が細く落ち着かない行動をする(図1-19)。



## 2. 久志・江袋・番岳・曾根



図2-1 江袋海岸 びしゃご瀬 2012.11.26



図2-2 タブノキ萌芽林樹冠 魚目半島北部地域



図2-3 夏鳥アオバズク幼鳥



図2-4 ヤイロチョウ 佐世保市で撮影、新上五島町内各地で鳴き声を聞くことがある。

### 景観

多石山(362m)を最高に馬の背の形状をした地形が南北に走っている。険しい地形だ。鳥越は見られるが尾根への山道はない。

山体の西側中腹地帯を県道32号線が津和崎鼻までのびているがその途中がこの地区である。

タブノキを優占種としたタブノキ萌芽林群落が続く、北魚目半島は人工林は極めて少なく自然林である。

### 見どころ

**植物**：森林の群落は原生林はなく、すべて二次林群落である。

険しい地形を被っている森林の高木層は常緑広葉樹のタブノキを主とした二次林であり、亜高木層はヤブツバキ、シキミ、ヤブニッケイなどである。しかし、シキミは果実などの採取により減少して亜高木層の構成要素に変化がみられた。

海岸から急傾斜の小道を江袋教会に向かい登ると天満宮跡地にムクノキ大木が聳え目立つ樹齢約200年の大木で、その下を通り抜けると教会の山門としてイスノキが植えられている。

さらに庭園の樹木としてスダジイの大木が教会敷地の下の段に保護生育している。

シイ類には2種類があり本町に分布するものはスダジイとツブラジイで秋に実る堅果の形状が異なる。前種は楕円形であるがツブラジイは彼女のつぶらな瞳を連想させる形状である。

・暗闇に鳴くアオバズク：アオバズクはつぶらな瞳だ。夏鳥として飛来する。夜行性の活動家で眼球が大きい。各地に生息する(図2-3)。

**動物**：偶蹄目イノシシ科イノシシ属ニホンイノシシが全町内に分布している。無人島の島々にまで生息域を広げ年2回の繁殖で生息密度が高まり農作物、家庭菜園および生態系への影響も大きいようだ。

シカ科キュウシュウシカも全島に生息し林床植物を採食するだけでなく、タブノキ、イヌビワなどの樹皮を剥ぎ食べている。そんな樹木は枯死し立ち枯れ状態になっている。

**野鳥**：留鳥、カラスバト、ミサゴ、ヒヨドリ、メジロホオジロ、カワラヒワ、イソヒヨドリなど。

江袋地区に「びしゃご川、びしゃご鼻」という地名がある。びしゃごとはミサゴの俗名であり、住民もよく知っているミサゴ科の鳥で、魚食性の鳥類である図2-8などに掲載した。

・八色の美しい鳥ヤイロチョウ：一度出会うと忘れられなくなるほど魅力があり感激は脳裏からはなれない美しい鳥だ。

鳴き声にも特徴がある(図2-4)

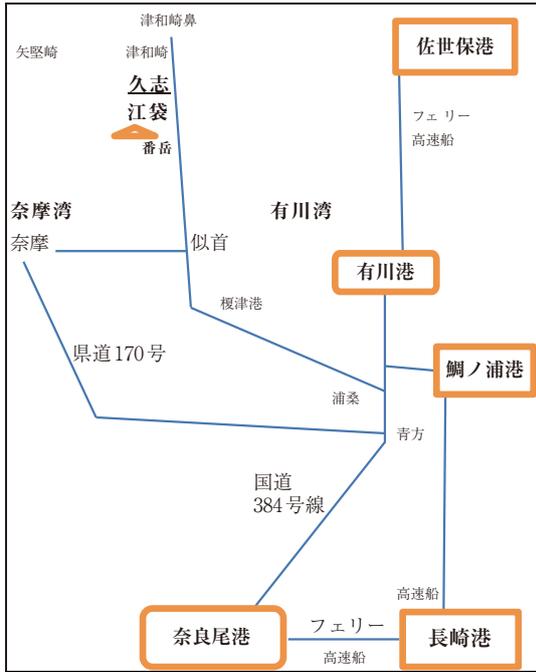


図2-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港：国道384号線で奈良尾方面へ向かい浦桑で右折し榎津港・似首・小串・立串・小瀬良・大瀬良を通過し道なりに走ると目的地の江袋・久志（仲知）へたどり着く。
- ② 鯛ノ浦港：国道384号線へ向かい左折し浦桑で右折し①と同じ。
- ③ 奈良尾港：国道384号線で有川港へ向かい、浦桑で左折し①と同じ。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー（有川地区） ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー（奈良尾地区） ☎44-0364
- トヨタレンタカー（有川地区） ☎53-0100
- トヨタレンタカー（奈良尾地区） ☎44-1200
- シンコーレンタカー（奈良尾地区） ☎44-1711

#### 施設

トイレ：江袋や道中の丸尾にもある。

駐車場：江袋にある。宿なし。

#### 見どころ

- ・ 江袋教会、仲知教会のステンドグラス
- ・ 天満宮跡地の大ムクノキ
- ・ 大木やタブノキ萌芽林群落

江袋教会の下に、天満宮の跡地があり、その一隅に落葉広葉樹のムクノキ大木が聳えている。樹齢約210年、この地域で最も目立つ存在だ。

- ・ 教会の正門に両側にイスノキ：マンサク科の常緑高木が山門、庭樹して栽培されている。西南日本に分布する樹木である。防風林として利用している地域もある。
- ・ 教会の正門への通り道にスダジイ：ブナ科大木が側根を露出させながら力強く生きている。その様子を観察していると生気を伝授する。

・ 美しい花・香る花春：海岸地帯には背丈が人の高さほどもある大形のハマウドおよび小形のハマボッサが白色花を開花する。

夏：中通島、頭ヶ島、若松島など本町内に分布するユリ類はコオニユリ、オニユリ、カノコユリなどである。コオニユリは海岸沿いから道路沿いなどに自生し最も普通にみられ、島を飾る。花期は夏季である。

・ オニユリ：前者よりやや大形であるが花形はコオニユリに類似している。花期に茎と葉のつけねに珠芽を着けているのがオニユリである。

珠芽は成熟すると落下し芽を出し地上で繁殖する。図2-7のように海岸の高潮線地帯に分布しているのが江袋海岸である。

中国原産のユリ科植物として知られているが町内の分布を調査して明らかになった事実はこの海岸から広がった形跡があることである。



図2-6 天満宮跡地 ムクノキ大木 2010.12.6 江袋



図2-7 オニユリ自生地 2008.7.31 江袋海岸



図2-8 ミサゴ 江袋河岸に瀬や川に「びしゃご」の名称がある



図2-9 タブノキ防風林周辺にカラスバトが飛来する



図2-10 キダチアロエ 2010.12.6 江袋

民間薬として五島列島には屋敷内に栽培されている。対馬暖流の影響により温暖な気象により秋12月に開花し越冬している。民間薬として利用され「医者いらず」という名称もある。

対馬海流は琉球列島の近海で分岐し九州西岸を通り日本海に入り本州と北海道に西岸を経てサハリンの西岸に達する。対馬暖流である。



図2-11 漂着ヤシ類の実 江袋海岸対馬暖流で運ばれたと推測。

対馬海流に乗って「珠芽が運ばれ」この地に自生した子孫ではないかと推測している。

乾いた珠芽は海水に浮くし、南方系のヤシ類の果実も江袋海岸に最も多く漂着する。過去においては約1年間に12個の果実を採取したことがあり、そのような証拠により類推した。

・江袋海岸線は砂浜：礫浜・岩浜が一度に見られる海岸で変化に富んでいて興味深く楽しい海岸でネコノシタ群落、ハマゴウ群落など砂地に生育する植物が観察でき楽しむことができる。

・水面に浮上する魚を捕らえるミサゴ：海面上空にミサゴが四季を通じ飛来することがある。

・人の生活に利用されている防風林：タブノキなど自然林を利用している防風林、防潮林は各地域で見られる(図2-9)。

・北魚目地区：国重要文化的景観選定地域である。神社仏閣、教会、漁港、農耕地、人の生活にも関心がもてる地域である。

・アロエの開花：図2-10に民間薬として利用されてきた「キダチアロエ」が現在も新上五島町の各地に今も生きている良薬である。あたたかい対馬海流で冬期にも枯れることなく開花する。

・ミサゴとびしゃご川・びしゃご鼻：前頁でもミサゴ(びしゃご)については述べた。



図2-12 地すべり対策としてのメダケの植栽

・メダケ林：中通島の耕地は表土が浅く急傾斜地が多いため地すべりが発生する場所には、その地すべり対策として人為的に植栽されている(図2-12)。

竹林内はウグイスの繁殖場所に適している。竹林内は天敵であるモズの侵入を避けることができる。

・漂着物：前述した対馬海流を立証する南方系ヤシ類の果実(図2-11)は町内では江袋海湾の入り江に最も多く漂着した。

地元の人が拾い自宅の庭で栽培したら発芽し約150cmまで生育したが低温で枯死したという。



### 3. 立串・小串・大浦・似首



図3-1 立串漁港には冬の風波が高い時にはカモメ類が飛来



図3-2 赤崖 (アカダキ) 2012.10.17



図3-3 立串漁港 冬鳥のカモメ類が飛来する



図3-4 ノスリ 2012.11.23 西海市で栄喜公陽 写

### 景観

有川湾に面し突き出した立串鼻、この形状が類似した小串鼻があり、そのつけ根は漁港がある(図3-1参照)。突出した鼻の海岸線は岩場に囲まれた絶壁である。その一部に礫浜があり海浜植物が少数であるが生育している。

山頂付近には神社があり、その周辺はタブノキの群落のみられ大木が生育する尾根を散策すると心地好い潮風が顔肌を撫でる。

立串漁港集落の後背地の高い山は北魚目半島で最も高い番岳(442m)である。

山頂からは360°東シナ海、五島灘を眺望でき、眼下には有川湾、奈摩湾を眺望できる絶景の景勝地である。山頂付近はイネ科型の草原群落が見られる。

番岳の南に連なる円錐形の山は小番岳で春は中腹にヤマザクラが散在し開花時には美しい景観を堪能できる。

小さな漁港が各地にありカラス類、トビが生息し晩秋から初春にはカモメ類も飛び交い漁港を賑やかにしている。

### 見どころ

・大木、群落：立串鼻、小串鼻ともに神社がありその周辺にはタブノキ、ツブラジイなどの大木が高木層を形成している。

・ハマウド群落：海岸の砂礫地に生育し春夏期に白色花をつける。草丈は100-150cm、開花後は枯死する。防波堤の外側に生育し目立つ、他の海浜植物も生育している。

・立串・小串・似首などの漁港：冬鳥としてウミネコ、セグロカモメ、オオセグロカモメおよび稀にカモメが数羽などの海鳥を観察できる(図3-8)。

・電柱の頂きに止まるノスリ：冬期に冬鳥として晩秋に飛来し越冬する冬鳥で全島各地に生息する。長崎県の各地にも普通に生息し識別も容易である(図3-4)。

・ワシ類の飛来地：タカ科の大型をワシと言っている。その仲間はオオワシ、オジロワシなどであるが、対馬にはイヌワシも飛来する(図3-9)。

1990年代までは本町で、一度にオジロワシ3個体、オオワシ2個体を観察した経験がある。

生息地は海岸線で漂着魚類やウミネコなどのカモメ類を襲うこともある。クマタカが飛来し越冬したのもこの地区と有川地区であり今後も出現が期待される。

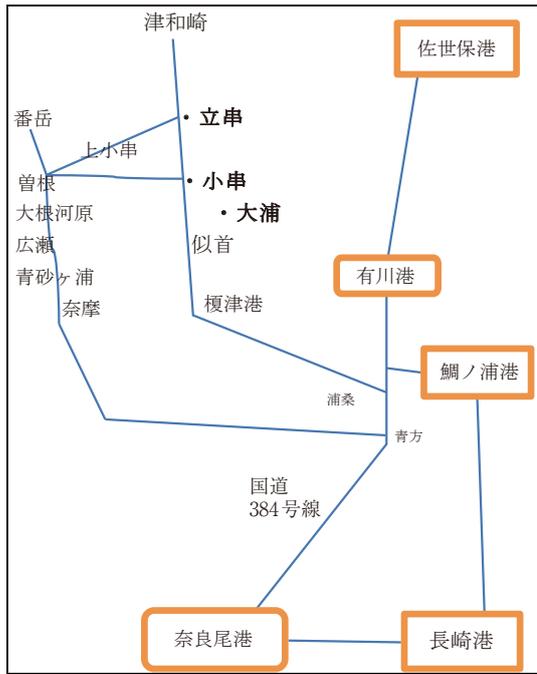


図3-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港：国道384号線で奈良尾方面へ向かい浦桑で右折し榎津港・丸尾を通過し道なりに走ると似首・小串・立串にたどり着く。
- ② 鯛ノ浦港：国道384号線へ向かい左折し浦桑で右折し①と同じコースを走る。
- ③ 奈良尾港：国道384号線で有川港へ向かい、浦桑で左折し①と同じコースを走る。

レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：道中の榎津、丸尾にある。
- 駐車場：小串（北魚目中学校前）
- 宿泊：民宿あり



図3-6 ハシボソガラス 鴨川誠著『長崎県の鳥』1983



図3-7 ハシブトガラス 鴨川誠著『長崎県の鳥』1983

カラス類は、ハシボソガラス図3-6と図3-7ハシブトガラスの2種類が主である。この2種は留鳥であるが晩秋にミヤマガラスが集団で北国から飛来する、鳴き声に差異がある。



図3-8 ウミネコ 2012.11.23 西海市で栄喜公陽 写



図3-9 希に飛来するオオワシ 北海道羅臼で



図3-10 大浦海岸 海浜植物群落 岬の岩棚でミサゴが繁殖  
海水からの塩づくりが盛んである 2008.7.10



図3-11 ヤブツバキ大木 2009.5.15

### 続 見どころ

・立串郷の立串鼻：魚目半島で東の有川湾方向に突出した絶壁に囲まれた立串鼻があり目立つ。

小高い丘を形成し、そこには常緑広葉樹のタブノキ萌芽林の森林群落が発達している。主な樹種はタブノキを優占種とした群落で、堅果は球形（円らな瞳）のものをツブラジイ、堅果は円錐形楕円状で細長く見えるものをスダジイというが、この丘には両種が生育している。

亜高木層にはヤブツバキ、ヤブニッケイ、シロダモなど、低木層にはヒサカキ、ネズミモチ、アオキなどからなる森林群落である。

森林内を散策していると国指定天然記念物のカラスバトが鳴く。飛び立つときにはパタパタと音を発する。

絶壁に根元はゴロゴロした礫で荒波にもまれ角がとれ楕円状の礫であり礫浜である。

海辺の砂礫には草丈が約150cmの多年草のハマウドが春から夏にかけて白色花を開花するが開花後は枯死する。ほかにハマダイコン、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、キケマンソウ、ハマボッス、テリハノイバラなど海辺の植物が少数生育している。

・小串漁港のカモメ類：東に位置する有川湾の方向に面した位置に小串鼻が突出し、その付け根に小串漁港があり防波堤に囲まれている。

晩秋から冬期には海鳥のカモメ類が越冬する北国からの飛来である。

ウミネコ、セグロカモメが多く、オオセグロカモメ、シロカモメ、カモメなどは極めて少ない個体数が越冬する。

・食物連鎖の頂点：五島列島に越冬に飛来する大型のタカ類をワシという慣習がある。その事例はオオワシ（全長88～102cm、翼開長220～245cm）、オジロワシ（全長84～94cm、翼開長199～228cm）、イヌワシ（全長81～89cm、翼開長170～213cm）など一般に鷲と言っている。本町には前種二種が越冬に飛来する。

・大浦海岸：礫浜で転石が汀線で回転し音色を生ずる。春は高潮線のさらに上部に栽培されたアブラナの開花が帯状に広がり、礫の銀色と海面のブルーとの対比が素晴らしい光景だ。

・上小串の大ヤブツバキ：大切に保護されて貴重なツバキで、いずれ大木になる。



#### 4. 矢堅崎・冷水・奈摩・小河原



図4-1 矢堅崎 2012.7.22 ミサゴが営巣



図4-2 オンツツジ 2008.3.21



図4-3 ツブラジイ 2006.11.10 各地の乾燥地に生育



図4-4 羽づくろい中のアオサギ

#### 景観

北方に湾口が開いた地域で、西側は東シナ海に面し海岸線は険しい絶壁が連なっている。円錐形をした矢堅崎は露岩が目立ち東側の一部にシャリンバイ、ハマビワ、ハマヒサカキなどの海浜植物やツブラジイ(図4-3)、ヤブニッケイ、クロキなどが生育している。

早春にはキブシ、アオモジ、オンツツジが開花し険しい斜面をやさしく彩る(図4-2)。

奈摩湾に面した地域には北方から冷水、網上および対岸の湾口に曾根崎が突出し陸部には農耕地があり、まれにみる平地である。

ここから南東部に行くと赤色の赤岳断層が目立つ、その付近に小さな漁港、白草さらに南下すると大根河原、広瀬、三軒家、青砂ヶ浦さらに奥湾部にこの地域で最も大きい奈摩集落および小河原などの集落が散在している。

#### 見どころ

・矢堅崎のミサゴ繁殖地：矢堅崎は図4-1に示すように三角形をした小高い山で海岸線は絶壁で、潮風と乾燥に強いハマヒサカキ、シャリンバイ、ヒサカキ、オンツツジ(図4-2)、ツブラジイ(図4-3)などが生育し露岩の隙間にはテリハノイバラが繁茂している。

頂上付近にはタカ科ミサゴが、営巣し繁殖している事がある。

ミサゴ全長58～60cm、翼開長147～169cmで、雌鳥が少し大きい。営巣はつがいで小枝人工物などを集め皿型に積み上げ、巢の内面には小枝を敷きつめ産座とする。

雌鳥が産卵する期間は雄鳥は近くで、雌鳥を見守る。外敵が近くによると警戒の鳴き声を発し上空を飛び回り攻撃し雌鳥や卵、育雛中であれば雛も守る。お父さんらしい風格がミサゴの雄鳥にはある。

使用中の巣が脅かされることがあれば、別に予備をもち、卵を安全な予備巣に移動させた。

そのような観察を対馬で体験したことがある。別に巣を準備していて、卵を安全な予備の巣に運ぶことがある。

・海岸地帯に生息するクロサギ：近年は激減アオサギ全長95cm、翼開長160cm(図4-4)やダイサギ全長84～104cm、翼開長160cmおよびハシブトガラス、ハシボソガラスなどを子育て中のミサゴは特に警戒している。

クロサギの生活場所は波打ち際の岩礁地帯であり、営巣場所がミサゴと重なることはない。

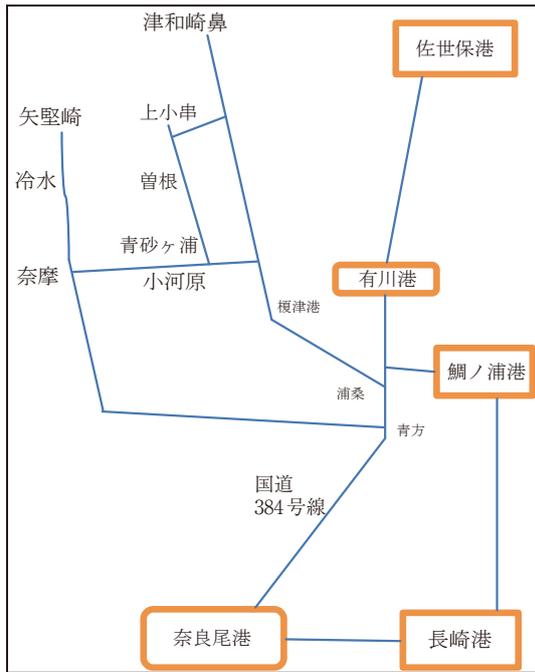


図4-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線を奈良尾港方面へ南下し浦桑で右折し榎津港を通し丸尾を抜け似首で左折し奈摩方面へ道なりに走る。
- ② 鯛ノ浦港から有川方面へ、国道384号線で左折し道なりに走行し青方で右折、県道170号線を奈摩方面へ走行すると冷水、矢堅目公園に着く。
- ③ 奈良尾港：国道384号線で有川方面へ、青方から②と同じコースで走行する。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー（有川地区） ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー（奈良尾地区） ☎44-0364
- トヨタレンタカー（有川地区） ☎53-0100
- トヨタレンタカー（奈良尾地区） ☎44-1200
- シンコーレンタカー（奈良尾地区） ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：矢堅目公園・奈摩・小河原にある。
- 駐車場：矢堅目公園・奈摩・小河原にある。
- 宿泊：宿あり

#### 続 見どころ

・ヒヨドリの渡り：1940年代までは、晩秋ころに北国から東シナ海上空を大群で飛来していた。

ハヤブサなど猛禽類を警戒し楕円形の大集団を形成し海面上空2～3mまで降下するなど様々な行動をくり返し渡りをしていた。したがって晩秋のころのヒヨドリは身体が細く見える。飛んで回る生活行動にも落ち着きがない。

そんな個体は渡ってきたヒヨドリであるが、1970年代になると長崎県内でも繁殖が始まった。

筆者が県内で最初に繁殖を確認した地は、現在の佐世保市世知原町の医院の庭にあるカキの枝に営巣して繁殖していた。それ以後各地で繁殖が確認されるようになった。つまり、長距離の渡りをしないヒヨドリが現れた。

・日本最小の渡り鳥：キクイタダキ全長10cm  
本州の中部以北の高い山で繁殖し長崎県、五島列島では冬鳥として飛来し針葉樹に住む昆虫類を主食としている。近年飛来数が減少傾向にある(図4.7)。



図4-6 生息密度が高いヒヨドリ 西海市で栄喜公陽 写



図4-7 キクイタダキ 佐世保市で栄喜公陽 写



## 5. 丸尾漁港・丸尾郷



図5-1 丸尾漁港 2012.10.17



図5-2 丸尾漁港 漁港には冬鳥のカモメ類や留鳥トビやカラス類



図5-3 トビ(下)とミサゴ(上)



図5-4 休息するカモメ類

### 景観

奈摩湾から東に約700mの位置に似首港、ここは有川湾に面した漁港がある。

さらに南下したところに丸尾郷、丸尾漁港があり目立つ。冬期には両港には海鳥のカモメ類の大群が防波堤に並び港を飾る。

長い防波堤は荒波を防ぎ漁船は港内に係留しておく安全である。カモメ類も避難し堤内や防波堤、堤内の生簀上などで休息していることが多い。沖がしけている日には防波堤や屋根で休息している。

この港で観察できる種類は、ウミネコ、セグロカモメが主で、オオセグロカモメ、シロカモメ、カモメ、オオズグロカモメは越冬する個体数は極めて少ない。

しかし、長時間をかけて飛来を待つと、沖合いが強風の日などは珍種を確認するチャンスも到来するであろう。

たとえば、有川湾口で北方系のフルマカモメ、小河原のコクガンを観察したことがある。

丸尾漁港、集落の背後には小高い番嶽(368m)がありシイ類を優占種とする群落があり林内には鳥類が種子分散により分布した南方系で海岸近くに生育するノシランが分布する。

### 見どころ

・丸尾漁港の海鳥たち：前述したごとく、沖合の海が荒れた日ほど港にカモメ類が飛来し休息する。

珍鳥が出現する可能性もある、たとえば北方系のミズナギドリ科のフルマカモメ全長48cm翼開長107cmでウミネコよりやや小形で全体が褐色である。有川湾の野案中島の北方で記録した。

また、丸尾漁港の対岸である有川湾の小河原の海岸でコクガン全長61cmで、カルガモよりやや小形である。

名前のおり全身が黒色に見えるが腹部が見えると淡白色である。宇久島の海岸でも出現した記録がある。

トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ミサゴ、イソヒヨドリなどは留鳥として生息する。

アオサギは佐世保港・五島列島の有川港航路でフェリーの甲板で船上センサスをしていると5個体の群れで、海面上空約3mを水平飛翔で佐世保方向へ移動している行動を観察した事例がある(図4-4)。

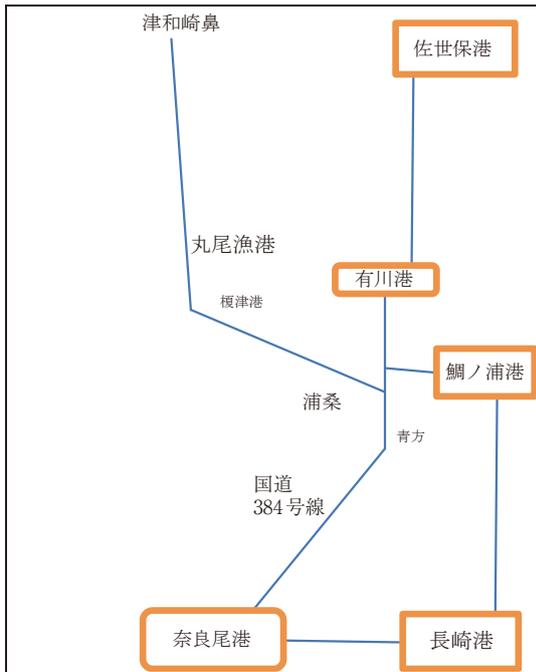


図5-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線で奈良尾方面へ浦桑で右折し榎津港・津和崎方面へ道なりに走行する途中右折すると目的地の港である。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し浦桑で右折し①と同じコースで走行。
- ③ 奈良尾港から国道384号線の有川方面へ走行し浦桑で左折し①と同じコースで走行。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：榎津港・新魚目総合体育館にある
- 駐車場：榎津港・新魚目総合体育館にある
- 宿泊：宿あり

#### 続 見どころ

・海鳥たちの観察地：前の頁につづく。前にも述べたとおり、海上の変化の状況により、また漁船の入船出船の頻度が高いときほど海鳥たちの動きも活発になる。

過去この港および周辺で記録した海鳥は、ウミアイサ、アカエリヒレアシシギ、セグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ウミスズメ、カンムリウミスズメ、ウミウ、オオミズナギドリなどであるが近年は、カモメ類で前述したセグロカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコ、シロカモメ、ワシカモメで後種の2種は極めて少ない。また、カモメ類のカモメの越冬数も少ない。

港内の生簀や防波堤上で、サギ科のアオサギ、ダイサギ、コサギなどを観察できるチャンスもある。

生簀の中の弱った浮き上がる魚を狙い辛抱強く待ち受けている様子を見ることがある。

生簀に流れ着いた魚の死骸などを海面から長い首を伸ばし長い嘴で挟みまると呑み込、首が膨らむ様子も観察できる。

海の掃除屋の役割を海鳥たちは果たしているようだ。



図5-6 魚食性ミサゴは全島の海岸、入り江などに生息し水面近くを泳ぐ魚類を急降下に足で掴み捕らえる。 富永英喜 写



図5-7 ハチクマの渡り 2009.9.15



図5-8 セグロカモメ 2012.12.20



図5-9 セグロカモメ 2012.12.20



図5-10 ノシラン 2009.8.25



図5-11 スイカズラ 吸蜜にメジロが飛来 2011.5.11



図5-12 センリョウの果実



図5-13 ミミズバイの果実

一般的に海鳥とは海洋で生活する鳥、海面に浮遊したり、海上を飛びまわる個体群を海鳥と言っている。

生きた魚類だけを採食する個体群もあれば、また、屍骸などを食べる個体群、どちらも採食する個体群、およびコゲンカンドリのようにオオミズナギドリ、ミサゴなどが捕らえた魚を横取りする個体群もいる。

・近海の林内に生育するノシラン：常緑多年草で、ヤブランに類似しているが、花があると識別は容易、ヤブランの花は紫色である。また花が着いている部分が罎斗状で白色花である。

生育地は少ないが魚目半島にもみられる。名前は蘭とついているがラン科ではなくユリ科である(図5-10)。

果実が熟するとカワラヒワ、メジロ、ヒヨドリ、キジバトなどの食物となる。

真夏に咲いた真っ白い花は清楚で、一輪ざし飾りたい感情になる。

・甘い香りのスイカズラの花：常緑低木(つる性)である。初夏ころから開花し甘い香りを周辺に漂わす。

香りをたよりに生育地が容易にみつかる・吸蜜性の昆虫類も花に集まっていることがおおい。

花は漏斗形で上下に分かれ、下は筒状で花蜜がたくわえられる。

筆者が幼いころは晩春のころから初夏には黄色くなった花をつみ、漏斗の中間をちぎり吸蜜した記憶がある。甘いあまい液体だった。

秋には球形の果実が黒色に熟するとメジロ、ヒヨドリ、キジバト、ホオジロ、カワラヒワなどが飛来し採食する。

また、黄色くなった花をつみ、焼酎に着けた琥珀色をおびたものをいただいたことがある。

・ツグミ類が好む果実：若松島の神部に、このセンリョウ(図5-12)とミミズバイ(図5-13)の両種が自生する山がある。えび屋の裏山で、ここは大形ツグミ類のトラツグミ、マミジロ、クロウタドリ、アカハラ、シロハラ、ツグミなどが飛来し採食する。

枝についてる果実をとる個体群や熟して地上に落下した果実を採食するトラツグミのような個体群もいる。



## 6. 高慰斗岳



図6-1 高慰斗岳からの展望タカ類の渡り観察地



図6-2 高慰斗岳展望台下に駐車場トイレの施設がある



図6-3 吸蜜性のヒヨドリ 2009.3.25



図6-4 シジュウカラ 佐世保市で 栄喜公陽 写

### 景観：

山頂付近に構造物が目立つ、スギなど人工林が目立ち自然に常緑広葉樹はところどころに残している。樹種はツブラジイ、谷間にはスダジイおよびシロダモ、ヤブニッケイ、タブノキなどが高木層を形成している。

奈摩湾の奥湾部、奈摩集落より南下すると途中に登山口がある。

山頂付近には展望所があり360°を眺望でき東シナ海は果てしなく広がる。眼下には青方湾石油備蓄基地が折島と柏島を結ぶ異様な光景が目映る。

眺望がよく渡り鳥、特にタカ類の渡り観察には好敵地である。

自然林は図2でみる通り常緑広葉樹の二次林がところどころに残存し、そこにはタカ類のほか小鳥類の留鳥、渡り鳥も飛来する。

### 見どころ

・タカ類の渡り観察地：高慰斗岳（306m）には山頂付近に展望台がありタカ類の渡り観察に適している。観察できる種については後述。

また、駐車場やトイレの施設もあり長時間にわたり観察できるのも好都合である。

タカ科ハチクマ全長57～61cm、翼開長121～125cmでトビよりやや小形で尾羽は円尾、図鑑でタカ類の識別を見るのも楽しい。

世界で233種、日本に23種、国内で繁殖する個体群は13種であることが知られている。

・吸蜜性のヒヨドリは授粉の働き者：ヤブツバキなどの授粉を助ける。

・少ないカラ類：長崎県本土では普通に観察できるシジュウカラ、ヤマガラと出会うチャンス極めて少ない。若松島のえび屋の巣箱で繁殖。



図6-5 ヤマガラ 佐世保市で 栄喜公陽 写

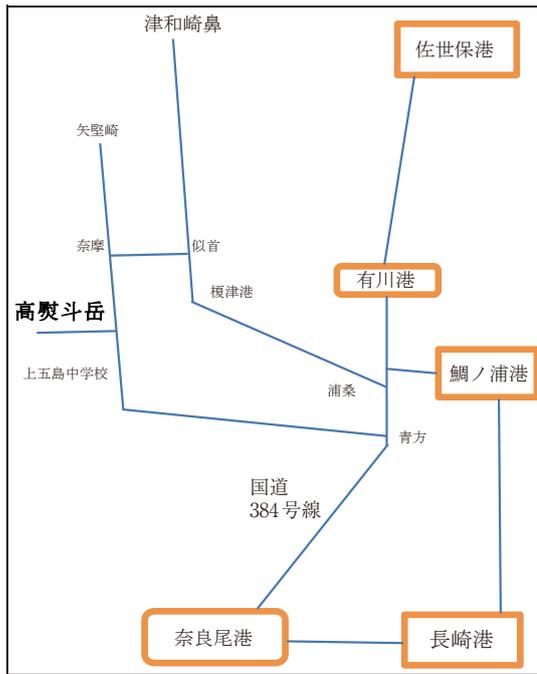


図6-6 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線で奈良尾方面へ向う、青方で右折し、奈摩方面へ。途中で登山入り口があり道なりに走行すると目的地の山がある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し青方で右折し①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線の有川方面へ走行し青方で左折し①と同じコースで走行する。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：頂上にある。
- 駐車場：頂上にある。
- 展望台：頂上付近にある。

#### 続 見どころ

・山にも飛来するイソヒヨドリ：本種は名前のとおり海岸沿いの岩場などに生息することがあるが人家集落地の建築物の屋根やいろいろな構造物上で、繁殖時期の雄鳥は美しい鳴き声でさえずり鳴きを高い位置からとどろかせている場に接することがある(図6-7)。

彼らの行動範囲は海岸の岩礁地帯から小高い山の山頂にまで達し生活行動は広い。

韓国の済州島の漢拏山(1950m)では、標高約1700mの地点でイソヒヨドリを観察し驚いた体験がある。

鳥類のなかには、ライチョウのように日本アルプスの山々で生活する個体群や低地や淡水面および海水面など海鳥やイソヒヨドリのように生活行動範囲が極めてひろい個体群もいる。

・タカ科アカハラダカの繁殖：日本では旅鳥である。佐賀県西有田町の竜門峡の林内で営巣し繁殖の可能性があったが、山道から見える場所であったため写真撮影のため撮影者が増え巣を放棄し失敗に終わった。

北国の朝鮮半島、中国、ロシアなどで繁殖している。知人シブネフ氏からロシアにおける繁殖記録を提供していただいた(図6-8)。



図6-7 イソヒヨドリ 2012.11.23 西海市で 栄喜公陽 写



図6-8 アカハラダカの育雛 ロシア シブネフ 写



図6-9 アカハラダカ巣立ち直後 韓国

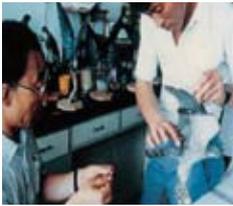


図6-10 慶星大学研究室



図6-11 アカハラダカ雛 韓国



図6-12 アカハラダカの巣の計測 慶星大学の先生 韓国



図6-13 アカハラダカの卵 韓国慶星大学 標本室

韓国の慶星大学の標本室にはタカ類の標本が多数保存されている(図6-13)。

日ソシンポジウムを東京で開催した際に筆者のためにロシアにおける研究成果の論文を数冊いただいた。

このシンポジウムの際にアカハラダカの食性について情報交換したところ、繁殖期の主食は両生類、カエルの仲間で、韓国の事例と同じ傾向であった。

また、腹部が赤いスズガエルは韓国では捕食されない、ロシアでも同じだという。

韓国における繁殖地は水田(稲田)の周辺で日本のサシバの繁殖場所に類似している。図6-9は7月末に巣立ちした直後の個体であるが、一か月後には南の国、越冬地へ向かっての長い旅が始まる(図6-9)。

日本野鳥の会長崎県支部では、1989年以来長崎県佐世保市の市街地、背後に位置する烏帽子岳の駐車場で、アカハラダカの秋の渡りを9月の1か月間、連続で観察を続けている。

1989年	:アカハラダカ:	3160	ハチクマ:	247
1990年	:アカハラダカ:	13486	ハチクマ:	145
1991年	:アカハラダカ:	15316	ハチクマ:	857
1992年	:アカハラダカ:	10668	ハチクマ:	709
1993年	:アカハラダカ:	24556	ハチクマ:	2669
1994年	:アカハラダカ:	28413	ハチクマ:	3449
1995年	:アカハラダカ:	52499	ハチクマ:	582
1996年	:アカハラダカ:	62516	ハチクマ:	531
1997年	:アカハラダカ:	32272	ハチクマ:	1650
1998年	:アカハラダカ:	16888	ハチクマ:	473
1999年	:アカハラダカ:	55100	ハチクマ:	323
2000年	:アカハラダカ:	12737	ハチクマ:	475
2001年	:アカハラダカ:	31900	ハチクマ:	878
2002年	:アカハラダカ:	28377	ハチクマ:	670
2003年	:アカハラダカ:	8298	ハチクマ:	1050
2004年	:アカハラダカ:	22727	ハチクマ:	244
2005年	:アカハラダカ:	25780	ハチクマ:	482
2006年	:アカハラダカ:	34575	ハチクマ:	861
2007年	:アカハラダカ:	26481	ハチクマ:	438
2008年	:アカハラダカ:	43233	ハチクマ:	534
2009年	:アカハラダカ:	23686	ハチクマ:	1529
2010年	:アカハラダカ:	11589	ハチクマ:	1171

年毎の平均はアカハラダカ: 26557 個体、ハチクマ: 908 個体である。

日本野鳥の会長崎県支部調査による佐世保市の烏帽子定点観察記録によると以上のような結果である。

年により通過数に大きな変動があることが明らかである。



## 7. 青方ダム・青方郷・大曾・船崎



図7-1 水辺の鳥が観察できる青方ダム冬期に飛来する



図7-2 冬鳥マガモ夫婦 鴨川誠著『長崎県の鳥』1983



図7-3 キンクロハジロ  
2012.11.3



図7-4 左に同じ、ホシハジロ

大村市池田池で 栄喜公陽 写



図7-5 日本に江戸時代に渡来し栽培、海岸近くに野生化した植物

### 景観

高巛斗岳登山口より南に青々とした青方ダムがあり水鳥カイツブリ、カルガモ、バン、カワセミ冬期にはマガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ホシハジロなど淡水カモ類が飛来するが、その羽数は多くない。

大曾は青方湾の北部に位置する入り江で背後には大曾教会が聳えている。その北に椎の木山と言われるスダジイ萌芽林が目立ち大木も生育している。

さらに北に走ると船崎集落があり五島うどんのふる里である。

### 見どころ

・淡水ガモの生息地：淡水ガモ類は日本では13種類が記録されている(図7-2)。

新上五島で容易に観察できる種類はマガモとカルガモで前種は雌鳥と雄鳥の体色が越冬時には異なるが後種は雌雄が同色である。

カルガモは長崎県内および本町でも繁殖している。したがって夏期にも生息している。

県内の各地で観察できる種類はハシビロガモ、コガモ、シマアジ、トモエガモ、オシドリ、ヨシガモ、オカヨシガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリなど。このうちシマアジは旅鳥として飛来するが飛来する個体数も少ない。

青方ダムや町内各地のダムでは、オシドリ、ヨシガモ、オカヨシガモ、オナガガモ、ヒドリガモなどを観察できる(図7-3、7-4)。

主として海水に生息する種類を海ガモという。採食行動が潜水することがおおいので「潜水ガモ」ということもある。日本に19種類が記録されている。

たとえば、アカハシハジロ、ホシハジロ、オオホシハジロ、アカハジロ、メジロガモ、ホオジロガモ、ヒメハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、コオリガモ、クロガモ、コケワタガモ、ケワタガモ、ビロードキンクロ、アラナミキンクロなど。

本町で安易に観察できる種類は、頭部と首が赤褐色、胸は黒く、体は灰色、上・下尾筒は黒色のホシハジロとキンクロハジロで青方ダムに飛来する、その数は多くない。後者の特徴は明確で識別も容易、頭部、体、上・下尾筒、尾は黒色、脇と腹部は白色が目立つ。この二種はダムに飛来し生息する。

・歴史を語るダンドク：カンナ科の多年草、日本には徳川時代に導入され栽培され、現在は稀に残る。(図7-6) 米山教会付近、青方から奈摩への道路沿いに残っている。次頁へつづく

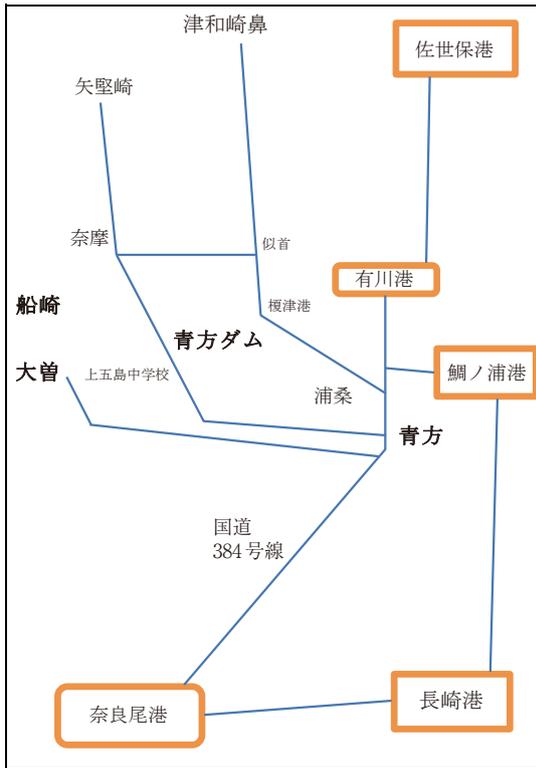


図7-6 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線で奈良尾方面へ向い、青方交差点で右折し奈摩方面へ走行すると途中に青方ダム入口がある。交差点で右折せず、100m程進み右折し道なりに走行すると目的地である。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線で有川方面へ走行し青方で左折し道なりに走行すると、大曾・船崎がある。左折せず、100m程進み交差点を左折し道なりに進むと青方ダム入口がある。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：青方・大曾にある。
- 駐車場：青方・大曾・船崎にある。
- 宿泊：ホテル・民宿・旅館あり。
- 町役場：新上五島町役場 ☎53-1111
- 病院：上五島病院 ☎52-3000

#### 続 見どころ

- ・ **ダンドク**：この植物は花の観賞のためでなく、広く大きい葉を食べ物を包むために、また、料理をのせるための皿の役目に使用された。  
新上五島町では、教会およびその付近に現存する歴史的な植物は、ただ偶然だろうか(図7-5)。

- ・ **青方神社の社叢**：山道付近から社殿の背後にかけて鬱蒼とした景観を呈している。  
社叢を形成している目立つ主な樹種は、クスノキ、ホルトノキ、オガタマノキ、タブノキ、スダジイ、ヤマモモ、イスノキ、ヤブツバキ、カクレミノなどが群落の構成種である。

保護されているため生育状況も良好で、終日野鳥の観察記録を続けると、学術的にも得るものがあるだろう(図7-7)。

- ・ **大曾のウバメガシ**：ブナ科の常緑高木で約10mに達する。小形の檜類である。天然記念物に指定され保護されている。本町には野生の群落はない。和歌山県からの移植か？



図7-7 陸鳥が生息する照葉樹林 2012.7.5 青方神社



図7-8 大曾のウバメガシ大木 2008.6.7



図7-9 青方の三本スギ大木 2008.7.30 青方

・青方の三本スギ：日本のスギは本邦特産種で各地に自生している。また有用植物として植林もされている（図7-9）。

日本の自生樹木のなかでは最も大きく、しかも長寿で鹿児島県屋久島には樹齢3000年を超える個体が知られ有名である。

青方の三本スギも町内では大きく聳えて力強く生育している様子がうかがえる。

この三本スギは大切に保護保全し数千年の歴史をきざんでもらいたい。このような大木、巨木は私どもに強い力を授けてくれる。



図7-10 カイツブリ 2012.11.3 大村市池田池で  
栄喜広陽 写

・船崎のエノキ大木：うどんのふる里、船崎集落に古井戸がある。その井戸の神木だったのか大木があり、ツルマサキやキツタがエノキの大木に絡みついでいて集落の歴史を見てきている。永遠に保全すべきである。

水道が設置されるまでは活用された水源であったものと推測される。



図7-11 前列2羽はオオバン 中央はホシハジロ  
池田池

・青方漁港のカモメ飛来地：漁業組合の建物の全面や堤防上に休息にカモメ類が飛来する。

・青方ダムの水鳥：前述したが町内で最も観察に行きやすい場所である。周年観察できる種類は、淡水面に浮くのはカイツブリ、カルガモで、目的の鳥も遠く、倍率の高い双眼鏡や望遠鏡が必要だ（図7-10、7-11）。

冬期には青方ダムには、カモ類が少数生息する。オオバン、バンが淡水面に泳ぐ。

上空ではミサゴ、汀線にはアオサギ、ダイサギ、コサギが生息することがある。

・西九州の早春の花：五島列島や県本土域に多くみられる。この花が咲くころ鹿児島県出水平野で越冬したマナヅルが帰る。

早春の花はクスノキ科のアオモジである。



図7-12 早春に開花するアオモジ 花期：2～4月



## 8. 榎津・浦桑・七日・矢倉岳



図8-1 矢倉岳展望台でタカ類の渡りを観察 埼玉県と長崎県支部会員による観察 2005.9.21～24 旧有川町



図8-2 ヒヨドリはヤブツバキの花の吸蜜、花粉の媒介し受粉を助ける



図8-3 メジロ採食活動 栄喜広陽 写



図8-4 カラスバトの移動 2007.5.4 若松島で

### 景観

矢倉岳（384m）は中通島の最高峰である三王山の北東側に位置している。

東方に丹那山系の連山が南北につらなり、西方は猪ノ浦、飯ノ瀬戸の千間岳（259m）から東方へ連なる小高い山々が眺望できる。

タカの渡りには良い位置である（図8-1）。しかし極めて残念なことに北東方向に位置する丹那山系に風力発電施設ができ、タカ的一种ハチクマは、この施設を回避するようになった。

この施設ができる以前には一日に約4千個体のハチクマが矢倉岳周辺を通過した事例がある。それは見事な光景であつた。

北西方は魚目半島および野崎島、遠くは平戸島、近くは中通島の番岳、高熨斗岳、眼下に有川港、蛤浜、榎津港、鯛ノ浦の沖合いなどが見える。つまり360°を十分に眺望できる。

### 見どころ

・渡り鳥の観察地：矢倉岳（図8-1）には展望台もあり360°を眺望できる。

2002年09月22日、曇天、北の風、風力3～4調査開始：11時20分から15時00分その間、1131個体が通過し出現回数は66回、ハチクマを確認した。

翌日、09月23日、6時45分から15時59分までの間に2697個体、93回出現し上空を通過した。

近年は矢倉岳（384m）の北東方向に風力発電施設が乱立してからハチクマの通過地点に大きな変化があり、通過する個体数が著しく減少したという。

アカハラダカやハイタカ、オオタカなどハイタカ属のタカ類だけでなく、ハリオアマツバメも羽音を残し渡る姿は圧巻である。

・留鳥メジロの囀り：矢倉岳の展望台で静かにしていると、山麓・谷間から小鳥の鳴き声が吹き上げられてくる（図8-3）。

メジロ、ヒヨドリ、カラス類などの声、早春から初夏にはウグイス、カラスバト、イソヒヨドリ、カワラヒワなどの鳴き声が響いてくる。

カラスバトは図8-4のように樹幹の上空を飛翔行動は少なく、なかなか観察できない。

つまり、長距離を飛翔する機会は極めて少ない。臆病で警戒心が極めて強く、ハヤブサからの襲撃を避けての行動であろう。

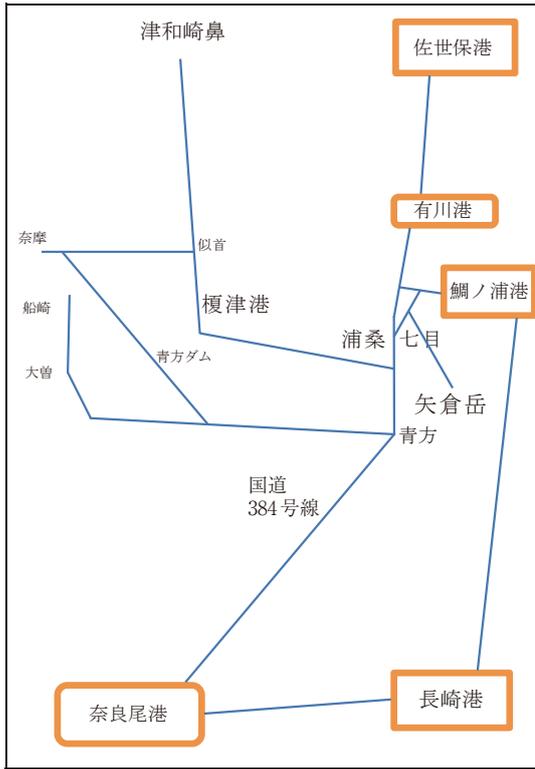


図8-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

① 有川港から国道384号線で奈良尾方面へ向い、七目トンネルを過ぎると七目・浦桑があり、浦桑を右折し道なりに走行すると榎津がある。

七目トンネル前の三差路を左折し、箒山三差路を右折。100m程走行すると矢倉岳入口がある。

② 鯛ノ浦港から有川方面国道384号線へ走行し箒山三差路を左折し、100m程走行すると矢倉岳入口がある。七目・浦桑は箒山三差路を左折せず、直進し①と同じコースで走行する。

③ 奈良尾港から国道384号線で有川方面へ走行し浦桑で左折すると榎津がある。浦桑で左折せず、浦浜トンネルを抜けると七目がある。さらに七目トンネルを抜け、三差路を右折し箒山三差路を右折、100m程走行すると矢倉岳入口がある。

#### レンタカー 市外局番：0959

有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042

奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364

トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100

トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200

シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

トイレ：榎津・浦桑・七目・頂上にある。

駐車場：榎津・浦桑・七目・頂上にある。

宿泊：ホテル・旅館あり。

#### 続見どころ

・留鳥ホオジロ：スズメ目ホオジロ科ホオジロ属、個体数は少ないが各地の開けた場所に生息する(図8-6)。

・留鳥シジュウカラ：県本土には普通だが、島には少ない。巣箱によく営巣し保護保全できる。



図8-6 さえずり鳴きするホオジロ 栄喜公陽 写



図8-7 採食活動中のシジュウカラ 栄喜公陽 写



図8-8 採食活動中のシジュウカラ 栄喜公陽 写



## 9. 有川・蛤浜・小河原



図9-1 佐世保港と結ぶ有川港 新上五島の玄関口



図9-2 蛤海岸（砂浜） 2006.7.29 有川



図9-3 蛤海岸にはハマユウほか海浜植物が群生している



図9-4 海童神社の森



図9-5 鯨見山 海童神社鳥居付近より望む

### 景観

佐世保港などからの玄関口である有川港は有川湾の奥湾部に位置する。客船の発着地の背後地に小高い山があり海童神社の山門が東側にあり鯨の肋骨を2本山門として立ててある。

小高い山の林縁には亜熱帯系のアコウが茂って特徴ある景観をあらわし温かい雰囲気を出している。

さらに東に鯨見山が目立つ、珍鳥ヤイロチョウなど渡り鳥の中継地としての役割を担っている。

有川湾の奥湾部に入江があり遠浅の砂浜が広がり美しい白砂青松の海岸線の風景に癒される（図9-2、9-3）。

有川集落から東方の頭ヶ島方向に走る道中小河原集落があり、その海岸は礫海岸である。打ち寄せる波の音が旅人の心を癒してくれる。

### 見どころ

・鯨見山・海童神社の森：有川港で下船すると待合所の正面玄関前に塞がっている小高い山が海童神社の森である。（図9-4）

林縁には亜熱帯系のアコウが茂っているのが目に止まる。海浜植物のハマビワ、トベラ、シャリンバイ、ハマヒサカキなどのほか、本町の各地に普通にみられるヤブツバキ、ツブラジイなどが茂っている。

高木層の枝にはトビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、メジロ、天念記念物のカラスバトの鳴き声が「ウウーウウ」と響く、奥山では気味悪くなる人もいた。声の主はカラスバトだと知るまでは、化け物だ、そのように考える人もいた。

神社の入口に、鳥居と並列しナガスクジラのおごの骨を使った鳥居として建ててあり珍しく一見する価値がある。

海童神社入り口の付近からの眺めが図9-5の鯨見山である。近年人為的にツバキなどの栽培により本来の植生は破壊されている。

有川湾の奥湾部に位置する小高いこの山は東西の渡り型の個体群の通過地点になっているようだ。

ヤイロチョウの鳴き声を3月8日の16時30分に、この山で確認した記録がある。

この記録は長崎県内での渡りで最も早い時期である。

翌日の早朝に佐世保市石岳で鳴き声を確認した野鳥の会会員がいる。無線で連絡をとり確認できた。夜間に五島列島を飛び立ち夜間に海を越えたり着いたのであろう。2013年5月20日午前1時25分に鳴きあいながら移動した。

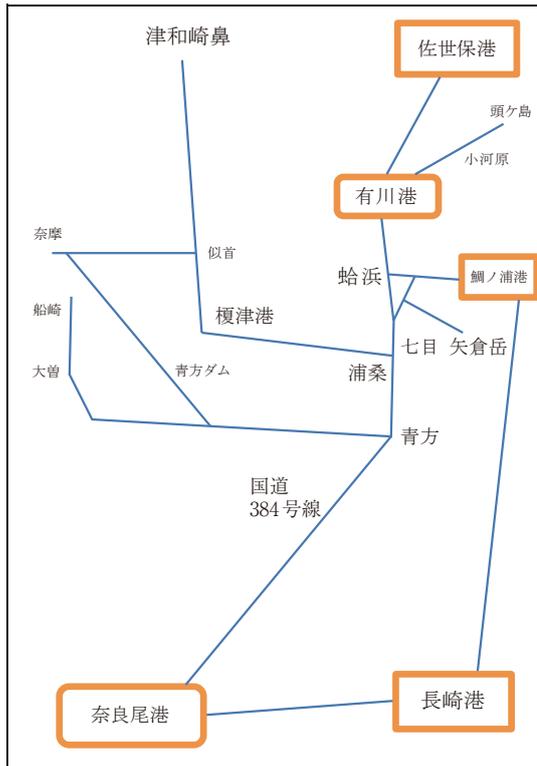


図9-6 コースガイド

## インフォメーション

### 交通

- ① 有川港から国道384号線で奈良尾方面へ向い、七目トンネルの手前で右折すると蛤浜の白砂青松・海原が広がる。小河原は県道62号線で頭ヶ島方面へ行く途中にある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で右折し道なりに走行し①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線で有川方面へ走行、七目トンネル通過後にクロマツ林が左手に見えるので左折すると駐車場があり、蛤浜の白砂青松・海原が広がる。

### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042  
 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364  
 トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100  
 トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200  
 シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

### 施設

- トイレ：有川、蛤浜、小河原にある。  
 駐車場：有川、蛤浜、小河原にある。  
 宿泊：ホテル・旅館・民宿あり

### 続 見どころ

・ヤイロチョウのつづき：新上五島町の若松島で真夜中に鳴きながら移動している記録をしたハヤブサなど猛禽類の襲撃を回避するために夜間に長距離を移動しているものと推測した。

・迷鳥のコゲンカンドリ：世界で5種、日本では2種、オオゲンカンドリとコゲンカンドリであり長崎県で確認されている種は後種である。

全長79cm、翼開長180cmで前種より小形である。極めてまれに飛来することがある。たとえば、平戸市の南部西海域、新上五島の有川湾に飛来した。

・海岸岩場や建物の屋上で囀るイソヒヨドリ：イソヒヨドリ全長23cmで、ヒヨドリよりやや小形雌雄で体の羽毛の色彩に差異があり、別種のような感じである(図9-8)。

雄鳥の頭から首、背、腰は濃い青色で、胸から腹部、下尾筒には赤褐色で目立つ。囀り行動による求愛であるため、高い位置で大きな声で「ホイピーチョイチョイ、ツツピーコー」などと遠くまで響き、波の音に劣らぬ特徴のある美しい鳴き声である。



図9-7 珍しいイイギリの果実 2005.12.27  
野鳥が好んで採食



図9-8 イソヒヨドリ 2012.11.23 西海市で  
栄喜公陽 写



図9-9 採食中のウミネコ 大村の鈴田川河口で



図9-10 ツル類の渡り 有川 矢倉岳上空 江浜幸一 写



図9-11 マナヅルの北帰行、平戸市大島の風力発電所を回避している行動 読売新聞ヘリより 2010.2.17

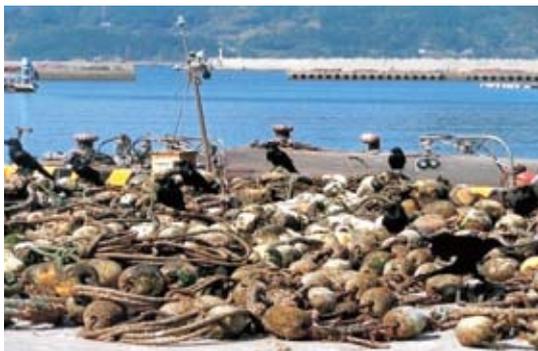


図9-12 有川港の漁網に集合したカラス類 2013.3.11

食性は、岸に生息する小動物、昆虫類および植物の果実を採食する。

たとえば、モクダチバナの果実、果肉を食べ種子は吐き出す。海岸に生育するテリハノイバラ、ノイバラ、トベラ、モッコク、マサキ、ツルウメモドキ、アキグミ、クコなどの果実を好んで採食し種子は吐き出す行動を観察できる。

繁殖地は海岸の岩場だけでなく近年は市街地の建物でも繁殖している。

繁殖行動の段階から注意深く観察すると、興味深い行動が明らかになる。甲高い大きな声の個体が雌鳥に選ばれるようだ。つまり、雄鳥は雌鳥に選ばれる立場になっている。

鳥類の求愛行動をさぐってみると大きく三つの型に分類できる。

① 囀り鳴きによる求愛行動：囀り鳴き行動がみられるイソヒヨドリ（図9-8）、オオルリ（図18-3）など。

② ダンスによる求愛行動：日本で越冬したマナヅル、ナベヅルは早春には雄鳥が求愛のダンスを雌鳥に向かって行う。人が見ても美しい動作だ。

③ 食物プレゼントによる求愛行動：身近な環境に生息しているカワラヒワ、モズ、キジバト、カラスバトなどの雄鳥にみられる行動である。食べ物を雌鳥に与える行動である。

・港で休息・採食するウミネコ：本町は島の周囲は海に囲まれ港、漁業活動の中心となる漁港がおおい（図9-12）。

たとえば、津和崎漁港、一本松漁港、立串漁港、小串漁港、似首漁港、丸尾漁港、有川港、奈摩漁港、青方港、太田漁港、岩瀬浦漁港、奈良尾港、佐尾漁港、若松港、神部漁港、日ノ島漁港土井ノ浦漁港などあり、漁があると漁船について港までウミネコやセグロカモメは追跡し魚のおこぼれを期待してか飛来する。トビ、カラス類も類似した行動をする。

したがって、漁港は海鳥・カモメ類の良さ観察地である。

・ツルの渡り：長崎県・佐賀県内は、鹿児島県出水市へ越冬に飛来するナベヅル個体群やマナヅル個体群が通過する。その際、気象条件の急変および家族の一個体に体調不良が発生した時には渡りルート下に一時降下し休息することがある。新上五島も、そんな地点であり、有川地区に飛来し降下することがある。風力発電所は飛翔を介した（図9-11）。



図9-13. カプト岩 2011.10.6 有川



図9-14 有川・佐世保港間の航路 フェリーなみじ甲板 2011.9.16



図9-15 朝霧に飛翔するカラスバト 2006.6.1



図9-16 マナヅルの越冬 1996.11.11 有川蛤浜 江浜幸一 写

・有川浜の兜岩：剣尾類の節足動物の総称で兜蟹、カプトガニ目は生きた化石として有名で、長崎県の各地、五島列島の近くでは、西彼杵半島、平戸市、佐世保市などの海域で繁殖し生息している。中生代に栄えたせいぶつである（図9-13）。

中通島では、蛤浜で死体を観察したことがある。

生息を確認できたらその生息地は保護保全すべきである。

世界に4種が生息している。日本では瀬戸内海、九州北西の浅海底に生息するが、岡山県笠岡市の生江浜は、この繁殖地として天然記念物に指定されている。

俗称「どんがめ・うしどうがめ」ともいう。

・船上からのサンセット体験：初秋に有川港かフェリーの甲板で鳥類センサスを続けていると図9-14の素晴らしいサンセットに出会うことがある。西方への金・銀のかけ橋が出現する。

航行する船上に「ウスバキトンボ」が無賃乗船していることもある。そんな出会いやトビウオが海面上空を飛翔する行動を観察できることもある。

・早起鳥のカラスバト：筆者は旅先での早起が楽しみの一つである。その訳は、野鳥より先に目覚めて、彼らの早起の順番を知ることにある。

一番鳥はハシブトガラスか、またはハシボソガラスで、彼らは早起で飛びながら大声で鳴き騒いでまわる行動がみられる。つまり鳴き散らす行動である。

カラスバトは無人島に生息することがおおいが、新上五島では集落の人家周辺にも生息し共存しているのが特色がある。

ところが、鳴き声を発する順番は遅く、とばりが明けてからである（図9-15）。

・瑞鳥マナヅルの飛来地：日本に飛来するツル類はツル目ツル科は①ソデグロヅル（全長135cm）、②カナダヅル（全長95cm）、③マナヅル（127cm）、④タンチョウ（145cm）、⑤クロヅル（115cm）、⑥ナベヅル（100cm）、⑦アネハヅル（95cm）など7種であり、タンチョウだけが北海道で繁殖し他の個体群は冬鳥である。

鹿児島県出水平野に飛来し越冬する個体群は、ナベヅルとマナヅル（図9-16および17）である。他の個体群は1～数個体が越冬に飛来する（図12-8）。



図9-17 マナヅル渡り 一時休息地 上有川 江浜幸一 写



図9-18 ハイタカの保護 2011.12.28 有川 江浜幸一 写



図9-19 海鳥たちの休息地 2012.12.22 有川



図9-20 ウミウ死体 2007.2.25 有川の蛤浜

新上五島に、移動の道中に立ち寄る個体群は、マナヅルとナベヅルである。

旧有川町の農耕地および遠浅の蛤海岸（図9-2、9-3、9-16、9-17）などに飛来することがある。

気象状況の急変や移動中の集団に身体的な障害が発生したときには、集団全体が下りる。

これまでの事例では有川のヘリポート、飛行場などに緊急着陸した（図9-17）。

渡りの上空通過は、中通島、若松島などで確認している。

若松島の石司では、マナヅル1個体に飛来を確認している。

・ 八年ぶりに戻ってきた鷹：タカ目タカ科ハイタカ属ハイタカが、スズメを追跡中にガラス窓に激突し頭部打撲で保護された。

江浜幸一さんが健全になるまで自宅で保護し部屋内を飛べるまで回復した。

自宅から離れた高崎ダム周辺で8年前に放鳥した（図9-18）。

その個体が江浜さん自宅に8年ぶりに飛来し部屋に入ってきた（図9-18）。珍しい出来事であった。

・ 海鳥の休息地：有川港のフェリー発着所の東側の漁協組合の建物を通り越した位置に兜岩があり、さらに通り越した海岸（図9-19）である。

この二つの瀬にはカモメ類が休息する。種類はウミネコ、セグロカモメ、オオセグロカモメなどが主である。

・ ウミウの斃死漂着：カツオドリ目ウ科ウ属にはヒメウ、カワウ、ウミウなど3種長崎県を確認できるが、ヒメウは北海道、本州北部の日本海におおく、県内には冬鳥として数個体が越冬する（図9-20）。

県内にカワウは群て冬鳥として生息するが、佐世保では繁殖した事例がある。



図9-21 カラスバト 2005.5.11



図9-22 小鳥が好むホウロクイチゴの果実 2003.6.9 有川



図9-23 テリハノイバラ 2008.6.5

ウミウは主に外洋に生息し岩礁で休息する。後述のウノクソ瀬（図21-11, 21-15）は、ウミウの休息地であり、周年生息している。

この地域で繁殖の可能性はある。図9-19の死因は明らかにできなかった。

・この地域にもカラスバト：1～25の地域すべてに生息する。しかし、長距離を飛んでまわることはまれで、出会うことは少ないが、鳴き声は各地で確認できる。

植物の果実を好んで採食する。したがって、実をつける植物の周辺で待つと姿を確認できる可能性がある（図9-21）。

・海沿いに分布するホウロクイチゴ：バラ科キイチゴ属ホウロクイチゴは海岸近くに生える。

キイチゴ属にはモミジイチゴ、クマイイチゴ、カジイチゴ、フユイチゴ、クサイイチゴ、ナワシロイチゴなどの果実はカラスバトの採食の対象となる。

ホウロクイチゴ、モミジイトゴカジイチゴ、フユイチゴ、ナワシロイチゴの果実などは人も生食することができる（図9-22）。

メジロ、ヒヨドリ、キジ類、カワラヒワなども採食する。

・海岸の砂礫地に這うテリハノイバラ：バラ科バラ属ノイバラ、モリイバラなども同じ仲間、テリハノイバラは日当たりのよい海岸、その近くに生える（図9-23）。

花期は6～7月で、秋には赤い果実が実りキジバト、カワラヒワ、ツグミ類、ヒヨドリ、メジロなどの採食行動をみることがある。

新上五島町内の海岸にも生え、花にはこちよい芳香がある。



## 10. 赤尾・友住・江ノ浜・頭ヶ島

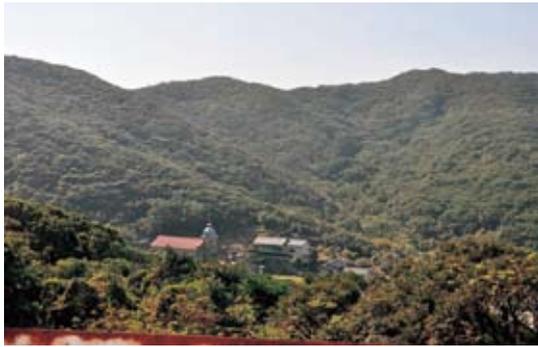


図10-1 頭ヶ島天主堂付近のマテバシイ群落  
平戸島や北松浦半島の植生に類似している。



図10-2 坂本龍馬像より頭ヶ島を望む ツル渡り時に  
天候急変時に上五島空港跡地に避難着陸することが  
ある。



図10-3 絶滅危惧種チュウサギとアマサギ (小型)  
2012.5.4 赤尾



図10-4 椎の神様  
江ノ浜



図10-5 ヒガンバナ  
2011.9.27 友住

### 景観

向山(266m)の北側に赤尾集落が広がり北西向きの入江が赤尾漁港で冬鳥のカモメ類が越冬に飛来する。

自然林は常緑広葉樹のシイ萌芽林および江ノ浜集落には、椎ノ神様と呼ばれているスタジイの大木が茂り原生林であろう神社の森として保護されてきた。

赤尾の集落にはスタジイの防風林および防潮林があり目立つ景観である。

友住、頭ヶ島はマテバシイ萌芽林で、他の地域とことなる(図10-1)。

さらに頭ヶ島では、あくち山があり他の山と異なる森がある。

「あくち」とは、モクタチバナの俗名で、頭ヶ島におおく生育している。

江ノ浜郷は、丹那山系(341m)の東方で向山と西宇戸、藤嶽(329m)に囲まれた谷間である。

丹那山の中腹に源流があり「雌滝」となり、集落の左岸を流れている。

また、左岸には前述した「椎の神様」と言われているスタジイ類の大木が鬱蒼と茂っている。

さらに、右岸には集落が散在し集落の右辺にトーノシロ古墳群があり、オガタマノキ、ホルトノキ、イスノキ、タブノキなどの大木が、古墳群の石碑を被っている。分布状況を計測した結果、ある目的のもと人為的に植栽されたものであろうと推測した。

江ノ浜集落の周辺には「カラスバト」が頻繁に出現する。鳴き声を聞くチャンスもある。

### 見どころ

・マテバシイの森：頭ヶ島および友住集落周辺に限って、マテバシイ萌芽林がみられる。

常緑高木、約15mでスタジイより小形、葉は楕円形長さ約20cm、厚く革質で調理用に用いることがある。

どんぐりは堅果で堅いが煮ると割れ目が生じ其処からわると容易である。

公園、庭木とし植えられるが、ここでは自然林である。

堅果はキュウシュウキジが採食するが丸呑みである。

・椎の神様の森：前述の通り江ノ浜にあり水神宮、山の神を祀り森も保護されている(図10-4)。

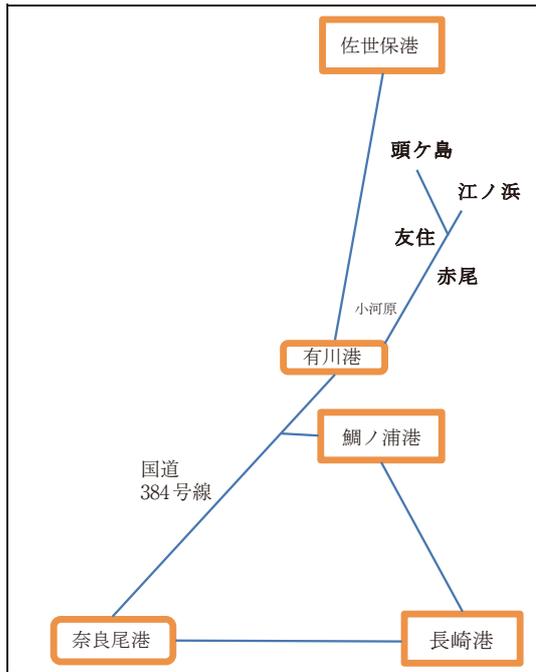


図10-6 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から県道62号線で頭ヶ島方面へ向い、小河原を通過し道なりに走行すると赤尾、友住、頭ヶ島、友住で右折すると江ノ浜である。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で右折し、道なりに走行し①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線で有川方面へ走行し①と同じコースで走行する。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：頭ヶ島、江ノ浜にある。
- 駐車場：頭ヶ島、江ノ浜にある。
- 宿泊：民宿あり。

#### 続 見どころ

- ・赤尾漁港：ウミネコ、セグロカモメ、シロカモメ、オオセグロカモメなど。防波堤などに休息に飛来する。近くで観察できる楽しい場所だ。
- ・モクタチバナ群落：四国、九州、小笠原などに分布するが、少なく長崎県本土での生育地は筆者は知らない。新上五島では若松島の西岸と頭ヶ島に分布域が目立つ。渡り鳥が種子分散に関与しているからである。また、頭ヶ島の田尻に「あくち山」がある。あくちとは本種の俗名である。屋久島にシマアクチという植物があるがこの地域の人と関係があったのではなかろうか。



図10-7 キンチク 2011.2.28 頭ヶ島



図10-8 オガタマノキ巨木



図10-9 シキミ栽培 江ノ浜 2012.3.6



図10-10 椎の神様に育つスダシイ大木 江ノ浜



図 10-11 ライオン島 (源五郎島)



図 10-12 ハマゴウなど海浜植物



図 10-13 海浜植物ハマゴウ、ハマボスなど



図 10-14 ハマダイコン  
2008.6.5



図 10-16 ハマナデシコ



図 10-15 海浜植物  
ハマナデシコ



図 10-17 ハマアカザ

・上五島空港は渡り鳥の休息地：頭ヶ島 (図 10-2) にある空港は本町の東方に位置し渡り鳥の休息地となっている。

鹿児島県出水平野で毎年越冬するマナヅル、ナベヅルが気象状況の急変や渡る群れの中で個体の体調に異常が発生したときなど一時の休息地となる。また、有川のヘリポートにナベヅルは休息した事例もある。

珍鳥ではムクドリ科のカラムクドリ2個体が旅鳥として飛来した記録もある。注意深く観察する場所である。

・ライオン島 (源五郎島)：雄ライオンが座っている恰好に見えることからこの名がついた。

環境庁発行の都道府県別メッシュマップ 42 長崎県 43 頁によると源五郎島 (36m) としてある。

ライオンのたてがみに相当する毛 (植生) はクロマツ、シイ類、ヤマモモ、クロキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキなど。中腹部にはクロキ、ヤブツバキ、ツブラジイ、カラスザンショウ、マサキ、トベラ、ハマヒサカキ、ハマビワなど。岩が露出して最下線にはハマヒサカキ、トベラ、マルバハギなどや草本植物が潮風と乾燥に耐えて生育している (図 10-11)。

・砂礫地を敷き詰めるハマゴウ：各地の海岸砂礫地に生育し砂礫を被う低木つる性の植物、クマツヅラ科ハマゴウは別名ハマハイとも言われているほど、海岸の砂地に這う。

7～9月に枝先に円錐花序をだし、紫色の可憐な花をつける。

果実は球形で淡黒色に熟しカワラヒワが採食する。

葉は薬用に、線香、灰汁は染料になることが知られている。香気が強い特徴ある植物であり一度出会うと忘れられない印象の強い植物である。

・海岸を飾る植物：この地域の海岸線は護岸工事のためコンクリートで固められ自然海岸は岩浜海岸で、イワタイゲキが自生、アゼトウナ、シマカンギク、ツワブキなどの黄色い花が咲き、ハマナデシコ、ハマナタマメ、ハマボスの白い花、淡紅色のハマヒルガオ、淡紅紫色の花などが自生する (図 10-12～17)。

ハマの名前のつく種類があるが少ない。



図10-18 姿のブッポウソウ 2012.5.4 赤尾郷  
新上五島町の各地で観察できる。



図10-19 ハシボソガラス 2012.11.4 佐世保市で  
栄喜公陽 写



図10-20 ハシボソガラス桜の果実採食 2005.5.23



図10-21 ロウバイに吸蜜に飛来したヒヨドリ  
2011.1.21

・江ノ浜のオガタマノキ大木：モクレン科オガタマノキ属オガタマノキは神社仏閣に植栽される。名前の由来は招霊が転訛したものと言われている（図10-8）。

江ノ浜のトーシロ古墳群の一角に堂々と聳えている。2～4月、芳香のある白い花を開き花が散ったら路面は白い絨毯を敷き詰めた様相になる。集合果は秋に熟し分果は卵形ないし球形で、中には赤い種子があり振ると鳴る。

・姿のブッポウソウ：中通島および若松島など赤尾地区、道士井、佐野原、太田と江ノ浜間の林道および若松島の神部など各地で移動中の本種を確認した（図10-18）。

ブッポウソウは、彼らの行動を観察していると新上五島の西岸にたどり着き、東へ東海岸方向へと移動している。移動は単独行動の観察事例がおおい。

移動の際は電線や枯れ木の頂きやすギ、ヒノキの梢に止まり目立つ。飛び立って獲物を捕らえ、再び元の位置に戻る行動が見られる。

・本町内にカラス類は2種：嘴が太くて上くちばしが湾曲しているのが、ハシボソガラスで、細くとがっているのがハシボソガラス（図10-19）。

秋季に集団で渡って来るのはミヤマガラスであり、旅ガラスで、冬期の全期間滞在することはほとんどない。

まれに、ミヤマガラスの群れに交じって、コクマルガラスが飛来する。いずれも、北国からの飛来であるが、本種は極めて少ない。

・吸蜜性の鳥が好むロウバイの花：落葉低木、ロウバイ科、中国原産で江戸時代に渡来し、庭木に植栽される。

吸蜜性の鳥類にとっては、花が少ない時期に開花しヒヨドリ、メジロが吸蜜に訪れる。

吸蜜性の鳥類にとっては、花が少ない時期に葉が出る前に開花し香りも強い。

黄色の花を開き目立つ。花は下向きに咲くので吸蜜は、花にぶらさがる恰好で吸蜜していることがある。

この木は吸蜜性のメジロ、ヒヨドリだけでなく人にも好まれる庭木である。

メジロの保護、保全のため、人の癒し効果のためにも庭木としての植栽を奨励したい樹木である。



## 11. 一二三滝・太田・蝙蝠鼻



図 11-1 蝙蝠鼻海食台 2006.1.10



図 11-2 太田タブノキ大木 2006.1.9



図 11-3 ヤブツバキ 江ノ浜 2012.3.6



図 11-4 ヤブツバキ落花 2012.3.6 江ノ浜

### 景 観

丹那山(341m)が南北に連なり、その谷合を源流に一二三滝は西側に流出している。

南東方向に太田郷の集落が細く長く開けている。南東向きの河岸沿いの林道を行くと蝙蝠鼻の海食台につきあたる(図 11-1)。

海食台のすぐきわまでトベラ、シャリンバイ、ハマビワ、ハマヒサカキ、ヒサカキ、ヤブツバキ、ツブラジイなど常緑広葉樹が露岩まで迫って生育している。

海食台にはタイドプルがあり海岸動物や海藻を観察することができる。

江ノ浜から太田集落に通じる林道は、細く曲がりくねった林道であるが、自然観察、バードウォッチングには楽しいコースである。

東西型の渡り鳥にとっては出入り口となるから確認できる渡り鳥の珍鳥はヨーロッパビンズイが太田の墓地で出現した。

・太田の大タブ：タブノキの巨木が生育しているが、その大きさは新上五島では最大級の巨木である。傍に立つだけで精霊を感じる(図 11-2)。

巨木を眺めていると私たちに生命の力を与えてくれる。樹皮の凹凸、樹洞などを見ていると長い間の風雪に堪えてきた歴史を語ってくれているように感じる。

筆者は巨木を観察するのが好きである。それは前述したごとく生命力を間接的にいただくからである。

・ヤブツバキの花の絨毯：常緑高木で、10～12mの樹高、シイ萌芽林やタブノキ萌芽林では亜高木層の主要な構成種である。

ツバキ科は世界に約30属、500種が知られ、本州、四国、九州、沖縄に分布する。

花期は12月ごろから開花をはじめ3月まで開花する(図 11-3、11-4)。

花蜜の吸蜜にメジロ、ヒヨドリが訪れ、くちばしを花の奥まで差し入れ吸蜜するが、そのときに頭部や胸部に花粉が羽毛に付着し黄色くなる。

次の花に吸蜜に行った鳥はその花粉を他の花のめしべの柱頭に花粉が付着し授粉という現象がおこる。つまり、メジロ、ヒヨドリは鳥媒花の授粉に役だっている。

ヒヨドリの越冬個体数が少ない年はツバキの結実が悪いことが知られている。

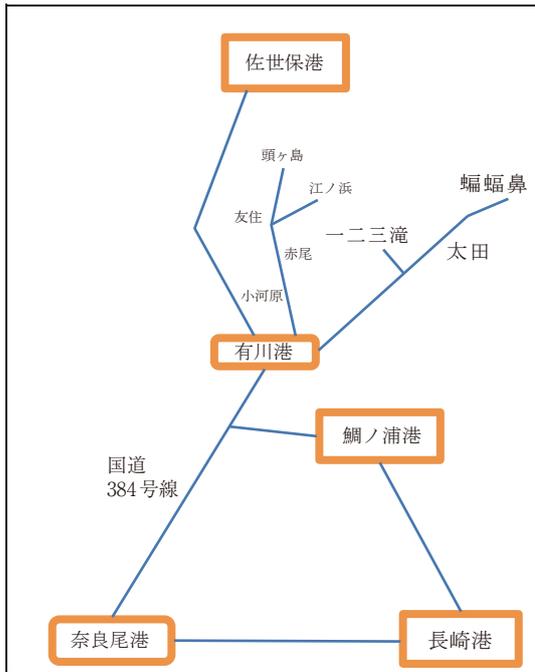


図 11-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から県道 187 号線で太田方面へ向う途中、左折すると一二三滝がある。太田を通過し海岸沿いに走ると行きどまりとなり蝙蝠鼻がある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道 384 号線で右折し道なりに走行し ① と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道 384 号線の有川方面へ走行し ① と同じコースで走行する。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：一二三滝にある。
- 駐車場：一二三滝にある。
- 宿泊：なし

#### 続 見どころ

・太田林道はバードウォッチングに最適：江ノ浜から太田へつながる太田林道を通るとカラスバト (図 11-7)、メジロ、ヒヨドリ、シジュウカラ、ヤマガラ (図 11-10)、カワラヒワ、キュウシュウキジおよび、キジバト、高次消費者モズ (図 11-8) などの留鳥や渡り鳥は、旅鳥のノビタキ、トラツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ブッポウソウ (図 11-9)、リュウキュウサンショウクイなどの鳴き声を聞くことができる。

路面には落石などもあり、注意深く走ることが必要だが、通過する自動車はまれに通過するほどで、バードウォッチングには静かで最適な場所である。

また、東西に渡る各個体群の最終地であり、悪い気象条件が続いた時には、春の渡り時期は、天気が回復まで留まる地帯である。

・全島に生息するカラスバト：ハト目ハト科カラスバト属に属するハトは、新上五島には本種だけである (図 11-7)。

雌雄鳥が同色で全身が真っ黒に見えるが光線のあたり方によっては、美しい青みを帯びた金属光沢があり極めて美しく見える。普段は日陰の薄暗い場所に生息するので全身が真っ黒に見えるのだ。

近年やっと、雌鳥、雄鳥の違いを発見した。



図 11-6 ヤブツバキの種子 2005.10.14

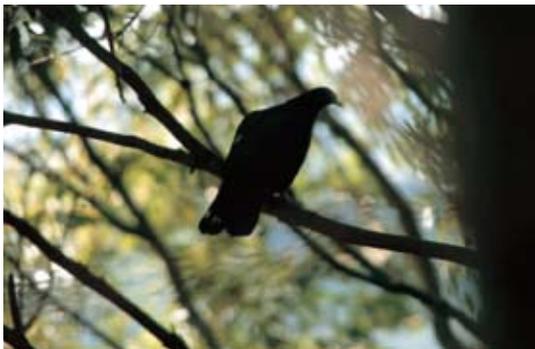


図 11-7 カラスバト♀個体



図 11-8 農耕地などでの食物連鎖の上位種モズ  
栄喜公陽 写



図 11-9 ブッポウソウ 移動中 一休み  
栄喜公陽 写



図 11-10 ヤマガラ 2012.5. 佐世保市で  
栄喜広陽 写



図 11-11 野生イノシシ 若松島 三年ヶ浦

雌鳥の成鳥は、雄鳥より体が少し大きく、しかも、尾羽の中央に割れ目(凹部)がある(図11-7)。

番いの求愛行動・交尾行動まで一連の行動を複数番いの行動を観察し明らかになった。

番いの個体が鳴き交わす「鳴き声」にも相違があるが、さらに調査研究の積み重ねが必要で確立していない。

・農耕地での高次消費者：スズメ目モズ科モズ属のモズは留鳥で、農耕地・宅地周辺での高次消費者である(図11-8)。

メジロ、スズメ、カワラヒワ、ホオジロなどの小鳥を捕らえ食物とする三次か四次消費者である。両生類のカエル類やイモリ、爬虫類のヤモリ類トカゲ類、環形動物のミズ類、節足動物の昆虫類なども捕食する。

近年、個体数が減少傾向にある。農耕地周辺の生態系の破壊が進行しているのだろうか。

・電線によく止まるブッポウソウ：ブッポウソウ目ブッポウソウ科ブッポウソウ属ブッポウソウは、五島列島では東西型の渡りをする個体群で5月には西側に辿りつき島を横断し東側から五島灘、長崎北部・南部海域上空を渡る。

島内を横断するとき、電線、電柱の頂に止まっているところを観察する機会がある。

特に5月には電線・電柱を注意深く観察していると本種に出会う幸運がある(図11-9)。

・少ないヤマガラ：スズメ目シジュウカラ科コガラ属で、ハシブトガラ、コガラ、ヤマガラが知られている(図11-10)。

2012年、若松島の神部の老松神社の周辺ではじめてコガラを確認した。極めて珍しい記録であった。

ハシブトガラは記録がない。北海道など北方系の鳥類である。

ヤマガラは中通島、若松島には生息数が少ない。

本種には変種がおおく、ナミエヤマガラ、オーstonヤマガラ、ダイトウヤマガラ、タネヤマガラ、ヤクシヤマガラ、アマミヤマガラ、オリヤマガラなどが命名されている(表6-16)。

五島列島のものも深く調査研究する必要があるのではなかろうか。

若松島神部のえび屋の巣箱には毎年、営巣し確実に繁殖し保護保全ができています。

・偶蹄目イノシシ：ニホンイノシシ全島各地に生息し農作物などに被害をもたらしている。



## 12. 相河・跡次



図 12-1 相河川上流域 ヤイロチョウ、カラスバトの鳴き声が響く。 2006.6.1



図 12-2 相河川上流域 2012.7.20



図 12-3 青方港 博多・福江などの航路



図 12-4 青方港を出港し博多へ向かう太古丸

### 景観

乙女の膨やかなふくらみを連想させる小高い山は印象的で幸福を感じる。

谷間の源流から流出した流れが谷川を下り美しい清流となる。

自然林の中を流れる小川のせせらぎは心身ともに疲労を癒してくれる。

川面に木漏れ日がさし、常緑広葉樹の葉が発するフイトンチッドは健康を増進してくれる。

さらに小鳥たちの求愛行動のささやき、月・火星ホイホイと歌うサンコウチョウや日本一の美を誇るヤイロチョウなど珍鳥が鳴く相河川上流域は幽寂な心理状態になる。何度でも訪れたい自然散策に適した場所である。

自然林は、常緑広葉樹でシイ類を優占種とした群落で萌芽林である。

主な構成種は尾根に近い斜面には、ツブラジイ川沿いにはスタジイ、その差異点はどんぐりの形で、つまり前者は「どんぐり」が球形、円らな瞳の形状である。

その他、黒紫色の果実をつけるヤブニッケイおよび赤い果実をつけるシロダモなどから構成され鳥類が、これらの種子散布の役割を担っている。

亜高木層には、12月ごろから真つかな花が咲くヤブツバキ、低木層にはヒサカキ、ネズモチなどが果実をつける。

林縁部には陽樹のカラスザンショウ、アカメガシワ、タラノキ、アオモジ、キブシなどが見られる。

春、初夏には路傍にノアザミが開花、ノイバラも開花し心地良い甘い香りを放つ。スイカヅラなどの香りで癒される。

跡次集落からの眺望、教会の背後の道路から青方湾を一望できる。

### 見どころ

・相河川上流域の小川沿い山道：川面を眺めせせらぎを聞きながらフイトンチッドが混合した新鮮な空気を愉しみながら小鳥の求愛行動の歌声を堪能できるのは5月～6月である。

・相河川中流域で楽しむ：河川沿いにゲンジホタルが6月には出現し川沿い道路の山際には生息数が少ないヒメボタルが飛び交い発光するがそのリズムは、前種より発光間隔が速く差異が明確である（図 12-2）。

稲田では、雌鳥が美しいタマシギが生息し夜間には哀愁をおびた鳴き声を聞くことができた。

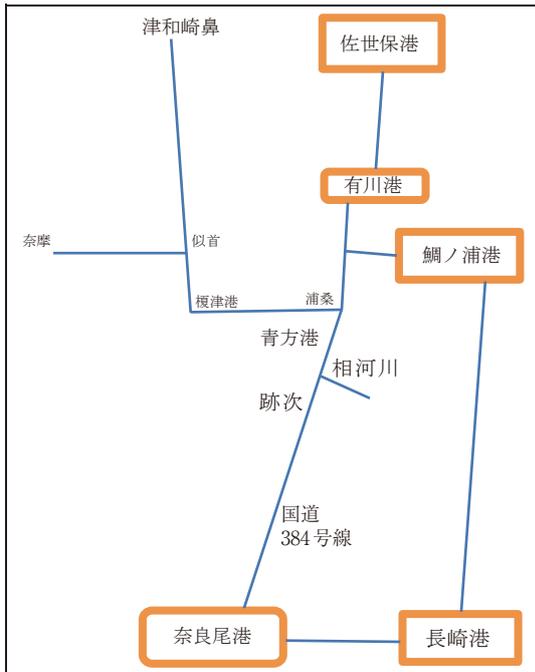


図 12-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線で奈良尾方面へ向い青方港を過ぎた道なりにある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し① 同コースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線の有川方面へ走行する道なりにある。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：青方港ターミナルにある。
- 駐車場：青方港ターミナルにある。
- 宿泊：民宿あり。

#### 続 見どころ

・青方港の防波堤で休息するカモメ類：港の防波堤、荷上げ広場に集団で休息する(図12-6)、その構成種は主にウミネコ、セグロカモメでオオセグロカモメおよびシロカモメ、カモメは数は少ない個体群である。

しかし、長時間をかけて、漁船の入港、出船を観察すると、漁船とともに飛来する個体を精査すると、種数の増加は推測される。

相河川の河口にも採食、休息のために飛来し近くで観察できる(図12-7)。

トビとハシボソガラス、ハシブトガラス、イソヒヨドリの留鳥が生息し目立つ。

河口の汽水域でのカモメ類の行動は水浴、羽毛の手入れなどの行動が観察できる。

イソヒヨドリの繁殖期には雄鳥が美声をはりあげ囀り鳴く、その声は集落、海岸に響くさわやかな鳴き声である。

・ツル類：途中に立ち寄る。越冬地と繁殖地との間に位置する五島列島は渡りルートであり新上五島町で休息することがある。

地上へ降りた事例は、相河、今里、有川のヘリポート、頭ヶ島飛行場、石司の湿地などである。

街内の上空通過は、毎年、春と秋に、集団で鳴きながら通過する(図12-8)。



図 12-6 防波堤で休息するカモメ類  
2012.12.22 青方港



図 12-7 河口で休息するカモメ類



図 12-8 ナベヅル



図12-9 留鳥スズメ



図12-10 サルナシ果実



図12-11 タブノキの果実 2008.7.10



図12-12 トベラの果実 ヒヨドリ、カラス類が採食  
2003.12.8

・ 夜間に川面を乱舞する光：河川の中流域に水田が両側の堤内地に広がり6月の夜間に河川沿いにゲンジボタル、ヒメボタルが放つ光はルシフェリンという酵素が発光する冷光だ。

また、水田には「一妻多夫のタマシギ」が水田地帯や河川内の草地などに生息し、雌鳥は繁殖期には「コウ コウ」「コウ コウ」と二声の鳴き声が響きわたる。普通、雄鳥が鳴くことがおおいが姿の美しい雌鳥が鳴き雄鳥を求める。

・ キウイに類似のサルナシの果実：方言名は「こっぼ」と言う。町内各地に生育する。人も生食できる（図12-10）。

サルナシの由来は果実を梨になぞらえ、猿が食べる梨の意味に由来した名前だろう。

サルナシは町内の各地にあり、「こっぼ」という俗名で知られており果実は成熟すると人も食べるという。

ハシボソガラス、ハシブトガラスは果実が熟すと飛来し、くちばしで挽ぎ取る。くちばしでくわえ他の場所へ運ぶ。

シロハラ、ツグミなどのツグミ類やヒヨドリ、カラスバト、メジロも果実を採食する。

・ 照葉樹林の主要な構成種のタブノキ：昔は朝鮮半島では丸木舟を造っていたという（岡部誠 2003）。丸木舟を作る木の意からタブノキになったと述べてある（図12-11）。

常緑高木で、日本一大きいのは樹高12m、幹周り12m、推定樹齢500年、神奈川県清川村にあるという（渡辺典博 2000）。

本町内の太田に生育する巨木も立派なものがあり、天念記念物として永遠に保護保全したいものである。

果実はカラスバト、ヒヨドリ、メジロなどが採食する。

・ 海岸地帯におおイトベラ：海岸近くに自生する常緑低木、4～5月に集散花序をだし、芳香の強い美しい白色花をつける。全域の海岸に分布する（図12-12）。

果実は晩秋から冬期に熟し、熟したものをヒヨドリ、カラスバト、メジロ、カワラヒワ、マヒワ、シロハラ、カラス類などが採食する。



図 12-13 サンショウの果実 2006.8.26



図 12-14 キカラスウリの果実 2006.11.11



図 12-15 スダジイの堅果 2005.10.14



図 12-16 三日の浦の干潟で採食サギ類 2013.6.16



図 12-17 オガタマノキの果実

・メジロとヒヨドリが好んで採食するサンショウの果実：ミカン科の植物で、葉や実を料理に用いる。カラスバト、キジバト、カワラヒワなどが果実を採食する。

若松島の西側、瀬戸脇から堤へ抜ける旧道の道沿い、法面、路肩に多く生育しているが、鳥類による種子散布が関係しているものと推測される（図 12-13）。

・カラス類が好きなカラスウリ：雌雄異株のつる性多年草、林縁に生育するので目立つ。

花は日没後しばらく開花し、日の出ごろはしぼむ、果実は秋に赤く熟する。

キカラスウリは果実が球形で、熟すと、黄色くなる（図 12-14）。

果実は熟するとハシボソガラス、ハシブトガラスが好んで採食する。果肉だけを食べて果皮は残していることがおおい。果実をくわえて飛ぶ行動は目立つ。

・どんぐりはオシドリが好む：どんぐりとして知られているものに、実が大きいものにはブナ科のマテバシイ、これより小さい椎の実には、楕円状のスダジイと球形に近い形状のツブラジイとが新上五島では見られる（図 12-15）。

マデバシイは崎浦地域におおく分布するが、ほかの地域にも生育している。密度が高いのが頭ヶ島など崎浦地域である。

林床に落下したどんぐりを採食するのは陸鳥では、キュウシュウキジ、キジバトは、スダジイ、ツブラジイを丸呑みする。

淡水ガモのカルガモ、マガモなどやオシドリは地上に落下した「どんぐり」だけでなく、枝についた堅果を羽ばたきながら挽ぎ取る行動もみられ、まるでハチドリの仲間が吸蜜する行動に似ている。

淡水湖でシイ類の枝が水面上につき出した枝に止まり休息する。

水面下に落下し水中に沈んだ堅果をオシドリは潜水し採食する行動を見ることがある。

したがって、淡水湖や小さな溜池であっても湖畔林に堅果をつけるシイ類やカシ類などの樹木が淡水面を被うほどの枝の繁りがみられるところにはオシドリが飛来し採食活動をする。

そんな場所は、有川の高崎ダム、樺ノ木ダムなど。

また、海岸でもシイ類、カシ類がある岩場にも飛来し採食する。



### 13. 今里・三日ノ浦・桂山・佐野原



図 13-1 今里の入江 2012.10.17



図 13-2 三日ノ浦 佐野原川河口 水鳥、カモ類が飛来する



図 13-3 今里のムクロジ巨木 2010.3.16



図 13-4 絶滅危惧種サシバ 2009.6.17 桂山で繁殖

#### 景観

三日ノ浦は青方港の南方に入りこんだ入江で相河崎と野首崎間の入江で跡次を国道384号線が通り、三日ノ浦橋の内側は広く広がる。

冬期にそこには海鳥が飛来する。佐野原川沿いに走行すると佐野原の集落に通じている。

道路の法面にはハイビスカスの花に似た花で黄色い花を開くハマボウや落葉低木のフヨウが開花する7～10月には見事である。

道路の対岸の小高い山々はシイ類の萌芽林、美しい景観を呈している。

今里の集落の背後中腹に、お堂があり、その付近にムクロジ大木が聳えている。日本一の大木では(図13-3)?

今里の神社にもエノキの大木が残っているが、一部の枝が伐採されているのは残念だ。しかし誇れる大木だ。

#### 見どころ

・今里のムクロジ大木：落葉高木で雌雄同株である。6月に開花し、球形の果実をつけるが、種子は1個で成熟すると黒色である。種子は羽つきの球にする。用途は庭木や器具材に利用する。秋には黄葉になり、もみじが美しい。

・三日ノ浦川を飾るフヨウの花：右岸の法面にアオイ科フヨウ属フヨウが自生し花期の7～10月には直径約15cmの大輪が開花し法面を飾る落葉低木である。中通島の各地に分布する。

・佐野原のイイギリ大木：落葉高木でイイギリ科イイギリ属のイイギリで、太い枝が同じ位置から車輪状に広がる特徴がある。

秋には球形の赤い果実が総状に結実し落葉すると遠くからでも目立つ。果実は12月ごろまで見られることもあるが、ヒヨドリにより採食される。

旧有川町の江ノ浜峠へ通じる山道沿いでも山中に赤い果実を総状のものは本種であるが個体数は極めて少ない。珍しい植物だ。

・桂山で繁殖したサシバ：佐野原集落の北東方向の背後の山の中腹に、東神ノ浦に向かう林道が三峯山の西方を相河集落に通じる林道沿で繁殖した(図13-6)。

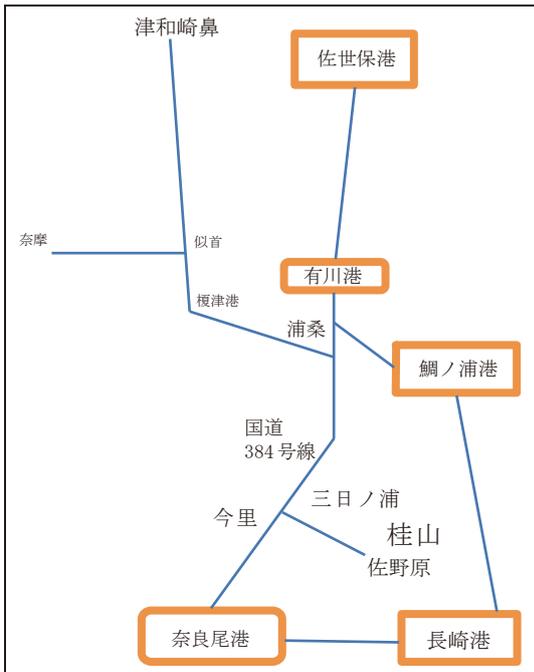


図13-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線で奈良尾方面へ向い青方を通り道なりにある。三日ノ浦を左折し、走行すると佐野原がある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線を有川方面へ走行する道なりにある。今里トンネルを通過後、三日ノ浦を右折し、走行すると佐野原がある。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：なし
- 駐車場：三日ノ浦にある。
- 宿泊：民宿あり。

#### 続 見どころ

・前頁のサシバについての続き：相河の農耕地および佐野原の集落を採食地としている。

新上五島では初めての繁殖記録地であったこの地域ではヤイロチョウおよびブッポウソウなどの珍鳥が出現する地域でもある。

旅鳥として飛来する個体群は魚目半島・中通島・若松島などの上空を鳴きながら少数が移動する。

サシバの渡りの観察には高くて視野が広い場所がよい。前述したが再度、北方から列举すると、津和崎灯台付近・番岳・高熨斗岳展望台・矢倉岳展望台・三王山展望台・米山展望台など若松島の龍観山展望台など適地である。

・亜熱帯系の美しいシダ：リュウビンタイは日本には一科一種で福江島の七岳と丹奈の群落知られている。中通島では今里のスギ林内に生育している(図13-7)。

スギ林伐採や道路工事などで、現状変更で絶滅させることがないように留意すべきである。

現在は山道沿い、小川沿いに生育しているが多くはない。



図13-6 サシバ繁殖 鴨川誠著『長崎県の鳥』より1983



図13-7 リュウビンタイ 2009.6.11 今里



図13-8 カラスバト 2012.10.17 今里



図13-9 三日ノ浦川上流域



図13-10 大陸系のハンカイソウ 2009.6.17 佐野原



図13-11 ヤブカンゾウ 2006.7.28 桂山

・自然のハーモニーでリフレッシュ：相河川や佐野原川の上流は、小川のさらさら流れ、木々の葉の揺れ踊り、小鳥たちの歌声がハーモニー、自然の複雑な音色となり、筆者には心地良いメロディーとなる。

吹く風により、さらに小鳥たちの歌い手の種類により自然のハーモニーに変化があり、尚いっそう楽しくなる。

さらに、路傍の花の香り山肌の香りもそよ風がつれてくる。

英気を養うための散歩路だ。路傍に咲く草花も季節ごとに移り変わり、常連の小鳥はメジロ、ヒヨドリ、ホオジロ、ヤマガラ、シジュウカラなどであるが、初夏には珍鳥ヤイロチョウ、名前のとおりからだを八色の羽毛で包み飾っている小鳥が「ホホヒー ホホヒー」と二声で鳴く。

鳥の鳴き声を文字で表現は困難であり、聞くにより差異がある。

たとえば、ヤイロチョウの鳴き声をかかげると、高野伸二(2012)は「ポポビー ポポビー」と表し、大西敏一・真木広造(2000)は「ホーヘー ホーヘー」と書き表している。

したがって、鳥の鳴き声を文字で表現するのは困難である。

・山地に潜むハンカイソウ：キク科植物で多年草、葉は(図13-10)深く切れ込み大形であり賞状深裂である。

草丈はよく生育している場所では約2mもある。

中通島や若松島に分布するが極めて少なく、林縁や木陰でひっそりと、大きくて黄色の目立花をつけ飾っている。

いろいろな昆虫は訪問しているが、鳥類の飛来は確認していない。大陸系の植物である。

佐野原の道沿いの群落は本町では、一番大きい群落である(図13-10)。

・花は八重咲きのヤブカンゾウ：別名オニカンゾウともいう。ユリ科で多年草、中通島の桂山集落の河川沿いで見た一株である。

一重咲きは、ノカンゾウであるが、極めて少なく野外で出会うことは、開花の時期は7月であり夏期外では見つけるのは困難である。

帰化植物とも言われている。盗掘されたのか最近桂山の河川沿いでは消失した(図13-11)。



図 13-12 カギカズラ



図 13-13 フトウカズラの果実 小鳥が採食



図 13-14 サルナシ 2006.1.10



図 13-15 アケビの果実 2005.11.17



図 13-16 カギカズラ (拡大写真)

・ 蔓に鉤をもつカギカズラ：アカネ科の常緑つる性で本州の房総半島以西に分布することが知られているが、生育地は少ない。

托葉は生薬の「釣駒」で、頭痛、眩暈などの鎮静薬となる。本町では少ないが各地に見られる。

本種を食草とする昆虫類を採食にシジュウカラ、ヒヨドリが飛来する。日本固有種である。

・ フトウカズラの果実：常緑つる性の植物で海岸近くの林内や道路の法面、樹木などに這い登る (図 13-13)。

コショウ科の植物であるが果実をハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリなどが採食する。

本町内には分布地が多く目立つ植物であり、園芸植物として活用できそうである。

・ 鳥たちが好きな果実類：アオキ (ヒヨドリ・メジロなど)、アカメガシワ (小形ツグミ類・大形ツグミ類・ウグイス・ヒタキ類など)、アキグミ (メジロ・ムクドリ・ヒヨドリ・キジバト・シロハラ・カラスバト・アカハラ・ジョウビタキなど)、アケビ (ハシボソガラス・ハシブトガラス・カラスバト・ヒヨドリ・メジロ・シロハラなど)、イイギリ (メジロ・ヒヨドリ・シロハラ・ツグミ・カラスバトなど)、イヌツゲ (レンジャク類・カラスバト・アオバト・キジバト・ツグミ類など)、イヌビワ (カラスバト・ヒヨドリ・メジロ・カラス類・キジバトなど)、ウリハダカエデ (カワラヒワ・ヤマガラ・シジュウカラなど)、エゴノキ (イカル・キジバト・ヤマガラ)、カキノキ (ヒヨドリ・ツグミ・シロハラ・メジロ・スズメ・キュウシュウキジ・カラスバトなど)、カラスザンショウ (メジロ・アオバト・カラスバト・アトリ・カワラヒワ・マヒワ・サンショウクイ・ムギマキ・ノゴマなど)、キツタ (ヒヨドリ・シロハラ・レンジャク類など)、クコ (スズメ・ヒヨドリ・メジロ・カラスバト・シジュウカラなど)、クサギ (カラスバト・メジロ・キジバトなど)、クスノキ (アカハラ・マミチャジナイなど大形ツグミ類・ヒヨドリなど)、クマノミズキ (小形ツグミ類・大形ツグミ類・ヒタキ類など)、クロマツ (キクイタダキ・イスカ・カワラヒワなど)、ムベ (カラス類、ヒヨドリ・メジロなど)、すべて果実や種子を採食する。



## 14. 鯛ノ浦・阿瀬津・広ノ谷・東神ノ浦・船隠



図 14-1 阿瀬津 岸辺にサギ類、カモメ類が飛来



図 14-2 サルナシ (俗称こっぼ)



図 14-3 冬鳥ジョウビタキ  
鴨川誠著 『長崎県の鳥』 1983



図 14-4 野鳥の食痕跡のムベ果実 2005.10.16

### 景観

矢倉岳 (384m) の連山が南に連なり、その東側が鯛ノ浦、阿瀬津で、その深い入り江が鯛ノ浦港である。入江の奥は奥浦という集落があり干潟があるが、干潟の生物は少ない。

鯛ノ浦から南下の坂道を登り、大瀬良で右折し細い道路を下ると広谷の盆地にでる。ここは最上流である。

大瀬良を直進し道なりに葛折に下ると東神ノ浦の入江、道なりに坂道を走行し途中で左折すると船隠の入江があり、さらに進むと干切 (ひぎれ) の小さな集落、ここは車道の終点である。

この浜は礫浜で、右岸に小島があり風光明媚な景観である。海岸線は長江曲浦の感じの地域である (図 14-1)。

### 見どころ

・鳥たちが好きな果実類：サルナシ (ヒヨドリ・ハシボソガラス・ハシブトガラス・カラスバトなど)、サネカズラ (ヒヨドリ・メジロ・カラス類・ムクドリなど)、サンゴジュ (メジロ・カラスバト・カラス類・ヒタキ類など)、サンショウ (メジロ・ヒヨドリなど) シロダモ (キジバト・カラスバト・ヒヨドリ・シロハラツグミ・カラス類など)、スギ (ヤマガラ・シジュウカラ・マヒワなど)、センリョウ (ヒヨドリ・大形ツグミ類・ジョウビタキ・ヒヨドリなど)、センダン (キジバト・ヒヨドリ・サンショウクイ・アサクラサンショウクイ・キジバト・シロハラ・ツグミなど)、タラノキ (アトリ・小形ツグミ類・大形ツグミ類・ヒヨドリ・カワラヒワ・マヒワなど)、ツルウメモドキ (メジロ・ヒヨドリ・ジョウビタキ・大形ツグミ類・キジバト・カラスバトなど)、テリハノイバラ (カワラヒワ・ツグミ・シロハラ・キジバト・ホオジロ・メジロ・キュウシュウキジ・ジョウビタキなど)、トベラ (ヒヨドリ・メジロ・カラスバト・キジバト・カワラヒワなど)、ナツグミ (ヒヨドリ・メジロ・ムクドリなど)、ナワシロイチゴ (ヒヨドリ・メジロ)、ヌルデ (小形ツグミ類・大形ツグミ類・本土域ではアオゲラ・キュウシュウコゲラ・ホオジロ・カワラヒワなど)、ネズミモチ (ヒヨドリ・メジロ・キジバト・カラスバトなど)、ノイバラ (ホオジロ・ヒレンジャク・カワラヒワ・メジロ・ヤマガラなど)、ノブドウ (ヒヨドリ・カワラヒワ・メジロなど)、ハゼノキ (メジロ・カラス類・県本土域ではカゴシマアオゲラ・キュウシュウコゲラ・ヒヨドリ・大形ツグミ類など)、ヒヨドリジョウゴ (ヒヨドリ・メジロ・シロハラ・ツグミ・イソヒヨドリ・シジュウカラなど)、ヒノキ (カワラヒワ)





図 14-8 ジャケツイバラ 2012.5.7



図 14-9 クロキの果実



図 14-10 暖地性のヤナギイチゴ 雌雄異株  
2009.6.18



図 14-11 ホオジロ ススキの種子を採食する

・鳥たちが好きな果実類：ジャケツイバラ（ヒヨドリ・カワラヒワ・ハシボソガラス・ハシブトガラスなど）、花は総状花序で黄色い花は遠くからでも目立つ。落葉つる性の植物でつる状にのびた枝には鋭い鉤がある（図 14-8）。

クロキ（ヒヨドリ・メジロ・ハシボソガラス・ハシブトガラスなど）、本種は小枝が密であり、イカの産卵用に束ねて海に沈める。和名のごとく幹の樹皮が黒い特徴がある（図 14-9）。

ヤナギイチゴ：暖地の海岸に近い土地に生育する落葉低木で雌雄異株の植物である。果実は集合果である。人は生食するが鳥類の採食は確認してない。

新上五島では中通島、若松島に観察できるチャンスがおおい。葉身が細長く柳類に似ている。この名があてられたものと思われる。

果実は梅雨時期であるが、雌木にのみ結実する。したがって、結実したヤナギイチゴに出会えるチャンスは少ない（図 14-10）。

生物の世界で、動物の雌雄の比率は1：1に近い値であるが、本種は雌木が出現する割合が小さいのではなかろうか。雌木を観察することがあれば詳細に観察を勧めたい。

・イネ科植物の種子を採食する鳥：野鳥のなかには木の実を好む種類も前述した種類などおおくの種類がいるが、イネ科の種子のように小粒のものを好む種類もいる。

たとえば、ホオジロのようなホウジロ科のカシラダカ・アオジ・クロジ・オオジュリンなどはイネ科植物の種子を穂先に止まり、また地上に落下ものを表面採食を行う（図 14-11）。

ヨシ、カヤツリグサ、エノコ、キンエノコロなど小さい種子を採食する。

北海道で繁殖したツル科のタンチョウが長崎県東彼杵郡波佐見町、川棚町に飛来した若鳥はキンエノコロの穂を嘴で挟み左右に動かし採食していた。この時の観察では水田内の土中に生息するマキ貝の外来種ジャンボタニシを穿孔採食行動し水たまりまで移動し貝殻を水中で洗い飲み込んでいた。

植物性の食物だけを採食する単食性の鳥類は少なく、動物性のものも採食する。

動物の食べる食物の種類についての習性を食性という。

一般的には草食性・肉食性・雑食性・腐食性などに区別することもある。さらに食物範囲については、広食性・狭食性などに区別することもある。



15. 青木・焼崎・小手ノ浦・飯ノ瀬戸・猪ノ浦・浜ノ浦・続浜ノ浦・三本松・迎・小浜



図 15-1 小手ノ浦 2012.8.9



図 15-2 焼崎の入り江



図 15-3 猪ノ浦の大タブノキ 2012.12.20



図 15-4 海岸地帯に生育するハマビワ

景観

青木浦、焼崎、小手ノ浦、飯ノ瀬戸、猪ノ浦、浜ノ浦、続浜ノ浦、三本松、迎、小浜など小さな集落が時計回りに長汀曲浦という言葉にふさわしく入江が多様化し風光明媚であり高い位置から望む景観は眺望絶佳な地域である。

西方は東シナ海に面し広大な海原であり東西型の渡り鳥が、日本列島への移動で最も早く、また最も遅くまで観察のチャンスがある地域でもある(図15-1)。

植生はシイ類を優占種とする萌芽林群落で、その構成種はシロダモ、ヤブニッケイ、タブノキ、クロキなどの高木層で、遷移が若い森林では、カラスザンショウの陽樹が生育しているが、その種子は、いろいろな鳥類の食物となっている。

日本へはまれな迷鳥として宮崎県、沖縄県で記録がある珍鳥アサクラサンショウクイが種子を採食していた。

見どころ

・シイ類の萌芽林：この地域全体では、ツブラジイとスタジイを優占種とする地域である。

山の尾根など乾燥が著しい場所にはツブラジイが生育し谷間の湿潤な場所には、堅果が細長く楕円形をしたスタジイが生育する。

シイ類の果実(堅果)は、キュウシュウキジが好んで採食する。

・猪ノ浦の大タブノキ：常緑高木で群落は北魚目地域に分布する(図15-3)。

本州、四国、九州、沖縄、台湾、フィリピン、朝鮮南部、中国など暖地の沿海地に分布する。

用途は街路樹、公園樹、建築材、家具、彫刻材、薪、パルプ材に利用される。

7~8月に果実は黒紫に熟するがカラスバトは果実を採食する。

・ビワの葉に似たハマビワ：海岸の近くに生育する常緑亜高木である(図15-4)。

雌雄異株で雌株には翌年の春から初夏には青黒色の楕円形の果実が稔る。

そんな果実をカラスバトは採食する。したがってハマビワが分布する場所にはカラスバトが生息している可能性がある。

静かに近寄り枝を注意深く観察していると休息していることがある。

薄暗いところで休息していることがあり、見落とさないように配慮する。

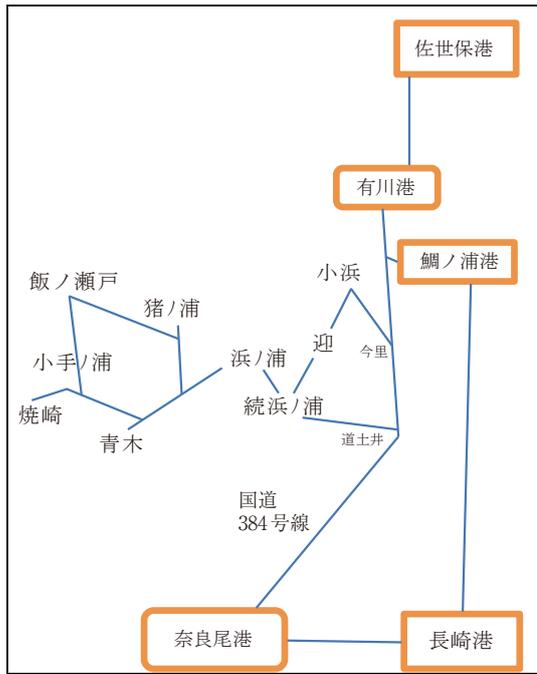


図 15-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線を走行し、青方・今里トンネルを通過後、右折し、走行すると道なりにある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し、①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線を有川方面へ走行し、こんびらトンネルを通過後しばらく走行し道土井で左折し、走行すると道なりにある。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：続浜ノ浦、飯ノ瀬戸にある。
- 駐車場：続浜ノ浦にある。
- 宿泊：なし

#### 続 見どころ

・ 海岸の近くに生育するハマヒサカキ：海岸に生育する常緑低木で潮風に強い植物である。

雌雄異株で雌株は、球形の果実をつけるが10～12月には、果実は熟し黒紫色になる。

果実はイソヒヨドリの好物であるが、ツグミ、シロハラなどツグミ類、ヒヨドリ、メジロ、キジバト、ジョウビタキなども採食する。

本種は乾燥地に強く、庭木のほか、道路沿い道路の中央分離帯などにも植栽され小鳥たちの採餌木ともなりつつある(図15-6)。

・ 渡り鳥の渡りルートに多いセンダン：日島にはセンダンの大群落がある。

新上五島の各地に独立木がみられる。5～6月に複集散花序をだし、薄紫色の花をたくさんつける(図15-7)。

朝梅雨けむるなかに咲く花は情緒豊かな雰囲気を醸し出す樹木である。果実は小鳥たちに好まれる果実である。



図 15-6 海岸の近くに生育する ハマヒサカキ

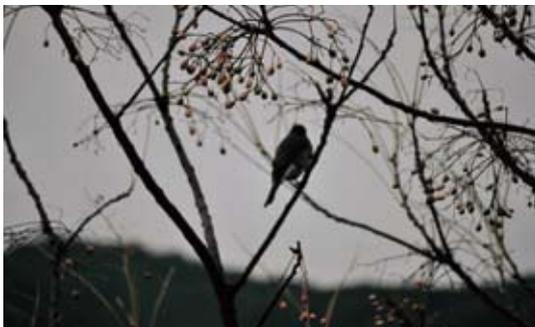


図 15-7 センダン果実を採食 2012.11.29



図 15-8 キュウシュウシカ♂ 道路に出没



図 15-9 ハシボソガラス 雑食性で掃除屋  
2012.11.21



図 15-10 トビ 2012.11.29



図 15-11 青木海岸 サギ類、カイツブリが生息

・雄キュウシュウシカが現れた：シカは若松島での生息密度が最も高そうだが、全島各地や無人島にも生息することが知られている。

自動車で走っていると突然、前に飛び出して来ることがあり衝突のおそれがあるので、注意深く運転することが大切だ。

森林内の林床植物を食べ、生息密度が高い林内には植物がなくなり、林床の表土は露出し生態系の機能を破壊している(図15-8)。

タブノキ、イヌビワなどの樹皮を剥ぎとり食物としている場所ではタブノキ、イヌビワなどの立ち枯れが目立つ。

・ハシボソガラスは路面で食物さがし：カラス類は雑食性で、動物質性食物、植物性食物腐食質の物、加工品食物でも何でも食物とする。

地球の掃除屋でもあるが、人に嫌われることが多い。人が食べ物を捨てなければいいのにと反論する人もいる。

ビニル袋もつつき破り、中の食べ物をさがす行動もみられる(図15-9)。

・トビは電線・電柱がお好き：電線や電柱に止まる種類はおおい。

例えば大型からアオサギ、ダイサギ、鷹類のトビ、ミサゴ、オオタカ、ノスリ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ミヤマガラス、ドバト、キジバト、カラスバト、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、モズ、ホオジロ、スズメ、カワラヒワ、アトリ、シジュウカラ、ヤマガラ、ジョウビタキ、ブッポウソウなど。

例えば大集団で止まる種類は、冬鳥のミヤマガラス、アトリなど。

留鳥のトビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、小型のスズメ、カワラヒワなど。

・美しい青木海岸：景色がよい海岸であり、この風景を眺めていると癒される。

海岸にはアオサギ、ダイサギ、コサギなど白鷺類が少数ではあるが採食に飛来する。

上空にはトビが乱舞、ピーヒョロロの鳴き声はユーモラスである。

森林内からはカラスバトがウーウーと響く声で鳴く。

海岸の近くの海水面にはカイツブリが泳ぎさかんに採食活動が観察できる。



図 15-12 吸蜜性のヒヨドリ、メジロが飛来する ヤブツバキ



図 15-13 シロバナタンポポ 2013.4.3



図 15-14 秋を彩るシマカンギク 2012.11.27



図 15-15 コオニユリは全島に分布し普通である

・島のシンボル・ヤブツバキ：長崎県のシンボルの花木でもある。

五島列島にはヤブツバキ(図 15-12)がたくさん自生し新上五島にも森林生態系のなかで亜高木層を形成する一構成種としての役割を担っている。

花の色や形、大きさにも変化があり、花期には見るのが楽しい。

また、花期の時期には吸蜜性のメジロ、ヒヨドリなどが吸蜜に花に飛来する。

彼らは雄しべの基部まで嘴、頭、胸部までも挿入し吸蜜するが、そのとき花粉が付着し、雌しべの柱頭に花粉が着き受精する。

つまり、実をつけるのに重要な役割をメジロ、ヒヨドリは花粉媒介を行っており生態学的にも遺伝学的にも興味あるツバキである。

・数少ない白花のタンポポ：キク科タンポポ属の白色花は、どこでも普通に見られたが近年は減少し白色花に出会うことは容易でない。

新上五島では比較的見るチャンスが多く、他の地方より出合う確率も高い(図 15-13)。

つまり、野草の花を探し観察するのも楽しいひと時となる。

・島の秋を飾るシマカンギク：キク科キク属で路傍、崖、法面など日当たりのよい場所に生える(図 15-14)。

10～12月に黄色い花を開花し長い間、咲ほこり島の秋から初冬を飾る美しく、芳香があり、遠くまでよい香りが漂う環境を醸し出す。

全島各地で見るが、特に連続し生えている場所もあり、そんなところは香気が漂っておりフイトンチットまでも吸収し筆者はそんなところでは気分も脳も活性化する。

・島の夏を飾るコオニユリ：ユリ科ユリ属で全島の各地に自生し7～8月に開花し島を飾る美しい花である(図 15-15)。

前述したが、よく類似したオニユリには、葉の基部に黒紫色の珠芽がつくが、本種には発生しない。



図 15-16 コサギの群れ 相河川



図 15-17 冬鳥ツグミ 2012.11.23 西海市で  
栄喜公陽 写



図 15-18 保護されたヤマシギ 小串郷

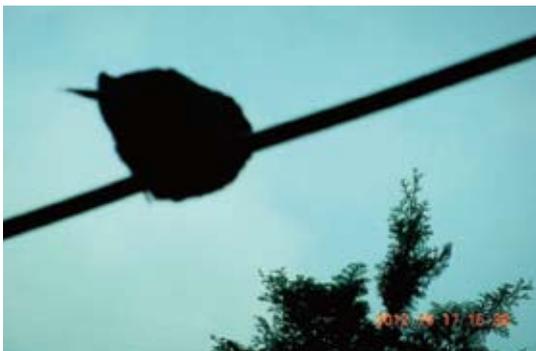


図 15-18 電線にもとまるカラスバト

・水辺の鳥コサギ：一般に白鷺と呼ばれる代表的な個体群であり、県内でも繁殖し水田や河川、海岸にも生息していたが、近年は個体数が減少の傾向にある。

その原因は明らかでない。食物連鎖・食物網で位置関係も推測される。

佐世保では繁殖地は、以前と変わりなくあるのだが、繁殖しなくなった。

何となく見ているうちに個体数が減少しているのだ。そのような生態系の遷移を注意深く観察するときの指標になる。

筆者が幼いころ1935年（昭和10）生まれ、物心がついたころは平戸島では旅鳥であった。その旅鳥が繁殖をする夏鳥になり、周年生息する留鳥になった（図15-16）。

日本列島の一地方、長崎県という地域でみると、コサギには、そんな変遷がある。

近年は絶滅危惧種の対象になるほどまで減少している。

・冬鳥ツグミ：本種は一般的に知られている冬鳥の代表種である。

しかし、秋に渡ってくる個体数を注意深く観察調査をしていると、県内などで越冬する個体群の変動が著しい。

筆者はある年、全国的なアンケート調査を実施した。その結果、やはり日本列島全体に飛来してないことが明らかになった（鴨川誠1995年）、繁殖地のシベリア大陸の研究者と連絡を取ったところ、移動せず「大陸に残留している個体」がいたことが明らかになった。

鳥類の個体群の変動を考察するときには、地球規模で考察する必要があることを悟った。

・保護されたヤマシギ：保護されたのは中通島の北部地域の小串郷の鳥原氏であった。各地で出現したが、この地域に掲載した。

しかし、鳴かないかぎり存在が目立たない個体群である。

・各地の電線にとまるカラスバト：別の項で電線にとまる個体群の事例を述べたが、カラスバトも電線にとまる頻度は高い。

電線にとまっている様子は、見栄えは良くないが、注意深く観察していると、ブッポウソウ、カラスバトなど日ごろ出会うことが極めて少ない個体群を発見することがある（図15-18）。



## 16. 道土井・真手ノ浦・高仏・郷ノ首



図 16-1 道土井海岸線景観 4月下旬から5月中旬  
シイ類群落にスギ人工林（緑）



図 16-2 トビの飛翔



図 16-3 道土井と三本松間の尾根 プッポウソウが  
渡る 2012.5.20



図 16-4 プッポウソウ 2006.5.31

### 景観

波静かな道土井湾の海面に山影を映す時期は晩春から初夏である。この時期の常緑広葉樹の開花と新緑がまだら模様で印象的である。

地形は長汀曲浦を感じる。小さな入江が複雑に散在している様は趣がある（図 16-1）。

生態系の視点で観察すると入江の奥湾には干潟など高潮線・低潮線ができていくことが多く、その無機物的な役割は大きい。その役割とは、谷間から流出した落ち葉や有機物が干潟など潮間帯には沿岸動物や海、地中には微生物などが生活している。

たとえば、分解者の微生物により落ち葉など有機物は入江の奥でゆっくりと無機物に分解、分解された物質は植物プランクトンを育て、さらに食物連鎖の仕組みにより植物プランクトンは動物プランクトンの食物となり育てている。

さらに、動物プランクトンは小魚を育て、小魚は中型の魚の食物となり中型の魚は大型魚の食物となる。入江はそのような場所となり生態系の視点では重要な環境となるのだ。

入江は、そのような大切な役割をはたしている大切な場所と推測される。魚食性の鳥類ミサゴ（びしゃご）やトビ（とんび）などが生息できる生物群集が豊かな環境ができていく。

筆者はこのような「長汀曲浦の風景」を眺望し心身をなごましている。4月下旬から5月上旬が最高の風景だ。

### 見どころ

・長汀曲浦の絶景：図 16-1 の通り極めて美しい季節がある。4月下旬～5月上旬だ。

静かな海面はまるで鏡のようだ。

入江など湾の生態的な役割については、景観の項で述べた。

・姿の美しいプッポウソウや体が八色の羽毛で包まれた日本一美しい鳥ヤイロチョウ：道土井集落背後地など周辺を移動する。

プッポウソウは樹木のこずえに止まり、上空を様々な昆虫が飛び交る様子を見ていて、発見すると飛びあがり捕らえ、また、止まっていた梢に戻る行動をみせてくれる（図 16-3～4）。東西型の渡りをするグループで新上五島の西側に早く飛来し東方向へ移動する渡り行動が観察できる。

町内の各地でそのような現象が観察できる。長期間滞在しそのような行動を観察できるのは本町の地理的な特徴である。

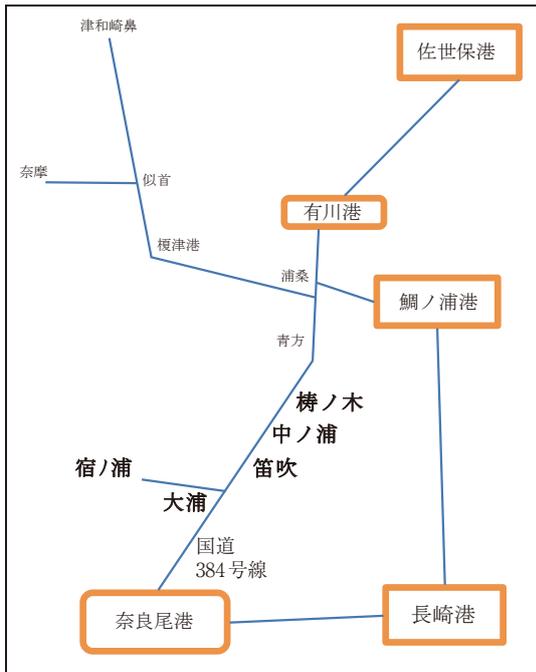


図 16-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線を走行し、青方・荒川トンネルを通過後、しばらく走行すると道なりにある。宿ノ浦は、大浦を右折し走行するとある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し、①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線を有川方面へ走行し、大浦トンネルを通過後、道なりにある。宿ノ浦は、大浦を左折し走行するとある。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：大浦にある。
- 駐車場：大浦にある。
- 宿泊：なし

#### 続 見どころ

- ・ 道土井にヤイロチョウ：集落の背後地で、鳴きながら移動する。

筆者には「ホホヒー ホホヒー」と聞こえる鳴き声で集落の背後地で鳴く。この種の鳴き声は人により異なる。たとえば、小林桂助(1956)はシロペン クロペンと鳴き、真木広造・他(2000)はホーヘー ホーヘーと鳴き、清棲幸保(1978)はポポピーーポポピーーと鳴くと記載している。

二声で、口笛のように聞こえることは共通している。

この地区に長く滞在することはなさそうである。別のところでも述べたが新上五島の旧町、新魚目、有川、上五島、若松、奈良尾すべての地区で記録できる。

- ・ 集落の宅地周辺にも生息するカラスバト：新上五島の新魚目、有川、上五島、若松、奈良尾の集落、宅地周辺に留鳥として普通に生息するが、生活活動が目立つのは、3～5月と10～11月である(図16-7)。

繁殖期には活動が活発で、鳴き声も頻繁にくりかえされ、鳴き声を聞く機会も多い。



図 16-6 イヌビワの果実カラスバトなど 陸鳥類の食物 2011.4.25



図 16-7 暗い場所に潜むカラスバト 2012.5.25 高仏



図 16-8 マルバグミ (おおばぐみ) 4.2 各地の海岸の近く



図 16-9 海岸近くに生育するツワブキ



図 16-10 魚類採食性のウミウ



図 16-11 ハマナタマメの花

・常緑低木のマルバグミ：グミ科グミ属で海岸近くに生育する。

グミ属には常緑つる性のツルグミ、常緑低木のナワシログミ、落葉低木のアキグミなど、いずれも本町内に自生し4～5月にはナワシログミ、マルバグミ、ツルグミなどの果実が熟しヒヨドリ、メジロ、キジバト、カラスバト、アオバトなどに採食される。

秋期に熟するアキグミも前述の種類やツグミ、シロハラなどツグミ類の渡り鳥が好んで採食する(図16-8)。

人も生食できるが渋みがつよい。1～2日間塩水に漬けておき、その後食べると渋みがやわらぐ。

実を果実酒に、また実をつぶし、種子をこしてから砂糖を加えて煮詰めジャムにする人もいる。

・島の秋を飾るツワブキ：キク科ツワブキ属海岸の林縁や海辺の道脇に自生する多年草。常緑で葉は厚く丈夫で、湧き水を飲む時には灼を作り、水をすくい上げ飲んでいた。

花期は10～12月で島を黄色で飾る。開花後に種子をつけるが、その種子をカワラヒワが採食する。

全島に自生し多く分布している。人は若い茎を根本から抜く、若い茎は茶色の産毛が生えているものを選び採取し皮をとり煮て食べる。

味噌漬け、酒粕漬けなどにも利用する食べ方もある(図16-9)。

・休息中のウミウ：長崎県本土域では、カワウの生息が普通だが、五島列島ではウミウが優占種である(図16-10)。

後で述べる21の項の相ノ島の手前に位置するウノクソ瀬では年中、休息地として利用している相ノ島での繁殖事例がないか調査が必要である。

・海辺に自生するハマナタマメ：マメ科ナタマメ属、海辺に自生する常緑つる性の多年草。マメ果はさやが大きくふくらむ。食用のナタマメに類似している。

豆果をくちばしでつつき、豆を取り出しているハシブトガラスを観察したが、他種の採食行動は観察記録していない(図16-11)。

マメ科植物のノアズキ、トキリマメなどの豆果を採食しているヒヨドリは記録した。



### 17. 荒川・三王山・樺ノ木・中ノ浦・ 笛吹・大浦・宿ノ浦



図17-1 孝行ノ滝 2012.7.22



図17-2 チュウサギ・アマサギなどの渡り  
2012.5.19 中ノ浦



図17-3 ノイバラの果実 2009.12.26



図17-4 センダンの果実

#### 景観

有川から384号線を南下し道土井湾を右手に眺めながら走ると新上五島町では番岳に次ぐ三王山(439m)が左手に聳えている。また雄嶽とも言う。

植生はシイ類を優占種とした萌芽林で、谷間にはスダジイが、尾根など乾燥地にはツブラジイが高木層を形成している。

山頂付近には後種の大木やイスノキ、ヤブニッケイ、シロダモ、タブノキなどが生育している。

またこの地域全体も常緑広葉樹からなる照葉樹林帯である(図17-1)。

雄嶽の南東部には雌嶽(401m)があり南北に連なっている。

荒川登山口から標高約300m付近までは、細くて狭い道が曲がりくねった車道としてある。運転には細心の注意が必要だ。

車道沿いに珍鳥やイロチョウが林床でミズ類などを採食しながら鳴き声を残し移動していく。6月には、このような状況に出会うことがある。

#### 見どころ

・渡り鳥のサギ類：ペリカン目サギ科サンカノゴイ属サンカノゴイ、ヨシゴイ属ヨシゴイ、ミズゴイ属ミズゴイ、ゴイサギ属ゴイサギ、ササゴイ属ササゴイ、アカガシラサギ属アカガシラサギ、アマサギ属アマサギ、アオサギ属アオサギ、ダイサギ、コサギ属チュウサギ、コサギ、クロサギ、カラシラサギなどがおり、五島列島に飛来し、新上五島で目立つのは次の個体群である。

絶滅危惧種に選定されているチュウサギおよび頭部と背面が季節によっては橙黄色になる。

つまり、キツネ色である。5月ごろ渡って来て農耕地や河川などに生息する(図17-2)。

・ノイバラの果実：バラ科バラ属で果実は11月ごろから赤色に熟す。メジロ、カワラヒワなどの他、キジバト、ヒヨドリ、ジョウビタキ、カラスバトなどが採食する(図17-3)。

キジ類も果実を採食している採食行動を観察した人もいる。

筆者はキュウシュウキジが木にとまり熟したカキの熟した果実を採食している雄鳥を観察したことがある。

・センダンの果実：センダン科センダン属、秋に黄色に熟した果実はヒヨドリ、キジバトが好む。

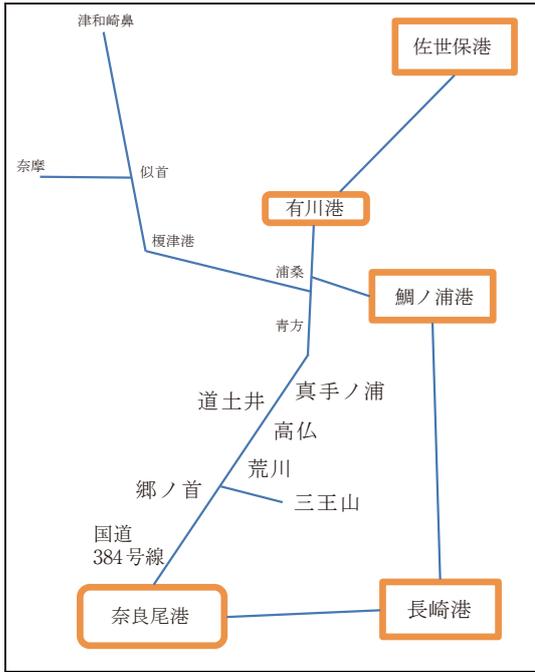


図 17-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線を走行し、青方・今里トンネルを通過後、しばらく走行すると道なりに、三王山はこんぴらトンネルを通過後、次の荒川トンネルの手前に登山口がある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し、①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線を有川方面へ走行し、荒川トンネルを通過後、道なりにある。三王山は荒川トンネルを通過後、すぐに右折する。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711



図 17-6 路傍に咲くウバユリ、果実の種子はカワラヒワが採食 2010.7.6



図 17-7 クリの実 堅果



図 17-8 ヤマモモの果実

#### 施設

- トイレ：真手ノ浦・郷ノ首・三王山にある。
- 駐車場：郷ノ首・三王山にある。
- 宿泊：なし

#### 続 見どころ

- ・山野の路傍、林縁に生えるウバユリ：ユリ科ユリ属、本町には多くはない。対馬などでは早春のころ球根をほりあげすりつぶし水にさらしてんぷんを沈殿させ取り出す。食用とする。  
花期は7～8月で目立つ。果実は11月には成熟し、その果実を小鳥が食物とする。最も好むのはカワラヒワで、果実の中の種子を採食する (図 17-6)。  
イガが裂開し地上に落ちた堅果はキジ類、コジュケイが採食する (図 17-7)。  
本町内では哺乳動物のイノシシが食べる。
- ・ヤマモモの果実：ヤマモモ科ヤマモモ属  
4月には開花するが人には目立たない。果実は6月には紅色に成熟し人も生食できる。  
筆者が幼いころは木に登り果実を食べ、唇が紅紫に着色するほど食べた (図 17-8)。  
ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリも近くの枝にとまり採食していた。本町内には自生が目立つほど多く自生している。



図 17-9 オシドリ夫婦 鴨川誠著『長崎県の鳥』  
1983

・県民鳥オシドリ：県は1966年（昭和41）4月15日に、オシドリを「県民鳥」に指定した。

長崎県のシンボルとして、県の花：雲仙ツツジ（ミヤマキリシマ）、県の花木：ツバキ、県の林木：ヒノキ、県民獣：九州シカを指定している。

オシドリは旧有川町の高崎ダム、旧若松町の椿ノ木ダムなど淡水湖に生息する。

日本野鳥の会長崎県支部では、毎年1月に県民鳥一斉カウントを全県下約30ヶ所で、同時刻調査を行っている（図17-9）。



図 17-10 海水面下の魚類を狙うミサゴ 2012.3.6

・海岸近くの電線にとまったミサゴ：タカ科ミサゴ属、五島列島全域、新上五島町内にも各地の海岸の断崖絶壁の岩上に営巣し繁殖している。他の項でも述べてある（図1-3、2-8、5-6）。俗名で「びしゃご」と呼び、昔から知られていた。

地名にもびしゃご瀬やびしゃご鼻など根拠がある。本種は魚食性で海水魚、淡水魚も捕獲する。



図 17-11 海浜植物シャリンバイ果実イソヒヨドリが採食 全島各地

・海岸近くに自生するシャリンバイ：バラ科シャリンバイ属 海岸の近くの日当たりのよい土地に自生する（図17-11）。

花期は5月ごろで白色花を開花し、秋には果実をつける。

近年は道路の中央分離帯などに植栽されているものを見ることがある。

果実は海岸近くではイソヒヨドリが採食し果肉だけを消化し種子は排出する。

メジロ、ヒヨドリ、カワラヒワ好んで採食する。

・日本特産種タチバナ：日本特産種、ミカン科ミカン属で日本に自生する柑橘の一種である。

本町内には旧若松町に数本が保護されているが計画的に保護、保全すべきである。

花期は6月ごろで香気を放つ、こちよい香りを放つ。近年は糖度の高い柑橘を好むようになり、小型で酸味が強い本種は需要は減少し果実は正月に飾る程度にとどまり、栽培も減り日本特産種が絶滅危惧種に選定する状況まで厳しい状況にあり、保護・保全対策を樹立すべきである（図17-12）。



図 17-12 希少なタチバナの果実 荒川 要保護



## 18. 浜串・後浜串・中山・岩瀬浦・芦山ノ滝



図 18-1 岩瀬浦漁港の入り江



図 18-2 後浜串の入り江



図 18-3 オオルリ♂ 日本の三鳴鳥で有名  
2006.4.17 雲仙で



図 18-4 バードウォッチングは楽しく脳を活性化  
佐世保市で

### 景観

草摺峠から白魚峠・福見峠まで南下し連なっている尾根は東西を隔てている。

鯛ノ浦から東神ノ浦・船隠・後浜串・岩瀬浦集落の高所を位置する道路は風光明媚な絶景を眺望できるハイウェイだ(図 18-1、18-2)。

長崎県内でアオバトが繁殖した地域でもある。かつてオジロワシ、オオワシを一度に数羽の群で海岸線上空を滑空し、さらに草摺峠を越え西海岸方向へ向かった雄大な姿勢で飛行する行動を観察し魅了した事がある地域でもある。

断崖絶壁あり折れ曲がっている入江あり道路からながめると、海岸線の長江曲浦が一望に見わたせ、みごとな景観を堪能することができる地域である。

### 見どころ

・長江曲浦の景観：船隠から南東に突出した岬・後浜串・浜串・ビシャゴ鼻・岩瀬浦・網代鼻に至る海岸線は断崖絶壁で男性的な景観は素晴らしい地域である。

・むかしオジロワシが乱舞：この海岸線に沿った道路を自家用車で走っていて、同時に3個体のオジロワシの成鳥に遭遇した体験がある。

オジロワシは体長83cm～92cm、翼開長199～228cmで、トビの約1.5倍の大きさだ。

現場では2倍以上の大きさに見える。筆者が幼いころ平戸島の西海岸線を乱舞する「いそわし」を見て感激した記憶がよみがえる。

1990年代には、旧奈良尾町の高井旅から白魚峠上空を通過し白魚に向かうオジロワシ、オオワシを観察した事例がある。もちろん越冬個体。自家用車で走っていて、同時に3個体を確認できた。

・青い鳥見つけた：鳥類の体色には、赤い鳥青い鳥などがある。前種はアカショウビンであり後種はオオルリである(図 18-3)。

町内の各地に、夏鳥として飛来し繁殖している可能性がある。

別のところでも述べたが日本の三鳴鳥であり雄鳥の囀りが美しい。オオルリ・ウグイス・コマドリを三鳴鳥という。

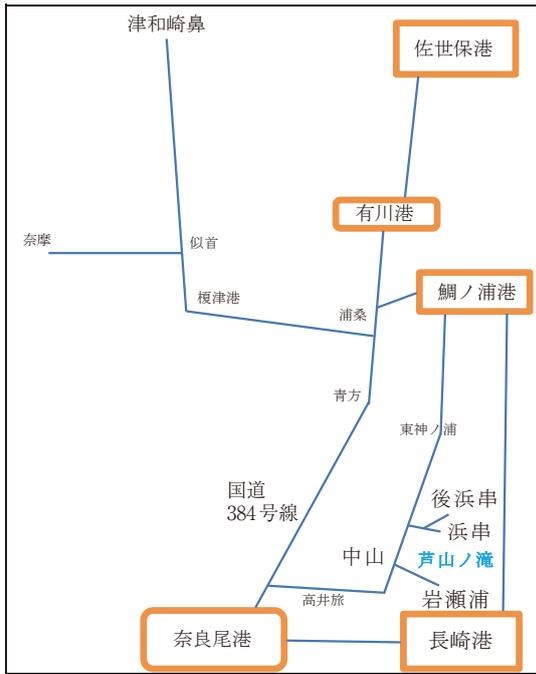


図18-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線をしばらく走行し、県道22号線に入る。鯛ノ浦、東神ノ浦を通過後、しばらく走行し、浜串の峠付近から左折し走行すると、後浜串、浜串がある。県道22号線をそのまま走行すると道なりに中山があり、中山から左折し、しばらく走行すると左手に芦山ノ滝、その下流に岩瀬浦がある。
- ② 鯛ノ浦から①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線をしばらく走行し、県道22号線に入る。しばらく走行すると道なりに中山があり、中山から右折ししばらく走行すると左手に芦山ノ滝、その下流に岩瀬浦がある。県道22号線をそのまま走行し、浜串の峠付近から右折し走行すると、後浜串、浜串がある。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー（有川地区） ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー（奈良尾地区） ☎44-0364
- トヨタレンタカー（有川地区） ☎53-0100
- トヨタレンタカー（奈良尾地区） ☎44-1200
- シンコーレンタカー（奈良尾地区） ☎44-1711



図18-6 芦山ノ滝 2012.7.22



図18-7 車道を被う森にカラスバト出現する浜串

#### 施設

- トイレ：中山にある。
- 駐車場：浜串上の展望所にある。
- 宿泊：なし

#### 続 見どころ

- ・三鳴鳥オオルリ・コマドリ・ウグイス：いずれも町内に生息する。

しかし、コマドリは旅鳥で春、初夏に見ることが出来る。

オオルリは滝や溪流沿いに生息することがおおい。からだの背面が青色で胸から腹部は白色である（図18-3）。

一二三の滝、雌滝、孝行滝、芦山ノ滝などの周辺にも生息し繁殖時期には雄鳥が盛んに囀り鳴きをつづけている。

- ・国指定天然記念物カラスバト：ハト目ハト科留鳥として本州中部以南の島嶼に分布し、特に照葉樹林内に生息する。

全国一円、本種が国の天然記念物に指定され、さらに国指定絶滅危惧種、長崎県指定絶滅危惧種でもある。



図18-8 浜串 カラスバトが生息する森



図18-9 芦山ノ滝 2012.7.22



図18-10 ノイバラ果実ジョウビタキなど小鳥たちの好物 岩瀬浦 2008.11.21



図18-11 ウリハダカエデの紅葉

本町内では、中通島・若松島・漁生浦島・有福島・日島・桐小島・頭ヶ島など人が住んでいる「集落周辺に共存」しているのが特色である。

もちろん、天神山・下中島・野島・カズラ島・相ノ島など無人島にも生息している。

集落周辺の道路沿いの照葉樹林内(図18-7、18-8)などにも生息し、朝夕の通勤時にみることがあるという。

先に述べたように各地で確認できるほど生息状況は豊かである。

・本町内に生息するハト目ハト科：本土で普通に見るキジバトはカラスバトより極めて少なく目撃する機会も少ない。アオバトはさらに少ない。シラコバトが2012年11月19日に米山の中腹で確認。

・小鳥が好きな木の実：果実は熟すと赤色になる種類がおおい。図18-10に示したノイバラ、ヤマザクラ、カナメモチ、メギ、ナンテン、トベラ、モッコク、マサキ、ツルウメモドキ、クロガネモチ、ナワシログミ、アキグミ、イイギリ、アオキ、マンリョウ、クコ、サンゴジュ、ニワトコ、ナワシロイチゴ、ゴンズイなどは極めて目立ち採食活動に有利である。

黒色に熟する果実は、ヒサカキ、ハマヒサカキ、クロキ、クスノキ、アカメガシワ、カラスザンショウ、クマノミズキ、シャリンバイ、キズタ、イヌツゲ、タラノキ、ネズミモチ、ハマクサギ、ヤブニッケイ、ホソバタブなど。

黄色に熟する果実は、ミズバイチゴ、ホウロクイチゴ、センダンなど。

紫色に熟する果実は、ムラサキシキブ、コムラサキ、ハマクサギ、クサギ、タブノキ、モクタチバナ、タイミンタチバナ、ミズバイなど。

白色に熟する果実はイズセンリョウで、白色に熟する果実は極めて少ない。

・少ないカエデ科の植物：本町内に自生するカエデは、落葉小木で小枝は緑色で、幹の樹皮は、緑灰褐色で、秋には紅葉する(図18-11)。

島内に自生する樹木で紅葉する樹種の主なものは、ウリハダカエデの他にヤマハゼ、ヌルデ、ヤマザクラなどで数少ない。

島内に自生する樹木で黄葉する樹種の主なものは、アオモジ、エノキ、ムクノキ、ハマセンダン、センダン、キブシ、ヤマグワ、コウゾ、カジノキなどである。



## 19. 若松・神部・檜ノ口・土井ノ浦



図 19-1 龍観山駐車場より展望 若松瀬戸・若松大橋



図 19-2 若松港と福江港を結ぶフェリー



図 19-3 若松島神部港 背後の森には野鳥のさえずり  
鳴きが盛ん 3月～6月の季節が良い。



図 19-4 神部漁港 えび屋裏山 2011.5.25  
春と秋にはツグミ類が飛来、秋と春には上空をツル  
が渡る

### 景 観

若松島の玄関口である若松大橋、若松瀬戸の北方に位置する約130mの龍観山からの眺望は絶景である(図19-1)。

北方からヤク丸島・コデ島、大橋の南方の瀬戸には下中島・野島・カズラ島・野島の属島で小さな上クソ・下クソなどが点在する。

小さな入江と絶壁もおおく多様な環境を形成している。

若松港や土井ノ浦港は旅客船の寄港地で、五島列島の福江港を結んでいる。



図 19-5 博多港・福江港の連絡船、若松大橋下を通過

若松大橋の下、海上を北上するフェリーで、福江港 - 青方港 - 博多港などに通じる航路、乗船の際には詳細は野母商船の寄港地を調査し利用するとよい。

### 見どころ

・龍観山からの展望：龍観山(138m)から若松瀬戸など南方向の眺望は絶景である。

眼下に若松大橋、若松港の入り江、無人島の下中島、野島、荒島、桐ノ小島、カズラ島およびその属島、海岸線の断崖絶壁が荒々しい景観を醸し出している(図19-3)。

島々はツブラジイ、タブノキなど常緑広葉樹が生え照葉樹林の特色を呈しキラキラ輝いている。

紺碧をした海面と島の緑のコントラストが際立って見える。

この駐車場までの道路は狭く曲がりくねっている。

・心身を癒すバードコース：特に春～初夏の期間は、混声は種類もおおく、早朝からバードコースが楽しみである(図19-4)。

登場するのは、イソヒヨドリ、カラスバト、トビ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒヨドリ、メジロ、カワラヒワ、スズメ、コジュケイなどの留鳥。

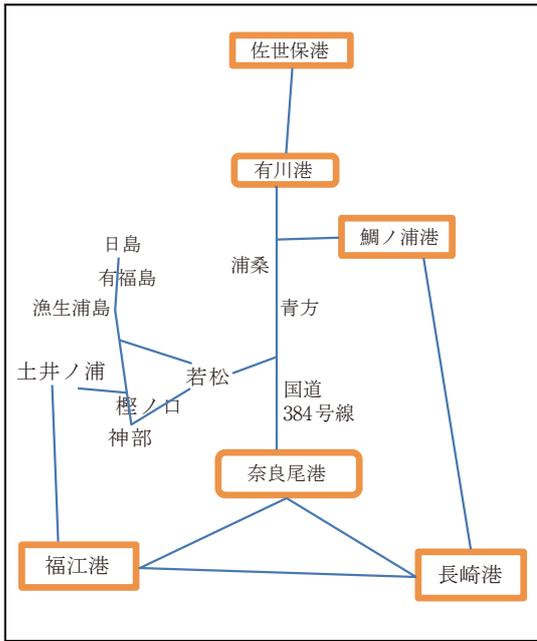


図19-6 コースガイド

### インフォメーション 交通

- ① 有川港から国道384号線を走行し、青方・荒川を通過後、県道46号線に入る。若松大橋を通過後、県道169号線を右折すると若松がある。右折せず左折すると道なりに神部、樫ノ口があり、樫ノ口通過後の峠を左折すると土井ノ浦がある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し、①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線をしばらく走行し、県道46号線に入る。若松大橋を通過後、県道169号線を右折すると若松がある。右折せず、左折すると道なりに神部、樫ノ口があり、樫ノ口通過後の峠を左折すると土井ノ浦がある。

### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

### 施設

- トイレ：若松、土井ノ浦にある。
- 駐車場：若松、土井ノ浦にある。
- 宿泊：旅館、民宿あり。

### 続 見どころ

キュウシュウキジ、旅館の前の海上ではアオサギ、ゴイサギなどの留鳥が鳴く(図19-7、19-8)。

極めて珍しいのは渡り鳥のヤイロチョウ、アカショウビンなどの鳴き声が、入り江を隔て、三角形の山、九郎右エ門山の谷間から特徴ある声が響いてくる。

ベッドの上で聞ける贅沢なバードウォッチングだ。こんな立地条件は全国広いなかでも珍しい。

旅館えび屋の背後の山林には、鳥類が好む果実をつけるミズバイ、カゴノキ、クスノキ、低木のセンリョウなどが生えている。

ツグミ類のクロツグミ、アカハラ、シロハラ、マミチャジナイ、ツグミ、シロハラが飛来しミズバイの果実を採食、トラツグミは地上に落ちた果実を啄む。

秋にはハチクマ、アカハラダカが神部集落の周辺の森林から飛び立つことがある。



図19-7 キュウシュウキジ♂成鳥 2011.6.11 浦内



図19-8 キュウシュウキジ♀成鳥 2011.6.11 浦内



図 19-9 ホルトノキの樹冠 2011.4.1



図 19-10 老松神社山道のホルトノキ大木



図 19-11 オントツジ 2011.4.25 若松島



図 19-12 海岸植物ハマジンチョウ メジロ、ヒヨドリが吸蜜に飛来 2011.4.11 白浜海岸。12月から開花

・老松神社参道の並木：常緑高木のホルトノキが山道をおおっている（図 19-9、19-10）。

大木を通して天から神が下り臨座すると想像され、神木として保護・保全される。

この神社の参道には、片側一列に植えられ大切に保護保全されている。

常緑樹であるが葉は赤く色づくものがあり、緑の中に赤い葉は目立つ。果実はカラスバトの食物となる。

若松島の西神ノ浦集落にも、立派なホルトノキの大木が神木として保護されている。

ホルトノキは、ホルトノキ科ホルトノキ属で、仲間にシマホルトノキ、コバンモチなどが知られ、いずれも暖地性の植物である。

ホルトノキの分布は本州の千葉県以西、四国九州、沖縄、台湾、中国に生育することが知られている（林弥栄・他 2003）。

また、木の名前は、岡部誠（2003）によると、その由来は、江戸時代にオリーブの木と混同、オランダノキと呼ばれ、それが転訛したものと掲載されている。

公園や庭園に植栽されている。近年は街路樹としても利用されている。

緑の葉のなかに、常緑樹であるが落葉の前に葉が赤くなる。そのちらほら紅葉が美しい。

・春の山野を飾るツツジ類：ブルーの海・緑の山野とのコントラストが、風景を引き立て役になって美しい（図 19-11）。

オントツジは、ツツジ科ツツジ属、本州の近畿以西、四国、九州、韓国の済州島に分布することが知られている。山一面に赤く飾りたい。

3～4月に全島の各地に開花する美しい花木である。

・亜熱帯の海岸に生えるハマジンチョウ：旧若松町地区の海岸に自生する植物、海水につかるような環境に生育する塩生植物である。

ハマジンチョウ：ハマジンチョウ科ハマジンチョウ属で、コハマジンチョウなどが知られている。

後種は小笠原、マリアナ諸島に分布するが、本種は、本州の三重県以西、九州西岸、沖縄、台湾、中国、インドシナに分布することが知られている（図 19-12）。

花期は12～4月で、花が少ない時期から開花し吸蜜性のメジロ・ヒヨドリなどが吸蜜に訪れる（口絵）。



図 19-13 野鳥観察小屋 2006.3.23 神部えび屋裏山



図 19-17 若松港左岸にそびえる一本松 (クロマツ大木) 港のシンボルとして親しまれている大木



図 19-14 カラスバト臆病な性質で藪に潜む 2006.3.23 神部えび屋の裏山

・カラスバトの生息地：神部の「えび屋」の裏山で鳴くカラスバト、図 19-14 のように潜んでいることがおおいが、時にはスギの梢に止まり、鳴くこともある。

鳴き声は牛の鳴き声に似ており、ウシバトという俗名もあるほどだ (図 19-14)。

この地区でも各集落で、鳴き声は聞くことができる。前述したとおり国指定天然記念物。



図 19-15 ミミズバイの果実 カラスバト、ツグミ類が好んで採食 2006.3.23 神部えび屋裏山

・若松港の一本松：若松港口の左岸に目立つ一本のクロマツの大木があり、港のシンボルとなっている (図 19-17)。

島内に生育するにはクロマツが普通で、稀にアカマツを見ることがある。

・ツグミ類の渡りルート：えび屋の裏山はツグミ類の渡りルートである。

彼らが好むミミズバイ、センリョウ、センダンなどの果実が証拠である。移動の道中に果実を採食し、また種子散布をしてくれる。

カゴノキの果実は7～8月にカラスバトの食物となる (図 19-18)。



図 19-16 野鳥への給水 2002.1.1 神部 えび屋裏山



図 19-18 カゴノキ大木 神部 えび屋裏山



## 20. 天神山・漁生浦島・有福島・日島



図20-1 ハマジンチョウ群落 2006.7.28 日島



図20-2 海浜植物ハマジンチョウの花 2012.12.00



図20-3 日島の大イチョウ 2010.12.7



図20-4 越冬カモメ類(ウミネコ・セグロカモメ) 2012.12

### 景観

若松島の北西に浮かぶ島が手前から漁生浦島、その属島の小さな小島が天神山、ここは原生林で植物の種数もおおくアコウ、イヌマキなどの大木や五島列島でも若松島西海岸に自生するモクタチバナの大木もみられる。

道路は若松島から漁生浦島さらに有福島、日島につながっている。有福島には亜熱帯系のアコウの大木、神社への山道周辺にはモクタチバナが生育している。

日島は若松島→漁生浦島→有福島→日島と行きどまりの島である。

日島の入り口の古墳墓地の背後の傾斜地にはセンダンが群落を形成し墓地の海岸側には海浜植物のハマゴウ群落がみられ夏期には深紫色の唇形花を短穂状につけ、球形果を結ぶ。

果実は生薬の蔓荊子で強壮、清涼剤として知られている。葉には独特の香りがあり脳裏に残る香りだ。暖地性の海辺砂地に群生する種類である。

古墳墓地の東側の砂礫海岸には、亜熱帯の海岸に自生するハマジンチョウ科のハマジンチョウ群落が帯状に分布する(図20-1、20-2)。

### 見どころ

・珍しいハマジンチョウ群落：有福島を通り日島の入口に南に突出した岬があり、その入江がハマジンチョウ群落の自生地(図20-1、20-2)。

この種については、前述した。ここでは省略する。

・日島の大イチョウ：イチョウ科イチョウ属、イチョウの巨木は日本各地におおい。日本一は青森県深浦町の「北金ヶ沢のイチョウ」で樹高40m、幹回り20m、樹齢1000年である(図20-3)。

このイチョウは島一位の巨木であろう。近くにはムクロジの大木も見られる。

・カモメ類の越冬地：この地域は漁港がある地域で、カモメ類が食物とする魚類が水揚げされる場所であり、そのような立地条件でカモメ類が越冬する(図20-4)。

ウミネコ、セグロカモメなどの個体数が多く他にオオセグロカモメ、シロカモメ、カモメなどが少数みられる。

アオサギ、ダイサギ、コサギの筏で休息していることがある。

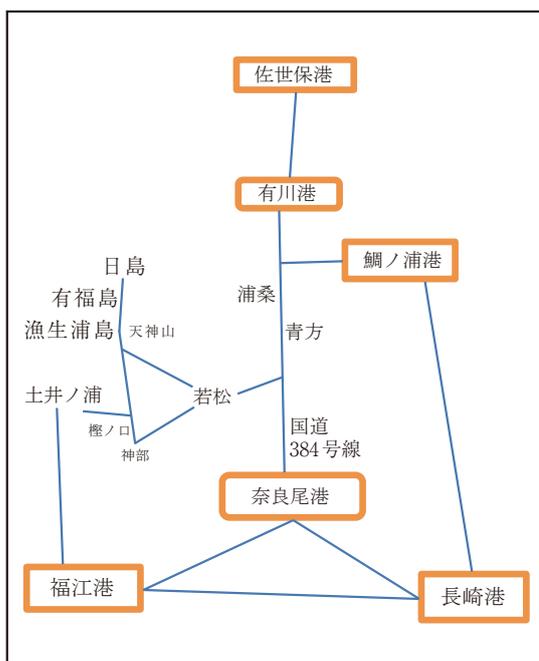


図20-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

① 有川港から国道384号線を走行し、青方・荒川を通過し、県道46号線に入る。若松大橋を通過後、県道169号線を右折し、若松の信号を左折する。しばらく走行し、若松峠トンネルを通過後、若松運動公園を右折し、海岸線沿いに進むと漁生浦島、有福島、日島がある。天神山は漁生浦島の右手に浮かぶ小島である。

② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し、①と同じコースで走行する。

③ 奈良尾港から国道384号線をしばらく走行し、県道46号線に入る。若松大橋を通過後、県道169号線を右折し、若松の信号を左折する。しばらく走行し、若松峠トンネルを通過後、若松運動公園を右折し、海岸線沿いに進むと漁生浦島、有福島日島がある。天神山は漁生浦島の右手に浮かぶ小島である。

#### レンタカー 市外局番：0959

有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042

奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364

トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100

トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200

シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

トイレ：日島にある。

駐車場：日島にある。

宿泊：なし

#### 続 見どころ

・ツグミ類の渡り：前述したとおり、若松島と同じように、ヒタキ科トラツグミ属マミジロ、トラツグミ、ツグミ属カラアカハラ、クロツグミ、マミチャジナイ、シロハラ、アカハラ、ツグミ、ノゴマ属コマドリ、ノゴマ、ルリビタキ属ルリビタキ、ジョウビタキ属ジョウビタキ、イソヒヨドリ属イソヒヨドリなどを確認できる(図20-6)。

しかし、いずれも小さい島であり長期間とどまる個体群はシロハラで、他は短期間で移動する。

イソヒヨドリは留鳥で繁殖時期には、頭部から背、尾の上までの上面、喉から胸まで青色をした雄成鳥が美しい声で、波の音よりも高らかに響く、すんだ鳴き声をとどろかしている。

・カラスバトの鳴き声が響く：カラスバトも鳴き存在を主張しているかのようなようである(図20-7)。



図20-6 シロハラ 鴨川誠著「長崎県の鳥」1983



図20-7 カラスバト



図20-8 ハシボソガラス 2012.11.27 漁生浦島

・カラス類の天下：カラス類にはハシボソガラス、ハシブトガラスの2種が留鳥として、漁港におおく生息する。

晩秋から初冬にかけて、ミヤマガラスの集団が飛来するが、島への滞在は短期間である。

冬鳥として西日本一帯に飛来し広い農耕地、水田で数百個体の大集団で越冬する。

この群に珍しい小形のコクマルガラスが数個体まじっていることがある。鳴き声は猫に似ている。

留鳥のハシボソガラス、ハシブトガラスは町内全域に生息しいろいろな生活行動をみせてくれる。

このカラス類は、他の鳥類より能力が高く、本能行動のみならず、学習行動、知能行動までも司る。

例えば軍手を開きその中に穀類を貯える貯食行動など知られている。

・海岸植物ハマゴウ：クマツヅラ科ハマゴウ属で各地の海岸の砂地、礫地などに自生するが、ここでは保護、保全された群落であろう。

花期は7～9月で、枝先に青紫色の円錐花序の花を多数つける（図20-9）。

葉は楕円形～倒卵状形で縁は全縁、裏面は白色、軟毛を密生している。近寄ると独特の香気がたどよう。

線香、灰汁は染料、実は薬用になることが知られている。

・小鳥が好むムラサキシキブの果実：クマツヅラ科ムラサキシキブ属オオムラサキシキブ、町内にはムラサキシキブ、オオムラサキシキブ、コムラサキシキブの3種が自生する（図20-10）。

オオムラサキシキブは海岸近くに生えるが少ない。

小鳥類、特にメジロが好む、カワラヒワ、シロハラ、ツグミ、ヒヨドリ、イソヒヨドリなどが果実を採食する。

・アブラギリの白い花：本種は中国原産の落葉高木であるが、植えられたものが野生化して交通のおおい集落周辺に自生している。

5～6月に白い花が咲く、花は人の目をひくほど目立つ。島を訪れた観光客に名前を問われることがある（図20-11）。

ハシブトガラス、ハシボソガラスは果実を啄むが他の鳥類の採食は確認できてない。



図20-9 海浜植物ハマゴウ 2006.7.28 日島



図20-10 ムラサキシキブ 2012.11.27 若松島



図20-11 アブラギリ 2005.5.27



21. ウノクソ瀬・相ノ島・瀬戸脇・堤・滝河原・石司



図 21-1 天神山(手前の小島) 漁生浦島、相ノ島 2005.5.25



図 21-2 堤のリュウキュウマメガキの大木 2006.7.28



図 21-3 モクタチバナの果実 2012.7.2 滝河原



図 21-4 モクタチバナの果実 2007.2.24

景観

若松島の西方地域で相ノ島は無人島、ウノクソ瀬はその東に位置しウミウが休息する瀬で、昔から生息していたようだ。周辺で繁殖の可能性はある。

瀬戸脇付近から断崖絶壁な地形で、海岸線は険しい。堤へ通じる古い車道は狭く約100mの高い位置を走る道路であり夕陽の眺望は絶景である。常緑広葉樹の萌芽林でシイ類、ヤブニッケイ、シロダモ、タブノキ、クスノキ、クロキなどからなる自然林である。

小さな果実をつけるリュウキュウマメガキの自生が多い地域でもある(図 21-2)。

堤と滝河原の間に断崖の南風泊が突出し、すばらしい景観である。滝河原の入江は荒波に洗われ美しい礫浜を形成している。

車道沿いには珍しいモクタチバナが多い地域でもある。この種子は渡り鳥が好んで採食し種子分散に鳥類が関与していることが明らかであり、東西型の渡りをする個体群が種子運搬をしていることを教えてくれる。つまり、新上五島町の西端、この地域と東端は頭ヶ島に多く生育分布している証拠である(図 21-3、21-4)。



図 21-5 モクタチバナの蕾

見どころ

・天神山原生林：天神山は漁生浦の南の沖に位置する無人島でアコウ、イヌマキ、ホルトノキなどの大木が高木層を形成している。

モクタチバナの大きい樹木が倒れ横たわって生育している珍しい光景に出会う(図 21-4)。

地元の人によると、この「小さな島には、若松島に生育する木と同じものが全てある」という証言を得た。急傾斜を登り調査を実施した。

その結果、次のような記録を得た。

高木層：アコウ、マキ、ツブラジイ、ヤマハゼ、ヤマザクラなど。マキの自生など鳥類による種子散布が推測される。

亜高木層：モクタチバナ、ヤブニッケイ、クロキなど。モクタチバナは最大クラスだ。

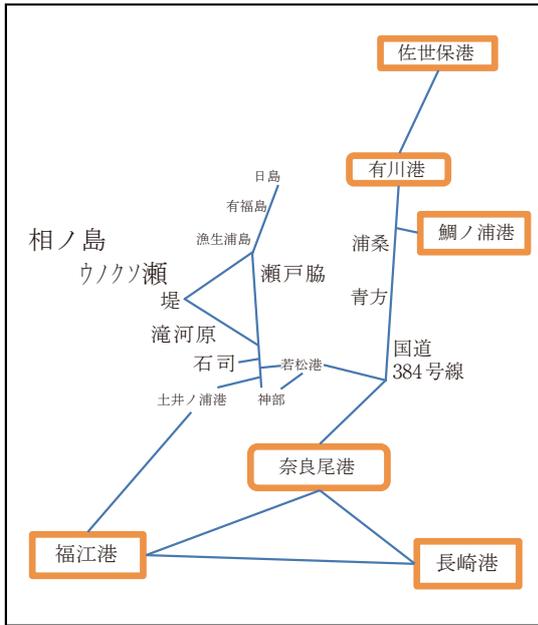


図21-6 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

① 有川港から国道384号線を走行し、青方・荒川を通過、県道46号線に入る。若松大橋を通過後、県道169号線を左折。しばらく走行し土井ノ浦を通過、若松運動公園前を左折し、しばらく走行すると石司入口がある。石司へ入らずそのまま通過し、しばらく走行すると滝河原入口がある。道なりに走行すると滝河原、堤、瀬戸脇がある。相ノ島、ウノクソ瀬は漁生浦島の左手に浮かぶ島と瀬である。

② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し、①と同じコースで走行する。

③ 奈良尾港から国道384号線をしばらく走行し、県道46号線に入る。若松大橋を通過後、県道169号線を左折。しばらく走行し土井ノ浦を通過若松運動公園前を左折し、しばらく走行すると石司入口がある。石司へ入らずそのまま通過し、しばらく走行すると滝河原入口がある。道なりに走行すると滝河原、堤、瀬戸脇がある。相ノ島、ウノクソ瀬は漁生浦島の左手に浮かぶ島と瀬である。



図21-7 チュウサギ 2006.5.12 滝河原



図21-8 アマサギ 2006.5.12 滝河原



図21-9 コサギ 2006.5.12 滝河原

#### レンタカー 市外局番：0959

有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042

奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364

トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100

トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200

シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

トイレ：海水浴シーズンのみ堤にある。

駐車場：堤にある。

宿泊：なし

#### 見どころ

・ヤイロチョウの飛来地：この地域は町内では西端であり、東西型の渡りをする各個体群にとっては、最初のとどり着く地であり、また最終の地でもある。

前述の日島、有福島、漁生浦島などとともに渡り鳥は短時間の滞在である。

漁生浦島の橋の付近から瀬戸脇・堤集落への旧道は、通る自動車も人も極めて少なくバードウォッチングコースとしておすすめのルートである。

さらに、滝河原、滝ヶ原の湿地の観察ができる。ここにはダイサギ、アオサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギなどサギ類やカルガモなどカモ類も飛来する(図21-8、21-9)。



図 21-10 ウノクソ瀬のウミウ 2008.7.30



図 21-14 ウノクソ瀬のウミウ 2008.7.30



図 21-11 地上の樹木の根元で採食中のカラスバト



図 21-12 カラスバトの好物 クサギの果実 堤  
2008.11.21



図 21-13 東シナ海に沈む夕陽 手前にウミウ休息地  
2009.6.16 相ノ島とウノクソ瀬

・ウノクソ瀬で休息するウミウ：100年以前から鵜の鳥が休む瀬であったと地元の漁師さんは語ってくれた(図 21-13、21-14)。

筆者が知ってからだって、半世紀以上だ。この瀬を休息地にしているのは「ウミウ」である。全長84cm、翼開長133cmで、カワウよりやや大きい。ウミウは留鳥として周年、この岩礁で確認できる。周辺で繁殖の可能性がある。

五島列島の宇久島周辺で繁殖していることが知られている。入江や湾内でも採食活動が見られ、大海での採食行動も観察できる。

・地上で採食中のカラスバト：地上に降りて採食する行動を観察するチャンスは少ない。ガードレール下で昆虫類やミズなど環形動物などを採食中であった(図 21-11)。

樹木の果実がおおい時期には、クサギの果実も採食するが、落葉亜高木であるクサギが3～4月に新芽を出すころには、新芽、葉も啄ばむ。若葉などを啄ばむ樹種は、このほかカラスザンショウ、ヤマグワ、センダンなどである。落葉広葉樹の新芽や若葉が食草で常緑広葉樹の新芽の観察例はない。

・西方にかかる黄金の橋：日本列島の西端に位置する五島列島、新上五島は日没時刻は東京より遅い。

東シナ海に太陽が沈む光景は実に素晴らしい。一本の黄金の橋に思える。刻一刻と夕映の情景、一本の帯の色は変化する。

筆者が撮った場所は若松島の瀬戸脇から堤へ通じる旧道である。

日暮れ時には、ねぐらに帰る鳥、採食地に向かう鳥の群れ、夜行性の鳥類の移動は、この時刻である。その時刻は季節により異なる。

また、太陽が沈む位置も季節により移動し変化し、日没へのきたいはふくらむ(図 21-13)。

野鳥たちの鳴き声も哀愁を帯びた音色として筆者の耳はキャッチする。



図 21-15 カルガモ 鴨川誠著『長崎県の鳥』1983

・泳ぐ鳥の基本種としてのカルガモ：長崎県、新上五島では一年中みられる大形のカモ類。全長61cmで、マガモよりやや大形。腰の部分に白い三日月模様がある（図21-15）。

鳴き声：グェ・グェと大声で騒ぎたてたような声で鳴く。鳴き声も基本に覚えるとよい。

身近、見る頻度も高い種を識別の基本種として完全に覚えておくと、他の種を見たときは、識別点が明確になる。

長崎県内各地で繁殖しているが新上五島でも繁殖が確認されている。

筆者が本種の繁殖を確認したのは、1963年壱岐市芦辺町であるがそれ以後県内の各地、対馬、平戸、松浦、佐世保、波佐見、川棚、東彼杵、大村、諫早、西海、島原半島、西彼杵半島、五島列島などでも記録した。

・鳥ではカワセミは海辺で：河川が少ない島では、生息地が小さな河川の河口から海辺に生息行動範囲を広げている。つまり「うみせみ」とでも呼びたくなる。



図 21-16 カワセミ 鴨川誠著『長崎県の鳥』1983

淡水魚だけでなく、海水魚も食物とし採食活動をしている（図21-16）。

しかし、生息数は少なく出現する頻度は低い。

新上五島町内各地の河口周辺、浅瀬などを中心に探索すると出会うことがある。

たとえば、若松島、中通島の西岸、東岸の江ノ浜、太田などの入江などで極めてまれに出現することがある。

・カラス類が好むカラスウリ：ウリ科カラスウリ属で、多年草つる性である。本種と果実が球形で熟す黄色の「キカラスウリ」とがあり、カラスウリは林縁などに生育する（図21-17）。



図 21-17 ハシブトガラスの好物 カラスウリの果実

雌雄異株、花期は8～9月、夏の夜に、約10cmのレース飾り状の美しい花を開く。朝にはしぼんでいる。

美しい花を見たいときは、夜間の観察でなければ楽しむことはできない。

カラス類が好む果実が熟するのは、10～11月である。

・ノアザミの白化個体：キク科アザミ属、新上五島に普通に見られるが、その中に稀に白化個体つまり、白色化が観察できることがある。



図 21-18 シロバナアザミ 2005.5.27 若松島の石司

この写真は若松島の石司集落で記録したがその後は確認できてない（図21-18）。

種子は、カワラヒワが好んで採食する。スズメマヒワもノアザミの熟した種子を採食する。

・石司集落の湿地には、マナヅルが渡りの道中休息する。ヒクイナの繁殖も確認されている。



## 22. 須崎・遠見番岳・福見・福見鼻



図22-1 須崎の夜明け 2005.5.27 旧奈良尾町須崎  
早朝からカラスバトが盛んに鳴く



図22-2 イソヒヨドリみ成鳥 鴨川誠著『長崎県の鳥』1983



図22-3 カラスバト 2005.4.25 須崎



図22-4 ヤブツバの果実 2003.12.23

### 景観

福見峠から東へ走ると遠見番岳(308m)があり、火打ち山とその中腹を下ると小さな入江の港、須崎の小集落がある。この港から眺める御来光を拝むのも趣がある。

須崎の集落に佇んでいると、波の音に混じって背後からはカラスバトの鳴き声がある。

カラスバトだという事実が明らかになるまでは集落の奥地のダムでは、その鳴き声に怯えていた。しかし判明後は鳴き声を愉しむ人が現れた。鳴き声の正体を明らかにしたのは筆者で、近年は散策する人も増えてきた。

須崎漁港から時計回りに帆上鼻、福見鼻、さらに福見の防波堤まで海岸線は断崖絶壁である。遠見番岳から南東方向に連なる三盛山(302m)が奈良尾港から見ると際立って目立つ断崖だ。

朝陽が顔をだす前から待ちわびるのも感動する(図22-1)。

晩春から初夏には薄明の時刻から野鳥のさえずり鳴きがはじまる。ハシブトガラスかハシボソガラスが一番鳥だ。

早起きをしたカラスは、朝告げ鳥だ。ほかの小鳥たちを起こして飛び交様にさえ感じる。イソヒヨドリの雄は名歌手だ。さえずり鳴きが極めて美しい(図22-2)。

港の右岸に浮かんで見える瀬は、カメが甲羅を浮かべ、泳いでいるように連想される。

筆者はこの瀬を亀瀬と命名した。

### 見どころ

・新鮮な新潮の香りと御来光：朝風に香る新鮮な空気が頬をなでる。爽やかな朝である。

照葉樹林の葉が発するフィトンチッドと潮風との混合気体がおしく感じる朝である。

谷間の奥地にあるダム付近から「ウウウウウ」と異様な音色がある。地元の人達はこの音色に恐れていた。化けものだという。

ところが筆者が調査を開始して以来、平和のシンボルの鳩だと明らかになり親しみを感じるように人の態度は変遷した。

この音色の主は国指定天然記念物である「カラスバト」だったのだ(図22-3)。

旧奈良尾町内の13地点で、終日・同時刻に生息調査を実施した結果、須崎集落での生息個体数が最も多かった。

この集落では人家のすぐ傍にあるヤブツバキなどの樹木にとまるほど警戒心は薄れている。

しかし、他の鳥類のように長距離の移動は少ない。

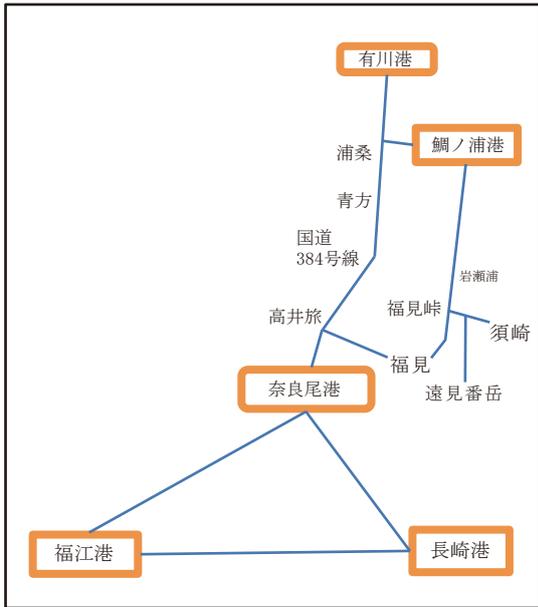


図22-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線を走行し、青方・荒川・白魚を通過、高井旅から県道22号線に入る。道なりに進み、右折すると福見がある。県道22号線をそのまま走行し、福見峠で右折し、そのまま進むと須崎がある。須崎へ行く途中に遠見番岳への登山口がある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し、①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線を走行、高井旅から県道22号線に入る。道なりに進み、右折すると福見がある。県道22号線をそのまま走行し、福見峠で右折、そのまま進むと須崎がある。須崎へ行く途中に遠見番岳への登山口がある。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：なし
- 駐車場：なし
- 宿泊：なし

#### 続 見どころ

カラスバトに関する記事のつづき。

木から飛び立つときの羽音、他種ではみられないほどバタ、バタ・・・と騒々しく音を残して飛び立つ。本種の存在が確認できる。

注意深く彼らの行動を観察調査していると、鳴き声に差異があきらかになる。① 平常の位置表現、② 警戒の声、③ 飛び立つ直前の声、④ 呼び合う声などが行動と結びつく。

・ 兎の耳に似たシロダモの新芽：シロダモはクスノキ科の常緑高木で、10～11月には球形で赤い果実をつける。果実が黄色い種をキミノシロダモという。また、新芽が金色に光る個体をキンシヨクダモという。後の2種は、中通島に分布するが極めて少ない(図22-7)。

シロダモは各地に分布し亜高木層の一員であり、赤い果実を野鳥たちに提供する。

特にキジバト、ヒヨドリ、シロハラが、この果実を好んで採食する。キミノシロダモの果実もヒヨドリが食物とする。種子は糞に入ったまま排出され。森林生態系で種子分散に関与している。



図22-6 ヤマハゼの紅葉



図22-7 キンシヨクダモ 希少な樹木果実はカラスバト等が採食 2005.4.24 須崎

キンシヨクダモはクスノキ科シロダモと同属で常緑広葉樹の高木である。新芽が出る時葉の表面に金色の綿毛が一面に生じ金色の光沢がみられる(図22-7)。



図22-8 栽培ビワの果実 カラスバトが採食  
2005.5.24



図22-9 オオバライチゴ果実 カラスバト、ヒヨドリ、  
メジロが採食



図22-10 アケビの果実 陸鳥類が採食 2006.10.4



図22-11 長崎県離島地域に分布するダンギク種子はホオジロ、  
カワラヒワ、カシラダカなど小鳥が採食2005.10.27 福見

若松島の神部集落付近や滝河原などに自生する。貴重な植物であり、地域のシンボルとして保護・保全すべきである。遺伝子を保存すべきだ。

近年は園芸種もあるが交雑は避け種の保存が大切である。

・カラスバトの好物：カラスバトは植物の果実種子、花芽、新芽などを採食するほか、地中のミズ類や昆虫類を食物とするが、栽培植物の果実も採食する(図22-8)。

しかし、図22-9と同じ場所にあるとき、イチゴの方を先に採食した。イチゴの果実が採りやすいのだろう。それとも果実の味が決めてだろうか。対馬の南部、神崎ではクサイチゴが熟すころ採食する姿を観察した。

・オオバライチゴの果実：モミジイチゴ、ナガバモミジイチゴ、ホウロクイチゴ、クサイチゴ、オオバライチゴ、ナワシロイチゴなどが分布するバラ科の植物である(図22-9)。

キイチゴ属の果実を採食する鳥類、カラスバト、ヒヨドリ、メジロ、カワラヒワ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、アオバトなどが熟した果実を好んで啄ばむ(図22-9)。

人も生食できるイチゴもある。

・アケビ科の果実：アケビ、ミツバアケビ、ムベは、いずれも常緑つる性で、大きな果実をつけ成熟すると人が食べても甘く感じる(図22-10)。

その熟するのを最も待っているのは、ハシブトガラス、ハシボソガラスであろう。アケビ類の果実が開いたものはメジロ、ヒヨドリも採食するが採食しているのがカラス類にみつかると、追いはらわれている行動に接することがある。

ムベの果実は約10cmの楕円形である、暗紫色に熟したものを選び、くちばしで上手に穴を開け果肉のみを食物とし殻は放置する。

種子は無傷のまま糞に混じって排出されている。くわえて運んで他の場所で食べる習性があり、種子分散には好都合で、ムベはカラス類により分布を拡大している。

キュウシュウキジもムベを採食している行動を観察した。

アケビ科の果実は哺乳類のテンも好物らしく採食行動を観察する機会もある。

・福見の県道の法面を飾るダンギク：名前はキクでもキク科ではなく、クマツヅラ科の常緑小低木で30～60cmの草丈になる。

長崎県では、対馬、平戸、五島列島の日当たりのよい草地、岩場などに生育する。九州西部に自生する植物で生育地は少ない。

種子をホオジロ、カワラヒワ、カシラダカが採食する。

近年は法面に植栽されている(図22-11)。



## 23. 白魚・築地・深浦・横瀬・古里・桐・カズラ島

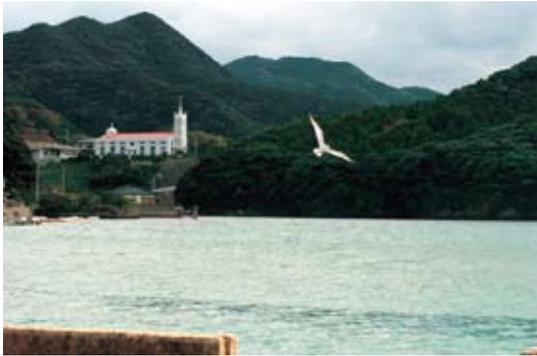


図23-1 桐古里郷 セグロカモメと桐教会  
2008.1.19



図23-2 ゴイサギ 鴨川誠著『長崎県の鳥』1983



図23-3 セグロカモメ 2008.11.19



図23-4 カズラ島カラスバトなど野鳥が生息  
ハマジンチョウなど海浜植物が豊富

海岸線が長汀曲浦に富んだ複雑な地形からなり、築地ヶ嶽・扇山(329m)が南北に連なっており、その西側がこの地域である。

若松瀬戸の入江が深く細く入込み、正に長い入江が続き変化に富んでいる(図23-1)。

無人島の荒島と中通島の間小さい瀬戸の海面は透明で魚類、小魚の行動、海の生物の観察も楽しめる。

無人島の植生は、主にツブラジイを優占種とした群落であるが萌芽林である。

古里の集落の人家の庭の石垣の隙間に、オオタニワタリが生育している場所があり、温暖な環境であることをあらわしている。

しばらく南下すると桐ノ小島があり、ここは数軒の民家があり5～6月にはツバメが上空で、採食行動、電線で休息している状況を見る。

また、夜間の行動がおおいゴイサギが海面近くに泳ぐ魚類を狙って海岸林や海辺の汀線でたたく姿を観察できることもある(図23-2)。

さらに南下すると男鹿島があ、荷内島、釜蓋瀬があり、その岩礁にクロサギが採食に飛来していることがある。

さらに若松瀬戸の南にカズラ島があり、この地域は無人島がおおい。したがって、環境は多様化している。

この地域の山林には、常緑高木のナギが自生している。紀伊半島や山口県、四国、九州、沖縄、台湾などに分布する。しかし、長崎県内では、筆者が知るかぎり、平戸島の志々伎山の南側に数本が自生しているほどである。

築地の集落では、付近の山林から小さい苗を採取し庭木として利用している。

### 見どころ

・カモメ類を横瀬・古里の入江で観察：この入江は背景が自然林と教会であり、楽しい写真撮影もできる(図23-1, 図23-3)。

カモメの種類はセグロカモメ、ウミネコ、オオセグロカモメ、まれにシロカモメなどが海面上や無人島の自然林の上空を舞う。

・海浜植物および磯の生物の観察地：若松瀬戸の南部に位置する「カズラ島」、砂浜や礫浜、岩浜などあり変化に富んだ多様な環境を呈している。

亜熱帯系のハマジンチョウ、ハマオモトなどが自生している。島に行くには渡し船が必要である。カラスバトの鳴き声、姿もある。

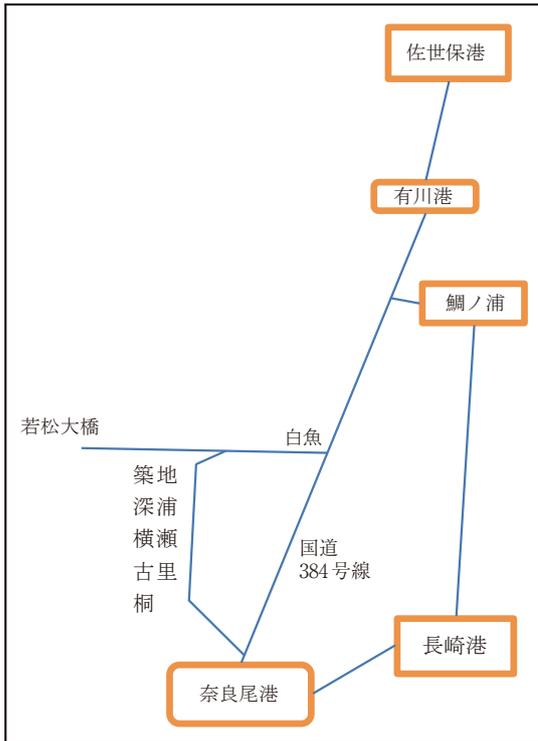


図23-5 コースガイド

インフォメーション

交通

- ① 有川港から国道384号線を走行し青方・荒川を通過、県道46号線に入る。そのまま進み、桐入口バス停から左折し走行すると道なりにある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し、①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線を少し走行し、仁田山三差路を左折して走行すると道なりにある。

レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

施設

- トイレ：なし
- 駐車場：なし
- 宿泊：なし

続 見どころ

・ヤイロチョウの活動の場：新上五島、本種は局地的でなく、島々の全域が渡りの目標になっているらしく、各地で生息の確認ができる。

たとえば、築地(ちじ)という集落の谷沿いに小川があり、谷沿いを東へ林内を移動する様子を鳴き声から推測できる。

東シナ海の上空を渡り漁生浦、若松島などに夜間にたどり着いた個体は、さらに本地域に移動し東に向かう行動があるようだ。

メジロ、ヒヨドリ、シジュウカラ、カワラヒワなども確認できる(図23-6)。

・カラスバトの生息地：カラスバトは白魚、白魚河原、築地、深浦、横瀬、古里、桐などの集落、周辺、特徴ある鳴き声を聞くことがある。

カラスバト全長40cmで、キジバト全長33cmよりやや太めである。

公園や仏閣に生息する外来種のカワラバト全長33cmであり、これよりも大きい。

鳴き声：一般にはウッー ウッーと低い声太い声で鳴き、深い山、奥山、この鳴き声を聞いた人は薄気味悪く思っていた。

ところが、筆者が調査した結果、本種だと説明し明らかになってから関心度は変化した。

・新上五島に自生するカエデ：枝先がキュウリのように緑色のウリハダカエデは、本町に自生する紅葉するカエデ属である(図23-8)。



図23-6 渡ってきたヒヨドリ 2012.11.23 西海市で栄喜公陽 写



図23-7 クチナシの果実 2003.12.17



図23-8 ウリハダカエデの種子



図23-9 低木の代表アオキ 2003.11.25

落葉高木で5月ごろ総状花序をつけ、開花後に翼果をつける。

雌雄異株で、したがって雌木に翼果はつき秋には風により種子散布がなされる。

また、カラヒワが種子を採食するが他の種類の観察はしてない。

・常緑低木の代表種：アオキ常緑低木で森林の低木層を形成する。たとえスギ植林地でもスギの間伐など管理がよければ低木のアオキが自生し森林の階層構造はよくなり、光合成をする葉面積も広くなり二酸化炭素の吸収も増し地球温暖化の抑制にも貢献するであろう。

紅い実は熟した果実、ヒヨドリ、カラス類が採食する(図23-9)。



図23-10 キリの花 白魚

・高貴なキリ：古くから栽培される樹木で、娘の嫁入りタンスの建築、漁具を造る器具材などの目的で栽培される(図23-10)。

中通島や若松島の道路沿いで数本が栽培され5月には青紫色の筒状釣鐘形の花を開く、葉形は家紋やモチーフに使用されている。

翼のある小さな種子をつけるが鳥類が採食している行動は観察してない。

ゆえに、自然における種子散布がよくなく、自生のものが少ないのか観察したい。



図23-11 サルトリイバラ果実 野鳥の食物 2003.12.9 桐

・サルトリイバラは団子の葉：落葉つる性で実は熟すと赤く人目につきやすく採取する人がいる。ユリ科の植物で単子葉類に属する。

この葉を使って「だんご」を包むので団子の葉という俗称がついたのであろう。

筆者は平戸市出身である、平戸ではカカラ団子という。つまりカカラの葉である。

果実、種子はカラス、ヒヨドリ、シロハラなどが採食する(図23-11)。



図23-12 アキグミの果実 2003.10.10 桐町内各地に分布カラスバト、ヒヨドリ、メジロなどが好んで採食する。

・メジロが好むアキグミの果実：グミ科グミ属アキグミのほかにナワシログミ、マルバグミ、ツルグミなどが町内に分布する(図23-12)。

アキグミは落葉低木だが、他は常緑低木である。どの種類も果実をつける。ナワシログミは5月、古くは苗代の耕作時期に赤く熟し、アキグミは10～11月ごろ赤く熟し成熟した果実をメジロ、ヒヨドリ、ハシブトガラス、カラスバトなどは採食に飛来し木の実を挽ぎ取り食べる。

メジロはくちばしで啄ばむ、種子は糞の中に入れて排出されている。人も果実を生食できるが酸味がつよい。



## 24. 米山・虎星山・奈良尾



図 24-1 奈良尾港 長崎港との航路 発着所



図 24-2 ハクセキレイ 鴨川誠著『長崎県の鳥』1983



図 24-3 キセキレイ 鴨川誠著『長崎県の鳥』1983



図 24-4 野鳥が運ぶツルキキョウの種子  
2003.12.8 砥石山

### 景観

築地ヶ嶽、扇山 (329m) が連なり東西に屏風状に尾根を形成している。落ち込んだ入江が奈良尾港でありフェリーの発着所である (図 24-1)。

港の西側背後に米山 (234m)、虎星山、砥石山が南北に連なっている。米山の山頂には展望台があり360°を遠望できる。

眼下には奈良尾港、西側には昼ノ浦の入江、遠くに若松島の属島、無人島のカズラ島など若松瀬戸に点在する。素晴らしい光景である。

朝陽の御来光や夕陽を見送ることもでき、漁船の出船・入船の賑々しい光景を満喫できる。

青海原が金波銀波の織りなす光景の海面は錦絵のような光景で見事である。

奈良尾から北東方向には遠見番岳、三盛山、福見鼻などの断崖絶壁の険しい景観が目にとまる。

### 見どころ

・港および周辺で一時休息する渡り鳥：予想もしていないことが生じる事がある。

たとえば、小奈良尾の港に船体を引き揚げたコンクリート製の斜面があるが、その斜面には想定もしてなかったセイタカシギ科のセイタカシギ全長37cmの渡りの一群が休息のため飛来した。

同じようにアオアシシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、ホウロクシギ、チュウシヤクシギなどシギ類も飛来した事例がある。

また、セキレイ科のハクセキレイ全長21cm (図 24-2)、キセキレイ全長20cm (図 24-3) なども港やその周辺で観察できることがある。

このキセキレイは、山田宗陸『日本の神話』の筑紫の神話、初夜に登場する「むかしむかし、おらたちの祖先のさいしよの一組の男女の神様がいっしょになって、土地や子を生もうということになっただ・・神様の名は・・初男・初女というさ・・男と女が性器を合わせてさいしよの夫婦になったんだ・・合わせてもどしたらいいかわからず困った・・うまいことニワクナブリ (キセキレイ) がきただ・・こいつはニワかにクナ (尻尾) を振り振りするだべ。それをば見て二人の神さんはトツギ (交接) にさい、どう動いたらいいだか学んだだ・・」

・暖地の林内に稀なツルキキョウ：つる性多年草、キキョウ科の植物で長崎県の絶滅危惧種であり貴重種、旧奈良尾町の米山・虎星山・砥石山の連山の林道沿いで図 24-4 を一度記録したが、その後林道の除草で刈り取られ消失した。

新上五島町では絶滅か。

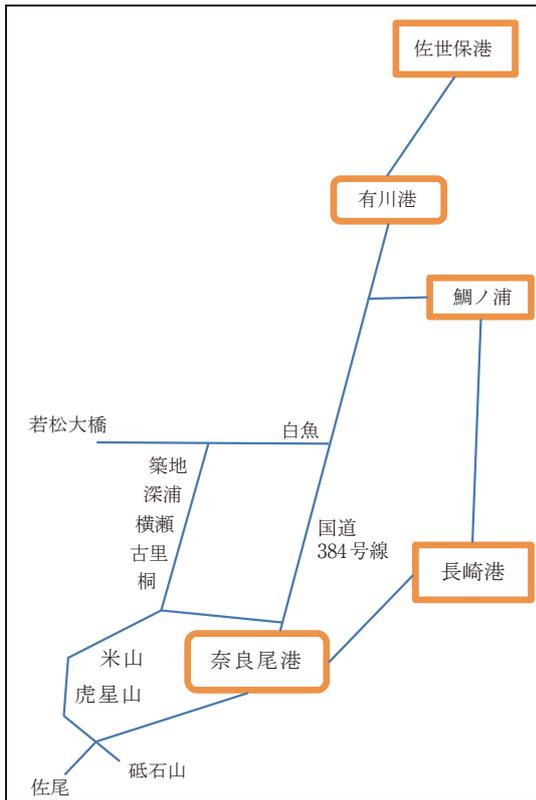


図24-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

- ① 有川港から国道384号線を走行し、青方・荒川・白魚を通過し、仁田山三差路を右折、最初の三差路を左折すると米山、虎星山への入口がある。
- ② 鯛ノ浦から有川方面国道384号線で左折し、①と同じコースで走行する。
- ③ 奈良尾港から国道384号線を少し走行し、仁田山三差路を左折し、最初の三差路を左折すると米山、虎星山への入口がある。

#### レンタカー 市外局番：0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：奈良尾、米山、虎星山にある。
- 駐車場：奈良尾、米山、虎星山にある。
- 宿泊：ホテル、旅館あり。
- 展望台：米山展望台あり。

#### 続 見どころ

- ・迷鳥：ハト科シラコバト：本種は日本では埼玉県、千葉県など関東に生息することが知られ長崎県での確認は考えていなかったが、2012年11月19日に、奈良尾の米山の西側を走る道路で採食中のシラコバトを発見し驚いた。
- ・美男蔓・サネカズラの果実：美男蔓は別名常緑つる性で雌雄異株である。まれに同株のこともある(図24-6)。

果実は南五味子という、五味子(チョウセンゴモシ)の代用、つまり漢方で滋養、強壮および鎮咳薬としている。

枝のなかに含まれている水溶液は粘性があり、頭髮の化粧品として昔は使用してきたという。

鳥類はハシブトガラス、ヒヨドリが採食している程度で、人気になさそうだ。

・秋には香り豊かなロード：島の晩秋は黄色花でいろどられる。その代表的な種がキク科のシマカンギクとツワブキが道路沿いや海岸近くに群生する。海岸の岩場にはホソバワダン、アゼトウナの花も黄色花で海辺を飾る。

筆者が「シマカンギクロード」と呼んで推奨している場所は米山の西側に下る細い道路だ。



図24-6 野鳥が運ぶサネカズラの種子 2003.11.2 砥石山



図24-7 島の秋を彩るシマカンギク 2003.11.25



図24-8 イヌビワの果実 カラスバト、メジロ、ヒヨドリ、カラス類が好んで採食 2004.9.20



図24-9 野鳥が運ぶネズミモチの種子 2003.11.2 砥石山



図24-10 ススキの種子はホオジロ類、カワラヒワが好んで採食する。 2003.11.2



図24-11 サクラ類の果実はカラスバト、ヒヨドリ、カラス類などが好んで採食する。

・ 多種の命が集うイヌビワの果のう：落葉低木のクワ科の植物で関東以西に分布する。

イチジク属で果のうもイチジクのような立派な実となり、この実にいろいろな昆虫や鳥類、テンなど哺乳類も採食する（図24-8）。

各地に分布し目立つが、雌雄異株で雄木は果のうはつかない。

黒紫に色づくとう人が生食できる。

・ ネズミの糞に似た果実：モクセイ科ネズミモチは常緑亜高木で林内に生育し、森林群落の低木層や亜高木層を形成する一員である。

果実は長楕円形で動物のネズミの糞に類似している（図24-9）。

10月ごろから果実は黒紫色に熟する。そのころ旅鳥や冬鳥が飛来し採食しエネルギー源としている。

また、留鳥のハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒヨドリ、メジロ、キジバト、カラスバトは好んで採食する。ツグミ類も好む。

公園、庭木に同じ仲間のトウネズミモチが植栽されているが、同じような果実がなる。

ネズミモチと同様に、ヒヨドリ、シロハラツグミなどが採食する。

・ ススキの穂先にとまるホオジロ：イネ科の多年草、植物群落の遷移で初期の段階から出現する先駆植物である。裸地、土手、荒地などにススキ群落を形成する。

秋に花穂が出るが、その時期は高緯度、高い山から出穂し低緯度、平地へと出穂する。

ススキの穂が出はじめるころから猛禽類のアカハラダカ、ハチクマは越冬地へ向かって渡る（図24-10）。

ススキの小さい種子はホオジロ科のホオジロ、カシラダカ、アオジなどが採食する。

・ 桜ん坊はカラスバトの好物だ：サクラの新芽や蕾は、アトリ科のウソ全長16cmやイカル全長23cm、シメ全長18cmなどが啄ばみ、開花を待ちメジロ、ヒヨドリが吸蜜に飛来し騒々しくなる。

ヒヨドリはメジロの吸蜜行動を邪魔をし独占しようとする。騒々しく鳴き散らす行動だ。

果実の頃は、その成熟の時期を見計らいカラスバトやハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリなどが枝にとまり採食する。

新上五島に生息するカラスバトは人家の近くに生育するサクラの果実を目当てに飛来することがある（図24-11）。



図24-12 イズセンリョウの果実

・雌雄異株のイズセンリョウ：常緑低木、ヤブコウジ科、5月ごろ総状花状で黄白色の花を開き、その後球形の白色の果実をつける。

モクタチバナ、タイミンタチバナなどと同じ仲間、いずれも野鳥が食物として好む果実をつける(図24-12)。

分布は、町内の各地に生育するが少ない。常緑広葉樹林の低木層を形成している代表的な種である。

果実はメジロ、ヒヨドリ、カラスバト、カワラヒワなどが採食する。



図24-13 オオイタビ

・カラス類の玩具か?：クワ科イタビカズラ、オオイタビ、ヒメイタビは、イチジク属でいずれも果実をつけ、イタビカズラ、ヒメイタビは人も野鳥も生食するがオオイタビの果実は最も大きい人が人は生食しない(図24-13)。

ところが、ハシボソガラス、ハシブトガラスはオオイタビの果実も嘴で挽ぎ取る。しかし、食べる様子はなく、挽ぎ取るだけで放置する。

遊びの行動だろうか。ハシブトガラスは、人が利用する玩具の滑り台で滑って遊ぶ行動を観察したことがある。



図24-14 ミミズアイの果実

・野鳥が好むミミズバイの果実：ハイノキ科の常緑亜高木、夏期に総状花序をだし白色の小さい花をつけ、翌年の10～12月には長楕円形の果実が黒紫色に熟する(図24-14)。

この果実は翌年の晩春まで残り、野鳥たちの貴重な食物となる。

前述したとおり若松島におおく、特に神部のえび屋の裏山に生育密度が高い。

果実は熟してから長い時間がたつと地表に落下しているが、それでも採食する鳥がいる。



図24-15 ハマナデシコ 各地の海岸近くに自生する

・海岸を飾るハマナデシコの花：町内の各地の海岸に自生する。ナデシコ科の多年草、海岸の崖地や港のコンクリートの隙間にも生育し開花し殺風景な岸壁を赤い花で飾っている。

そんな港が新上五島の各地にみられる(図24-15)。



図24-16 ハマナタマメ 各地の海岸近くに自生する

・海岸を飾るハマナタマメの花：町内の各地の海岸の砂浜や海岸近くに自生する。

常緑多年草のつる性の植物、マメ科で開花後に莢を生じ、長さ約10cmになる。莢の中には豆(種子)が数個できる。

この莢、豆を採食するのはハシボソガラス、ハシブトガラスである(図24-15)。



## 25. 濁・砥石山・佐尾



図 25-1 濁海岸と砥石山山系 2012.10  
谷沿いには天然記念物ヘゴ群落がみられる。  
竹内睦生 写



図 25-2 中通島最南端佐尾湊 背後砥石山 南北型の渡り鳥の休息地 ツブラジイ・ヤブツバキ群落内にカラスバトなど生息



図 25-3 魚食性のアオサギ



図 25-4 カラスザンショウの果実を採食中のメジロ  
2004.11.23  
アオバト、キジバト、カラスバトなどハト類

### 景 観

中通島の最南端の山が砥石山（233m）で尾根は虎星山・米山と南北に連なる。

砥石山の東側の海岸線は断崖絶壁であるが丸瀬鼻で小さく入込み、そこは礫浜で強い波で転んだ石は角がとれ楕円形の礫だ（図 25-1）。

谷間は植林地である。所々に常緑広葉樹が点在する。

小川の周辺には亜熱帯系の木生のヘゴが群生する。町内で一か所しか知られていない自生地であり県天然記念物に指定されている。

また、自生地の北限地としても貴重な生育地であり、手厚く保護保全すべきである（図 25-1）。

砥石山の西側は最南端の集落、佐尾漁港である。銅切崎と対岸の入鹿鼻の断崖絶壁が天然の防波堤となり天然の良港である。

千畳敷きとも言われる海食台が防波堤造成で一部が消失しているのは惜しい。

古い時代にはこの海食台で祝宴など催しがあり芸者による三味線と太鼓がなり響いていたと言う伝説がある。今は野鳥の休息地となっている清閑な港で佇んでいるとカラスバトの鳴き声、トビの鳴き声など哀愁を帯びた音色が漂う。

植生：この地域の植生はシイ類の萌芽林で、尾根の乾燥地にはツブラジイ、谷間にはスダジイが主な高木層を形成している。常緑広葉樹としてはヤブニッケイ、シロダモ、クスノキ、クロキなどの陰樹に交じってカラスザンショウ、アカメガシワ、西九州に分布するアオモジが亜高木。

アオモジはクスノキ科の落葉広葉樹の亜高木で雌雄異株で、果実や材には心地よい芳香がある。花期は3～4月で早春の花木で花材としても利用されている。

本種は二次林の遷移の段階では初期に出現する陽樹でカラスザンショウ・アオモジ・センダン・タラノキなども同じ陽樹である（図 25-4）。

シロダモ・クスノキ・タイミンタチバナ・ヤマハゼ・ヤマザクラなどの果実やクサギ・ヒサカキ・ネズミモチ・ヌルデ・ハマヒサカキ・トベラ・イヌザンショウ・サンショウなどの果実も野鳥が好んで採食する。

したがって、これらの植物の種子の分散には野鳥が一役を担っている。

留鳥のメジロは、いろいろな植物の開花期に吸蜜性であるが果実が実る時期には果実も採食する。

つまり、植物の授粉および果実を採食し種子分散の活動を担っている生態系の一員として重要な役割を果たしている。

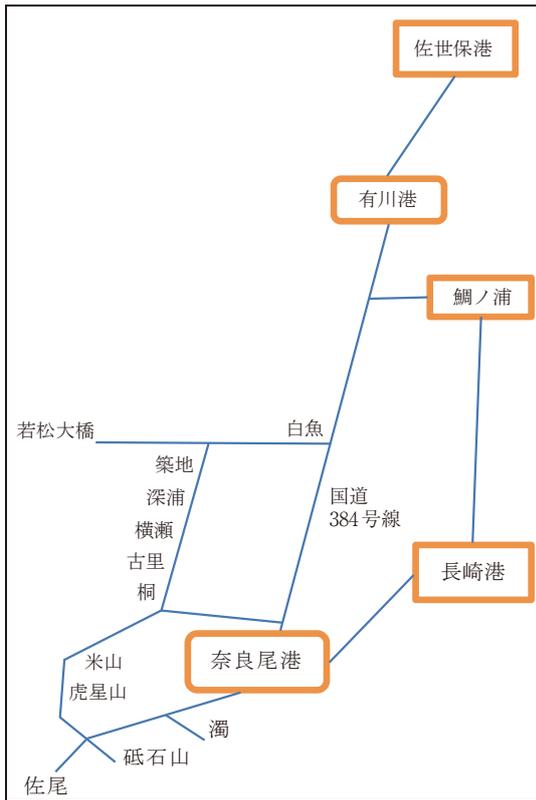


図25-5 コースガイド

### インフォメーション

#### 交通

① 有川港から384号線で青方、荒川・白魚を通過し奈良尾港へ、県道203号線を佐尾方面へ進むと、その途中で濁海岸へは左折、数十メートルで左折すると砥石山に着く。佐尾には道なりに直進すると最南端の漁港に着く。

② 鯛ノ浦港からは有川方面へ走行し国道384号線で左折し奈良尾方面へ走行、①と同じコースで走行する。

③ 奈良尾港からは県道203号線を佐尾方面へ走行し①と同じコースで道なりに走行すると目的地へ到着する。

※砥石山は林道で行きどまりであり終点でUターン可能である。

#### レンタカー ☎0959

- 有川レンタカー (有川地区) ☎42-0042
- 奈良尾レンタカー (奈良尾地区) ☎44-0364
- トヨタレンタカー (有川地区) ☎53-0100
- トヨタレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1200
- シンコーレンタカー (奈良尾地区) ☎44-1711

#### 施設

- トイレ：なし
- 駐車場：なし
- 宿泊：なし

#### 見どころ

- ・ あし湯：奈良尾港の出入口にあり便利、旅の疲れを癒してくれる。
- ・ 奈良尾のアコウ巨木：亜熱帯系のクワ科の高木、天念記念物に指定されている。根を潜り抜け参拝できる。
- ・ 濁海岸：美しい礫浜で荒波で転がされ楕円形、円形などいろいろな多様な形の礫がいっぱい。

入江の岩場に小魚が中型の魚に追われ、飛び上がり、それらの行動を知った鳥類が岩場上がった小魚を捕食する行動を観察できる場所でもあり、自然の生態系の食物連鎖を観察できる海岸である。

- ・ 濁のヘゴ群落：海岸の右岸に小川がある。その小川沿いに自生しているが生育状況は悪い。県天然記念物指定、ヘゴの北限地(図25-9)。

・ 米山展望台：視界360°標高234メートルで眼下に奈良尾港、西に若松瀬戸、若松瀬戸に点在する無人島など眺望が。また朝陽、夕陽の自然現象、タカ科ハチクマなど大型グループの観察を楽しむ場所として良好だ。



図25-6 センダンの果肉はヒヨドリの好物 2003.12.17



図25-7 ミサゴとトビ(下方)の空中戦



図25-8 モズのはやにえ 2003.12.16 佐世保で昆虫類やカエルなど両生類、爬虫類が獲物となる。



図25-9 天然記念物 ヘゴ自生地 2011.3.25 濁海岸付近



図25-10 シマカンギク 米山西斜面中腹 2008.11.19



図25-11 リュウキュウマメガキ 奈良尾郷 2008.11.20

・ 魚網・釣り具の防腐に：リュウキュウマメガキは自然からの恵みの防腐剤として、昔は利用した。柿の野生種で、歴史的価値がある。

・ 虎星山：標高254メートル、米山との連山で南北に連なっている。駐車場の上部は常緑広葉樹の自然林で高木層はツブラジイ、スダジイ、シロダモ、ヤブニッケイ、ヤブツバキなど、低木層はネズミモチ、ヒサカキ、トベラなどが生育している。薪炭林として伐採された萌芽林であり陽樹のカラスザンショウ、アオモジ、キブシなどもみられる。小型の陸鳥の渡りを林内で観察できる。

・ 砥石山：標高233メートル、林道は東側に位置し眺望は良くないが林内を移動する渡り鳥に遭遇することがある。

林道沿いはスギ、ヒノキなどの人工林であるが所々に常緑広葉樹が残っている。

前述したクスノキ科アオモジの高木は珍しい。種子が鳥類により散布されてから長い年月が経過していることを語り、渡り鳥により種子分散がなされ、南北に渡る鳥類個体群が尾根筋で脱糞された種子が発芽し生育したものであろう。

この種子を好んで採食する個体群はツグミ科の各個体群やホオジロ科の個体群である。アオモジの果実は秋に熟し春まで枝に着いているもの、地上に落下している果実があるが、それらの果実をアカハラ、クロツグミ、トラツグミ、マミチャジナイなどが採食し脱糞する。これらの個体群はハイノキ科のミズバイの果実も好んで採食する。秋～冬に黒紫色に熟した果実が林床に落下したものを表面採食行動を観察することができる。

つまり、ミズバイが集中して分布している場所は前述の鳥類が通過することによる。渡りの季節にミズバイが広く分布している場所で辛抱強く待つと飛来する。そんな場所が若松島の神部集落のえび屋の裏山だ。

・ 珍鳥がたどり着く砥石山の谷と尾根：北東向きの谷間には青い鳥ヤマショウビン、赤い鳥アカショウビン、八色の美しいヤイロチョウがホホビ、ホホビと鳴く、渡りの時期は5月下旬から6月上旬が最盛期である。

新上五島でヤイロチョウの鳴き声を最も速い時期に聞いたのは既に述べた3月8日で有川港の背後の鯨見山である。

この記録は日本でも最も早期であり東西型の渡り鳥であり、その実証である。



図25-12 ヤブツバキ 米山 2008.11.20



図25-13 町内の各地に少ない野生のサザンカ 砥石山



図25-14 モクタチバナの果実 イソヒヨドリ、カラスバトなどが好んで採食 中通島、若松島、有福島、天神山、頭ヶ島



図25-15 新上五島におおく生育する モクタチバナ



図25-16 ハマボウフ海岸に咲く 2012.10.18 佐尾

・極めて少ない旅鳥マミジロキビタキ：キビタキと類似、全長14cmで同じ大きさ。雄鳥の成鳥は眉斑が白色で目立つ、キビタキの眉斑は黄色で識別できる。

砥石山林道で観察でき、道路沿いの林縁に姿を現わすことがある。地鳴きはピツ・ピツと澄んだ声で鳴く。

予期せぬ近くまで飛来し人おじしない。旅の疲れか、2～3mほどまで寄って来る。木陰で木に化るとよい。近過ぎて写真は長いレンズは不向135mmレンズも準備しておくことが必要だ。

本種は平戸市の生月島や対馬市でも記録している。

長崎県内では男女群島、五島列島、平戸市生月島、対馬などの観察記録がある。

九州では、南から鹿児島、宮崎、熊本、長崎、佐賀、福岡などの県で記録がある(日本鳥類目録 改訂第7版 日本鳥学会2012)。

・吸蜜性のヒヨドリ・メジロ：ツバキ科のヤブツバキ、サザンカの開花を待っていたかのごとく蕾のころから訪れる(図25-13)。

ヤブツバキは新上五島では12月ごろから開花をひじめ3月ごろまで花期である。その期間は彼らの吸蜜行動が観察できる。

ヤブツバキの花の吸蜜を行ったメジロ、ヒヨドリは嘴および頭部、胸部までも黄色い花粉を着ている。前述したが花粉の媒介に一役を担っている。生態系の一員として活躍しているのである。

・カラスバト生息地・食物：カラスバトは植物の果実を好む。新上五島には果実、種子をつける樹種はおおい。モクタチバナもその一種である(図25-14、25-15)。

モクタチバナの種子分散には渡り鳥が関与しているものと推測される。渡り鳥が通過する出入り口に当たる土地に、モクタチバナは生育している。

前述した若松島の西岸に位置する滝河原、中通島の東に位置する頭ヶ島の南側、北側の海岸付近におおく生育している。

特に南側の田尻地区におおく生育しており、その地区の山をアクチ山と言っている。

モクタチバナを俗名で「あくちのき」という。本種はヤブコウジ科に常緑亜高木で、ヤブコウジ、マンリョウ、カラタチバナ、ツルマンリョウ、タイミンタチバナ、イズセンリョウなどと同じ仲間です。果実を結ぶ。海岸植物は、その生育地はコンクリートの隙間に生育している。



## 26. 珍種「シイノトモシビタケ」

### まえがき

生物発光するものに、節足動物の昆虫のホタル類の他に、単細胞動物のヤコウチュウ、多細胞動物のウミサボテンなどが一般によく知られている。

ヤコウチュウは海水を棒で攪拌するとキラキラと光る。そんな遊びも懐かしい。

昆虫の蛍はゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルなどがよく知られ蛍狩りを楽しんだものだ。

これらの昆虫には、発光細胞と反射細胞があり生物発光がみられ、これらは酵素反応であり、熱を発しない冷光である。

ところが、植物にも発光する種類があり一般によく知られているのがツキヨタケである。担子菌類のマツタケ目シメジタケ科に属し、夏、秋にブナ科の枯れ木やカエデ類の幹に発生し暗所で見ると、傘の裏面が発光することで有名であり、夏のキャンプ場でのエピソードも著者は体験したことがある。

今回、新上五島町内で発見されたものも担子菌類のキシメジ科に属する種である。発見者によると「八丈島の特産種とされていたが、1990年代以後、紀伊半島や九州方面でも発見され、2016年3月までに伊豆諸島、三重県、和歌山県、兵庫県、高知県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県などでも確認されている。発見者自身も2015年7月15日、五島市の福江島の南西部（玉之浦町）の林内で、夜に光る2個を発見したと言う。

### 新産地発見の動機

発見者はヒメホタルの生息地へ撮影に行ったところ光るものが見えた。よく調べると福江島で発見したのと同じキノコであった。

### 発見地での現地環境調査

著者は、文化財課とシイノトモシビタケ本体と生育状況、環境調査を実施した。

1) 調査年月日：2017年7月3日  
2) 発見者によると同年6月30日時点で生育確認できたのは、50個体

(本)であったが、7月3日に確認できたのは、20個体(本)ほどであった。

①5本を抽出し本体の傘、柄の長さ、太さを計測した。

②個体数・計測結果は次のとおり。

A 個体：傘の径 8mm、柄の長さ 15mm

B 個体：傘の径 5mm、柄の長さ 10mm

C 個体：傘の径 4mm、柄の長さ 15mm

D 個体：傘の径 11mm、柄の長さ 18mm

E 個体：傘の径 6mm、柄の長さ 13mm

平均値：傘の径 6.8mm、柄の長さ 14.2mm

傘の形状は鐘型

発生場所：A～Eともクリの風倒木で朽木であった。

### 風倒木の位置

山林の中腹斜面で方位は北西、傾斜角度は約30°、標高は約40m。

### 森林の状況

①代表的な照葉樹林：スダジイーイズセンリョウ群集。

②階層構造

高木層：スダジイ、タブノキ、クスノキ、



モチノキ、クリ、アブラギリなど

亜高木層：ヤブツバキ、ミズバイ、マダケなど

低木層：ヒサカキ、イズセンリョウなど

蔓植物：キジヨラン、林縁にサンショウなど生育していた。

陽樹：陽樹であるキブシは照度不足のため枯死していた。つまり、陽樹と陰樹の混交林の遷移はすすみ極相（クライマックス）に達している森林であった。



図26-1 シイノトモシビタケ寄生木、風倒木で朽木



図26-2 シイノトモシビタケが上向きに発生

### シイノトモシビタケ分布

まえがきの項でも述べたとおり、現在の時点では、発見者によると「本州の東京都（八丈島）、三重県、和歌山県、兵庫県、四国地方の高知県、九州地方の長崎県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖

縄県など」に、長崎県では今回の新上五島町、五島市の福江島（玉之浦町）などで発生が確認されている。本町でも調査が進むにつれ、他の分布域が十分に推測できる。

### 胞子の散布

胞子の散布は風による散布、動物による散布が推測される。本種の胞子散布は風によるものと推測している。

風により運ばれてきた胞子は、風倒木の朽木などがあり環境条件が生育に適した場合には、その場所で朽木に寄生し発生するものと考えられる。

本町内に発生している環境は北西向きの30°の斜面にある「風倒木の朽木」であった。そのような環境を好むのであろう。本種は光合成の必要はなく（図2参照）、寄生植物である。生育のための栄養源は宿主（ブナ科植物）の朽木そのものが栄養源である。

生態系の視点からは、生産者（A）・消費者（B）・分解者（C）のうち、菌類はCの役割である。この森林生態系の構成で生物群集は、生産者・消費者・分解者から構成され極相林に達している素敵な森林であることが今回の調査で解析できた。森林を伐採することなく現状を維持する保護が必要である。周辺を伐採するとシイノトモシビタケも次第に消失するであろう。

### 保護・保全

前述のとおり、典型的な貴重な生態系の素晴らしい照葉樹林の森林生態系である。永遠に「手つかず」の森林として保護すべきである。



地主さんは勿論、本町にとっても貴重な森林生態系をしている森林群落であることを認識し子孫のために「自然の宝」遺産として保護すべきである。著者は、専門的な見地から保護・保全を推奨する。保全策が必要な事態、状況が生じた場合は協力したい。

### 観光資源としての活用

現在の場所への立ち入りは関係者以外の入山は禁止し保護すべきである。しかし、貴重な「観光資源」ともなり得る。暗闇に発光する「冷光」には、ホタルともに関心が高いであろう。何とか観光資源に活かしたい。そのためには、人為的に増殖しなければならない。先にも述べたとおり現在の場所に多勢の人々が立ち入ると絶滅が心配される。ではどんな方策が考えられるか。それは、他の朽木に増殖を図り、その寄生した宿主を「人もきのこも安全」な場所へ移動させ観光資源として活用すべきだ。住民と町の行政の立場の人々が、どのように活用すべきかは計画すべきである。

### 怪しく光る冷光

発見者が夜間に撮影した「シイノモシビタケ」

